

XII 滝里20遺跡の調査

XII 滝里20遺跡の調査

1 調査の概要

(1)遺跡の位置

滝里20遺跡は空知川の右岸、標高143.0～143.7mの自然堤防上に位置する。本遺跡は滝里遺跡群の中で最も南にある滝里26遺跡から1.4km北側に位置する。近接する遺跡では、北側約150mには平成9年度に調査した滝里29遺跡が、南側約150mには平成10年度に調査した滝里3遺跡がある。

(2)調査の方法

遺跡は耕作及び宅地造成による攪乱を全体的に受けており、包含層の残存状況はよくないことが予想された。このため調査は耕作・造成による攪乱層であるⅠ層をバックフォアにより除去することとし、その結果、空知川の流れにほぼ並行する2条の包含層を確認した(図Ⅶ-3)。包含層は人力による調査に切り替え、4×4mの小グリッドを用いて調査を行った。

(3)調査結果の概要

調査の結果、遺構は土壇1基、焼土5ヶ所を検出した。分布域は全て包含層残存区域内である。焼土は2ヶ所に分かれ、調査区の北西端に4ヶ所(F-2～5)、調査区の南端に1ヶ所検出されている(F-1)。土壇(P-1)は調査区の南西端で検出した。

出土遺物の総点数は467点で、内訳は土器23点、石器等444点である。土器は縄文時代前期から晩期まで各時期のものが出土しているが、晩期のものが最も多い。石器等は、石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー類等の剥片石器、磨製石斧、たたき石などの礫石器が出土している。その他、剥片、焼成礫等も出土している。(立田 理)

2 基本土層

基本土層は次のように設定した。

Ⅰ層 耕作土(耕作・造成による攪乱層)

Ⅱ層 灰褐色土(遺物包含層)

Ⅲ層 黄褐色土(基盤層)

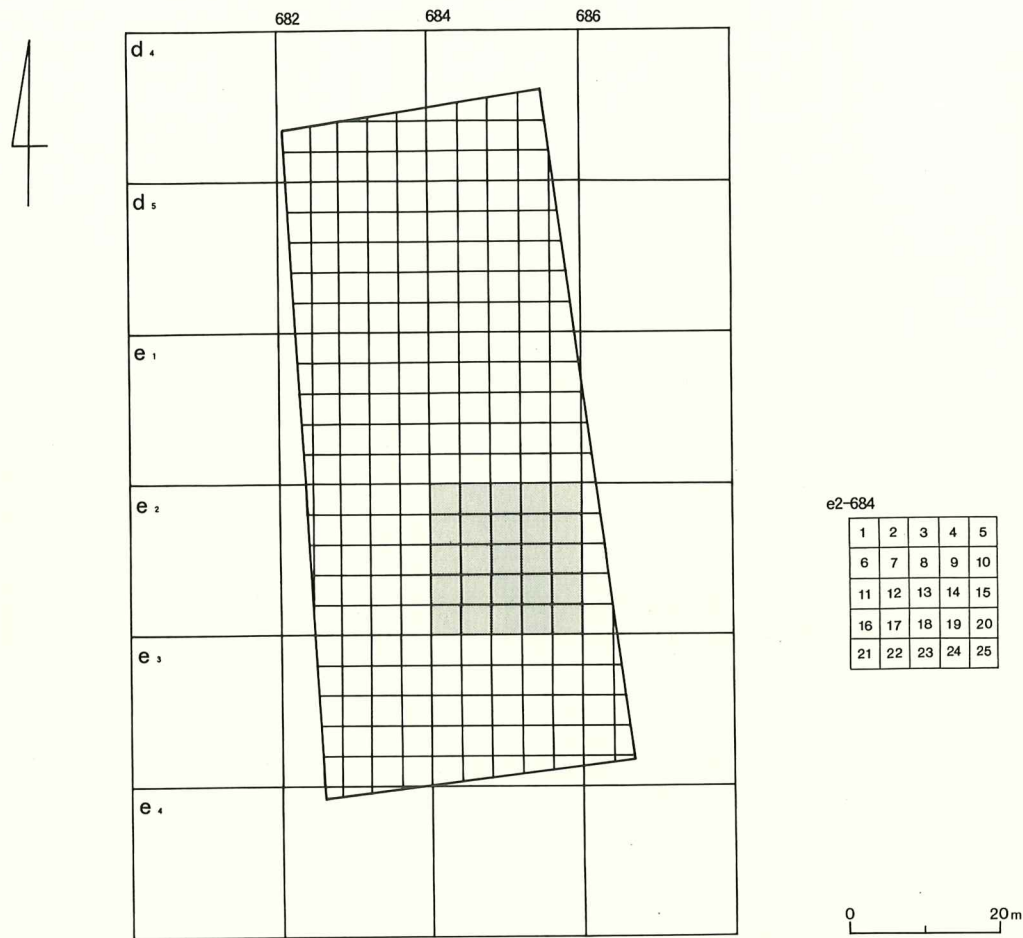
また、Ⅱ層以下に包含層類似の黒褐色土の層位が1枚確認できた。Ⅱ層の調査終了後、トレンチを設定して掘り下げたが、遺物が全く出土しなかったため、Ⅲ層までの調査をもって終了することとした。

表Ⅺ-1 出土遺物一覧

名 称	点 数	名 称	点 数	名 称	点 数
Ⅱ 群 土 器	1	ナ イ フ 類	3	石 核	1
Ⅲ 群 土 器	4	スクレイパー類	18	剥 片	109
Ⅳ 群 土 器	3	石 斧	7	R フ レ イ ク	6
Ⅴ 群 土 器	15	研 磨 石 材	1	焼 成 礫	151
石 鏃	12	石 斧 原 材	4	礫	92
石 槍	17	石 斧 剥 片	9		
石 錐	5	た た き 石	7		
つまみ付きナイフ	1	石 皿	1	出土遺物総合計	467



圖Ⅻ-1 遺跡位置圖



図XII-2 グリッド設定図

3 遺構

本遺跡で検出された遺構は、土塋1基、焼土5ヶ所である。

(1) 土塋

P-1 (図VII-6 図版VII-3)

位置：e₂-686-21 規模：0.8×0.4/0.63×0.22/0.18m

平面形：楕円形 長軸方向：N-80°-W

出土遺物：なし

Ⅲ層上面を精査中に黒褐色土の落ち込みを検出した。半截して土塋であることを確認した。平面形は塋口、塋底ともに東西に長い楕円形を呈する。塋底は平坦で、壁は緩やかである。

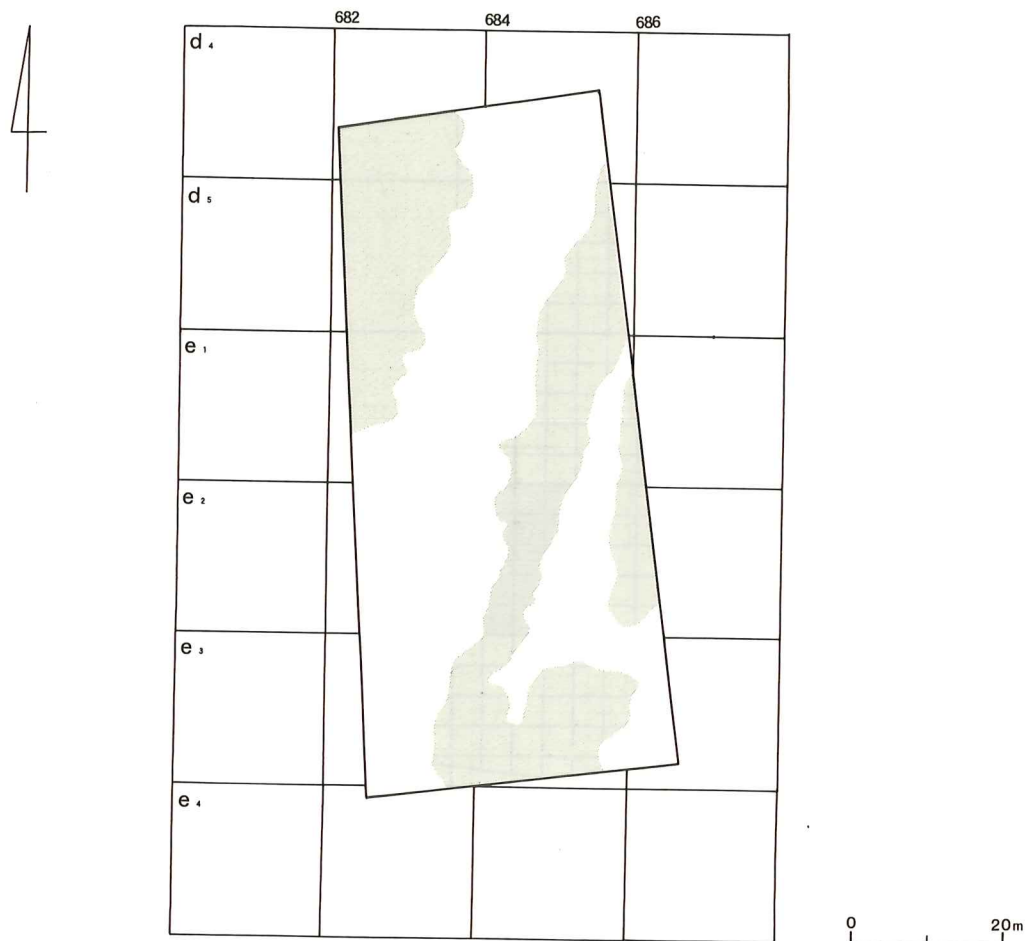
(2) 焼土

F-1 (図XII-7 図版XII-3)

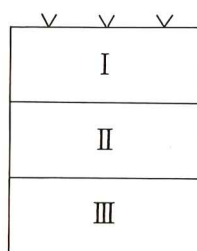
位置：e₃-684-12 規模：0.68×0.46/0.06m

出土遺物：なし

Ⅲ層上面で検出した。時期は不明であるが、Ⅱ層中に形成されたとみられるため、縄文時代に属する可能性が高い。



図Ⅻ-3 包含層残存範囲



図Ⅻ-4 基本土層図

F-2 (図Ⅻ-7 図版Ⅻ-3)

位置: d₅-682-2 規模: 0.36×0.23/0.05m

出土遺物: なし

Ⅲ層上面で検出した。時期は不明であるが、Ⅱ層中で形成されたとみられるため、縄文時代に属する可能性が高い。

F-3 (図Ⅻ-7 図版Ⅻ-3)

位置: d₄-682-22 規模: 0.46×0.26/0.06m

出土遺物: なし

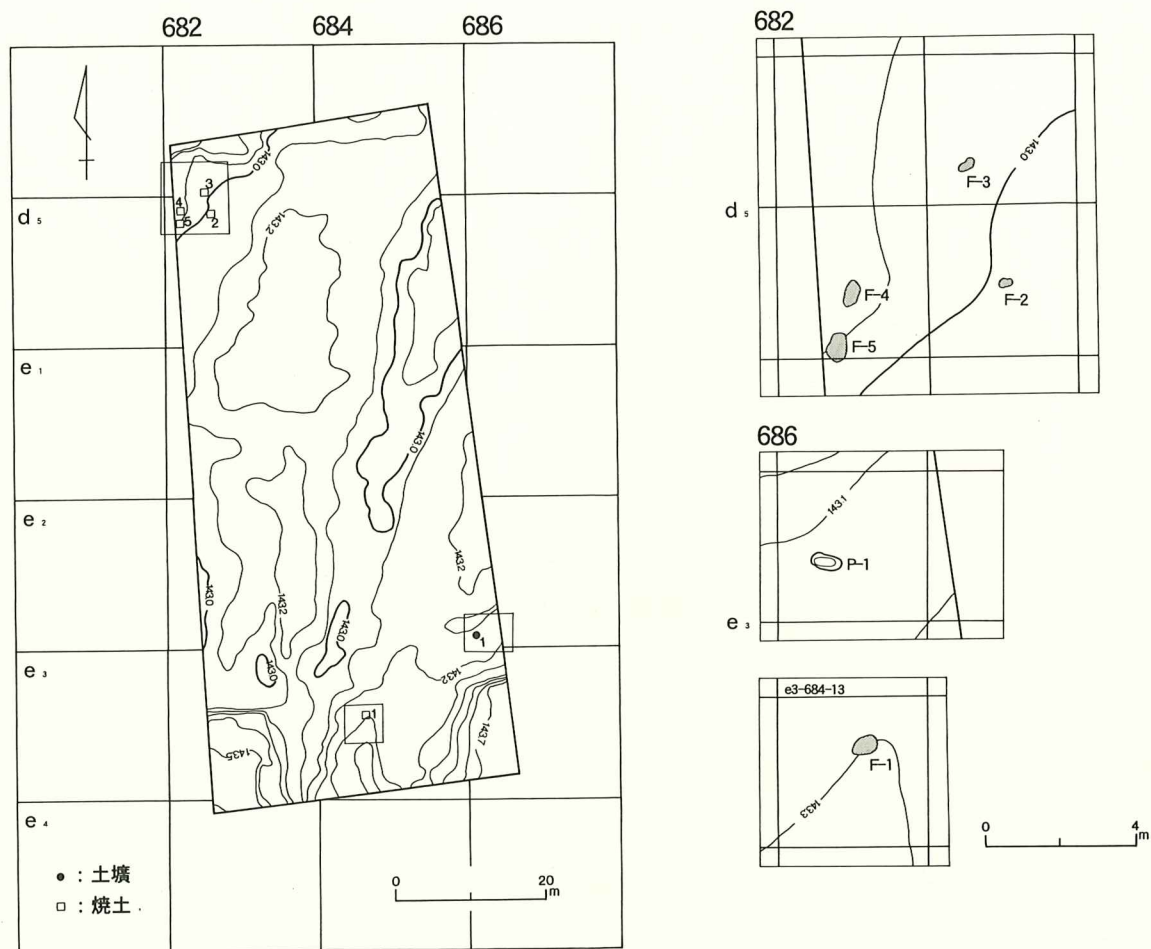
Ⅲ層上面で検出した。時期は不明であるが、Ⅱ層中で形成されたとみられるため、縄文時代に属する可能性が高い。

F-4 (図Ⅻ-7 図版Ⅻ-3)

位置: d₄-682-1 規模: 0.67×0.42/0.08m

出土遺物: なし

Ⅲ層上面で橙色土ブロックを含む灰褐色土の落ち込みを検出した。Ⅱ層との境界は明瞭である。土層の状態から、本焼土は運ばれたものである可能性が高い。時期は不明であるが、検出面と土層の状



図Ⅻ-5 遺構位置図

態から、縄文時代のものとみられる。

F-5 (図Ⅻ-7 図版Ⅻ-3)

位置：d₄-682-1・6 規模：0.78×0.42/0.10m

出土遺物：なし

Ⅱ層上面で検出した。黒褐色土に黄褐色の焼土粒子が斑状に混じるやや不明瞭な焼土である。時期は不明であるが、Ⅱ層で形成されたとみられるため、縄文時代に属する可能性が高い。(立田 理)

4 包含層出土の遺物

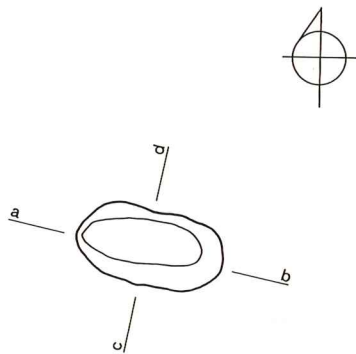
(1) 土器

包含層から出土した土器は縄文時代前期(Ⅱ群b類)、縄文時代中期(Ⅲ群a類)、縄文時代後期(Ⅳ群)、縄文時代晩期(Ⅴ群)がある。出土総点数は23点で、晩期土器が最も多く、65%を占める。土器はまとめて出土することなく、小破片で表面の摩滅したものがほとんどである。

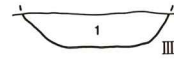
(Ⅱ群b類)

滝里29遺跡で出土している押引文の胎土に類似する破片が1点出土している。表面の摩滅が激しく、文様もはっきりしないため、図示しなかった。

P-1

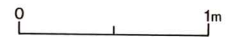
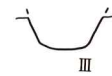


a 143.40m b



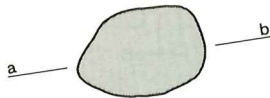
1 黒褐色土 白色砂を多く含む しまりあり

c 143.40m d



図XII-6 P-1

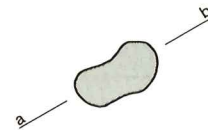
F-1



F-2



F-3



a 143.50m b



1 暗赤褐色土

a 143.10m b



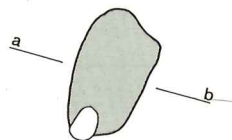
1 暗赤褐色土

a 143.10m b



1 淡灰褐色土 灰褐色土、赤褐色焼土粒を斑状に含む ややシルト質

F-4

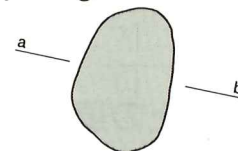


a 143.00m b

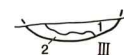


1 淡灰褐色土 橙色土ブロックを若干含む 弱粘質

F-5



a 143.00m b



1 濁黒褐色土 黄橙色焼土粒を若干含む やや緻密 粘質
2 黄橙色シルト質土 やや緻密



図XII-7 焼土

(Ⅲ群a類)

4点出土している。円筒土器上層式に相当するとみられる小片である。裏面が剥落した小破片であり、図示しなかった。

(Ⅳ群a類) (図Ⅻ-8-1 図版Ⅻ-4)

1点出土している。1は、やや外反する口縁部である。口縁下部に幅の狭い貼付帯がつけられている。貼付帯上は斜行する縄文が施される。口唇断面は角形で、貼付帯と口縁部との間になで調整される。胎土は粗く石英、小砂利が多く混入する。色調は暗赤褐色を呈する。

(Ⅳ群c類) (図Ⅻ-8-2 図版Ⅻ-4)

2点出土している。2は、無文の口縁部である。口唇は角形で、口唇、裏面は丁寧になで調整される。胎土には砂粒が多量に混入する。

(Ⅴ群土器) (図Ⅻ-8-3 図版Ⅻ-4)

15点出土している。3は、浅鉢の口縁部とみられるものである。器表面に縄文が施される。摩滅が激しいため、原体は不明である。

(2) 石器

包含層から出土した石器は424点である。内訳は石鏃、石槍、つまみ付きナイフ等の剥片石器が44点、磨製石斧、研磨石材、石斧原材、石斧剥片等の磨製石器群が17点、たたき石、石皿などの礫石器が6点である。その他は、剥片、Rフレイクが合わせて115点、礫が91点である。焼けた礫である焼成礫は151点と多く出土している。

石鏃 (図Ⅻ-9-1、2 図版Ⅻ-4)

石鏃は破片も含めて、12点出土している。内訳は有茎のものが6点、破片が6点である。

1、2はともに、有茎である。2は横長剥片を素材とし、腹面は縁辺部にのみ調整される。

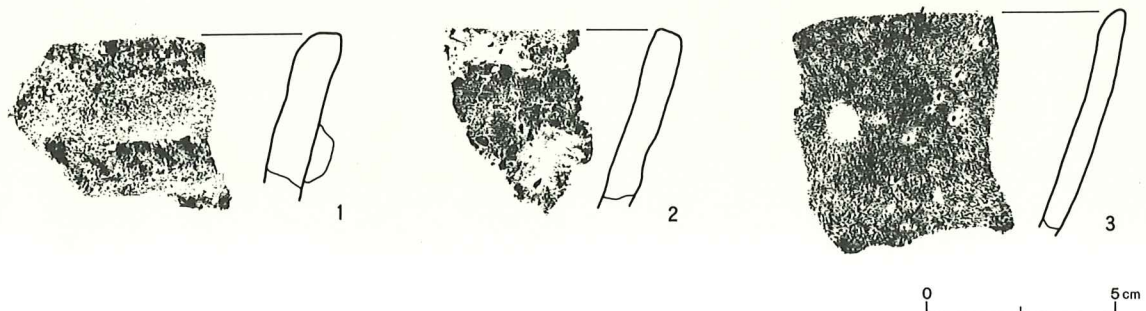
石槍 (図Ⅻ-9-3～5 図版Ⅻ-4)

石槍は破片も含めて、17点出土した。内訳は有茎石槍が8点、破片が9点である。

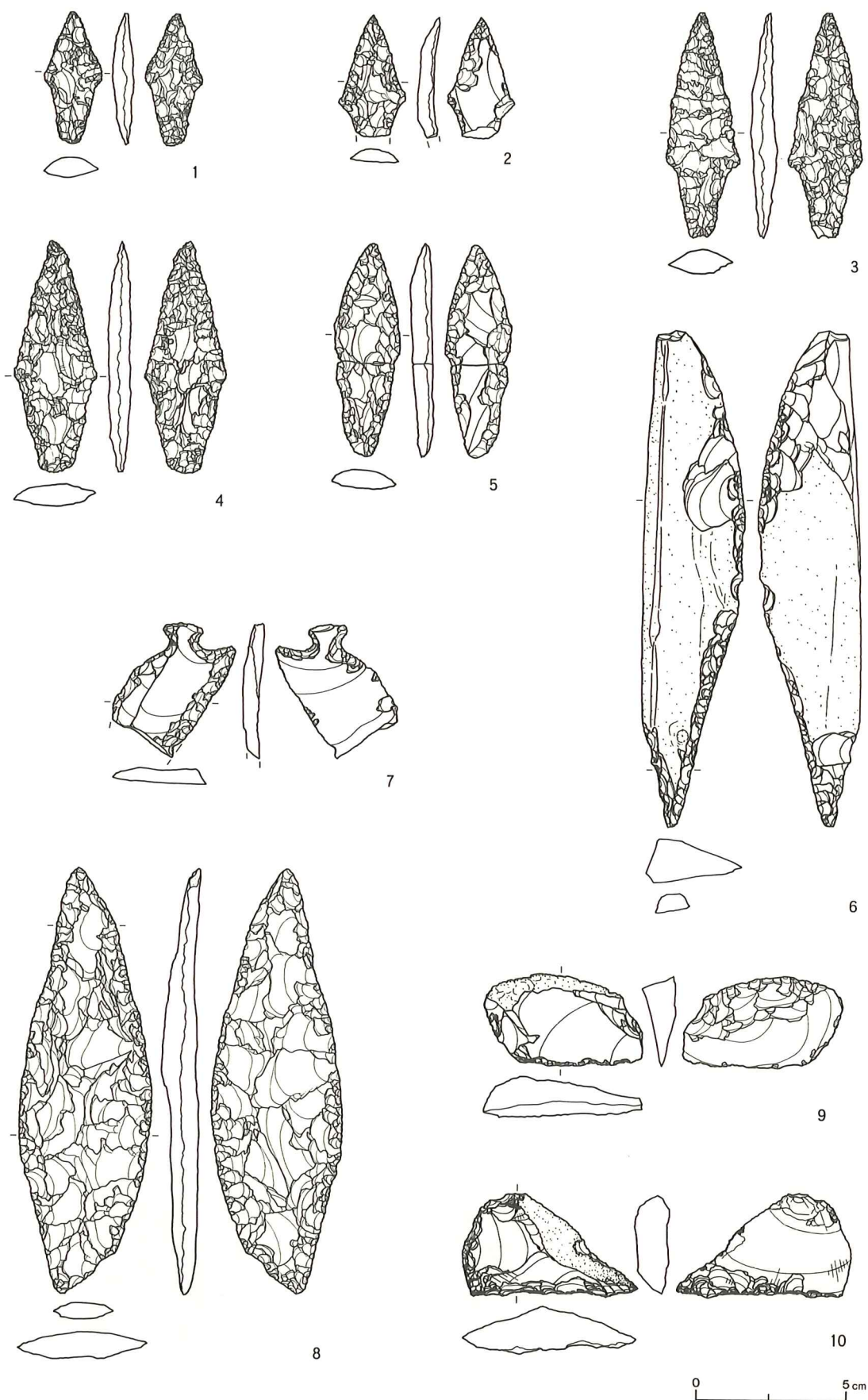
3～5は有茎石槍である。いずれもほぼ左右対称に作られるが、加工はやや粗い。3は他と比較して丁寧な作りである。先端は欠けている。4は製作途中で破棄されたものとみられ、先端部分は作られていない。5は身部と茎部の区別の不明瞭なもので、製作途中で破棄されたものである可能性がある。

石錐 (図Ⅻ-9-6 図版Ⅻ-4)

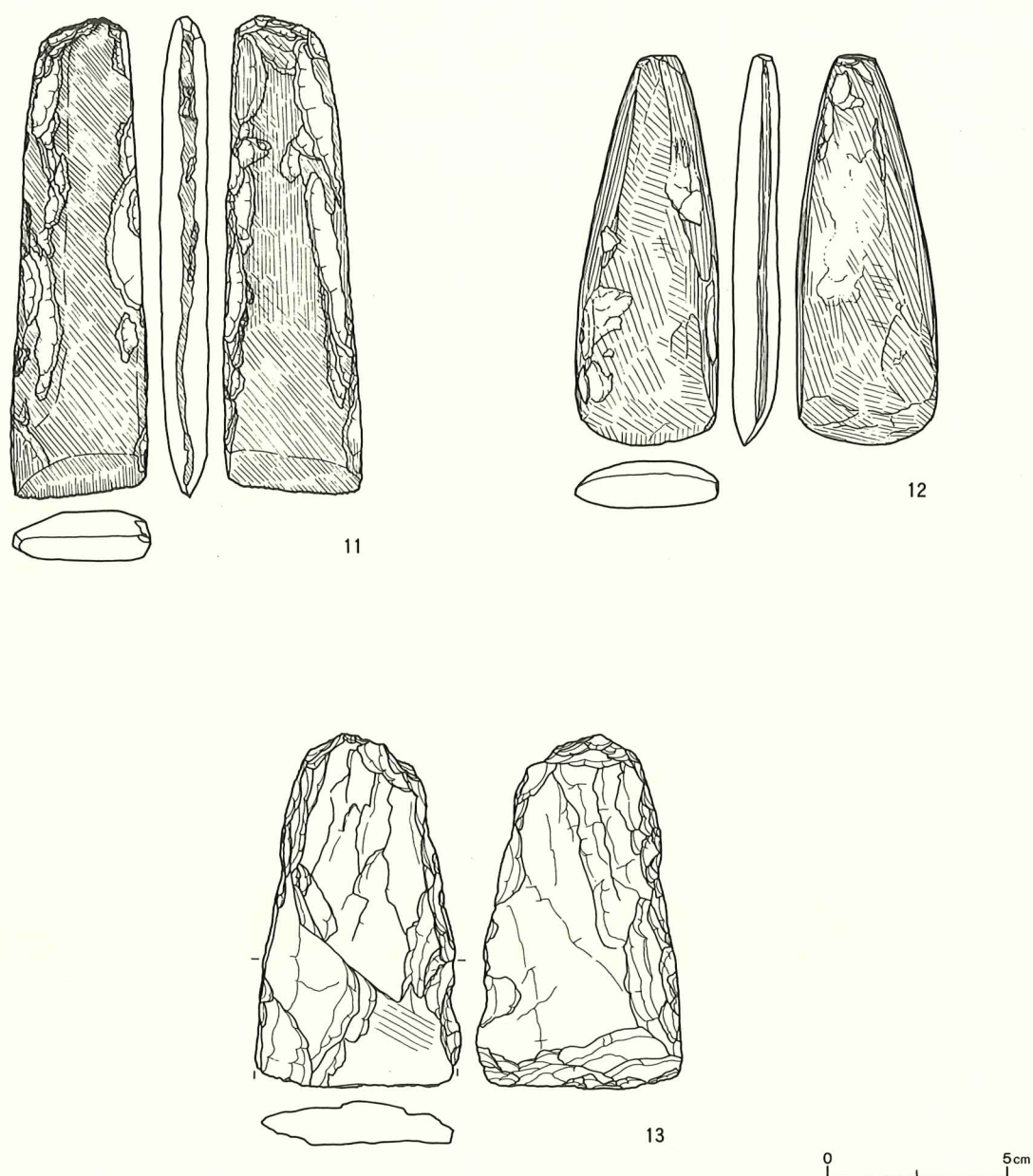
石錐は破片も含めて5点が出土している。内訳は棒状の石錐が2点、剥片の一部に機能部を作出し



図Ⅻ-8 包含層出土の土器



図Ⅸ-9 包含層出土の石器(1)



図XII-10 包含層出土の石器(2)

たものが2点、破片が1点である。6は細長扁平の棒状原石を利用して機能部を作出したものである。機能部は丁寧な両面加工が施される。

つまみ付きナイフ (図XII-9-7 図版XII-4)

つまみ付きナイフは1点出土している。7は、つまみ部分以外の全ての則縁に背面調整により刃部が作出される。

ナイフ類 (図XII-9-8 図版XII-4)

ナイフ類は3点出土している。内訳は、柄部が付くものが1点、いわゆる両面調整石器が1点、破片が1点である。8は両面調整によって刃部が作出されるもので、図上背面右上に一部原石面を残している。

スクレイパー類 (図XII-9-9、10 図版XII-4)

4 包含層出土の遺物

スクレイパー類は、破片も含めて18点出土している。内訳は、剥片の側縁に刃部が設けられるものが4点。挟りこみを持つものが2点。剥片素材の形状を大きく変えないものが7点。破片が5点である。9・10は素材の剥片の大きさをほとんど変えずに直線状の刃部が作出される。

磨製石斧（図Ⅻ-10-11～12 図版Ⅻ-4）

磨製石斧は破片も含めて7点出土している。内訳は磨製石斧が2点、破片が5点である。

11は、短冊状を呈する石斧である。基部は薄く、刃部は偏刃を呈する。12は撥形のものである。刃部は円刃を呈する。

研磨石材（図Ⅻ-10-13 図版Ⅻ-4）

1点出土している。13は製作途中に折断したものとみられる。

（立田 理）

表Ⅻ-2 遺構規模一覧

遺構名	位置	規模(堀口:長軸×短軸/堀底:長軸×短軸/深さ) m	平面形	長軸方向
P-1	e ₂ -686-21	0.8×0.4/0.63×0.22/0.18	楕円形	N-80°-W
F-1	e ₃ -684-12	0.68×0.46/0.06		N-80°-E
F-2	d ₅ -682-2	0.36×0.23/0.05		N-77°-E
F-3	d ₄ -682-22	0.46×0.26/0.06		N-59°-E
F-4	d ₄ -682-1	0.67×0.40/0.08		N-9.5°-E
F-5	d ₄ -682-1・6	0.78×0.42/0.10		N-9°-E

表Ⅻ-3 包含層出土土器一覧

時期	前期	中期	後期	晩期	合計
分類	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	Ⅴ群	
点数	1	4	3	15	23

表Ⅻ-4 包含層出土石器等一覧

名 称	分類記号	点 数	名 称	分類記号	点 数	名 称	分類記号	点 数
石 鏃	ⅠA5c	6	ナイフ類	ⅢB2	1	石斧原材	ⅣC2	4
	ⅠA8	6		ⅢB8	1	石斧剥片	ⅣC8	9
石鏃小計		12	ナイフ類小計		3	たたき石	ⅤA1	6
石 槍	ⅠB1	8	スクレイパー類	ⅢC4	4		ⅤA2	1
	ⅠB8	9		ⅢC6	2	たたき石小計		7
石槍小計		17		ⅢC7	7	石 皿	ⅥB8	1
石 錐	ⅡA1	2		ⅢC8	5	石 核	ⅨA1	1
	ⅡA3	2	スクレイパー類小計		18	剥 片	ⅨB	109
	ⅡA8	1	石 斧	ⅣA1	2	Rフレイク	ⅩA1	6
石錐小計		5		ⅣA8	5	焼 成 礫		151
つまみ付きナイフ	ⅢA3	1	石斧小計		7	礫		92
ナイフ類	ⅢB1	1	研磨石材	ⅣC1	1	総 計		444

表Ⅻ-5 包含層出土掲載土器一覧(拓影)

挿図番号	発掘区	層位	分類	図版番号
図Ⅻ-8-1	d ₄ -682-21	Ⅱ	Ⅳa	図版Ⅻ-3
-2	d ₅ -682-10	Ⅱ	Ⅳc	
-3	e ₃ -684-11	Ⅱ	Ⅴ	

表Ⅻ-6 包含層出土掲載石器等一覧

挿図番号	発掘区	層位	分類番号	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ g	石材	図版番号
Ⅻ-9-1	d ₅ -684-25	Ⅱ	ⅠA5-c	4.4 × 1.4 × 0.7	4.01	黒曜石	Ⅻ-3
-2	e ₃ -682-5	Ⅱ	ⅠA5-c	(4.05) × 3.25 × 0.7	3.61	黒曜石	
-3	d ₅ -684-20	Ⅱ	ⅠB1	7.5 × 2.45 × 0.9	10.48	黒曜石	
-4	d ₅ -684-19	Ⅱ	ⅠB1	7.2 × 2.2 × 7.5	12.95	黒曜石	
-5	d ₅ -684-14	Ⅱ	ⅠB1	7.1 × 2.2 × 8.5	11.42	黒曜石	
-6	d ₅ -684-8	Ⅰ	ⅡA3	16.6 × 3.4 × 1.45	71.44	黒曜石	
-7	e ₃ -682-5	Ⅱ	ⅢA3	(4.5) × 4.1 × 1.7	7.89	黒曜石	
-8	d ₅ -682-1	Ⅱ	ⅢB2	14.2 × 4.4 × 1.3	53.94	黒曜石	
-9	e ₁ -684-9	Ⅱ	ⅢC7	3.1 × 5.35 × 1.15	15.89	黒曜石	
-10	d ₄ -682-24	Ⅱ	ⅢC7	3.45 × 5.8 × 1.2	20.28	黒曜石	
Ⅻ-10-11	d ₄ -682-14	Ⅱ	ⅣA1	13.3 × 3.85 × 1.4	114.11	片 岩	
-12	e ₃ -682-23	Ⅱ	ⅣA1	10.9 × 4.0 × 1.85	90.37	泥 岩	
-13	e ₁ -682-16	Ⅱ	ⅣC1	9.9 × 5.8 × 1.2	98.24	片 岩	

XII 滝里26遺跡の調査

XII 滝里26遺跡の調査

1 調査の概要

滝里26遺跡は、空知川の支流である奈江川右岸の沖積錐上に立地している。標高は約150mである。遺跡のすぐ横を流れる奈江川上流では、蛇紋岩が採掘されている。

滝里遺跡群の中では最も富良野市寄りの最上流に位置する遺跡である。奈江川沿いの奈江林道を溯り、道道奈江富良野線を経由し、道道留辺蘂上富良野線に出ると、美瑛川の支流である二股川上流の分水嶺に達することができ、富良野市を経由せずに旭川方面へ向かうことができる。

遺跡周辺は水田造成により土地改変がかなり進んでおり、ダム用地となる以前には、水田や宅地として利用されていた。調査区は二つに分かれており、南東側調査区は面積3,100m²、北東側の面積は1,300m²の合計4,400m²である。

調査は、包含層の残存状況を確認するため、南東側調査区に南北に2本、東西に1本のトレンチを掘開した。その結果、宅地跡等の攪乱が激しく、包含層は一部にしか残存していなかった。調査は攪乱層を重機と人力ですべて除去した後に開始した。南西側は造田により削平され、南側は奈江川の護岸工事のため旧河川が埋め立てられていた。

調査の結果、土壌8基と焼土33か所が確認された。土壌は南東側調査区の中央付近で台地状の地形上にまとまって確認された。これら土壌出土の土器片はすべて縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭のものである。土壌墓と考えられるP-8は、墳底にベンガラが撒かれ、琥珀製平玉と石製品が出土している。また、検出面からはⅥ群a類土器の小形の浅鉢が2点出土している。そのほか礫が充填されているもの(P-1・2)、検出面から遺物が多く出土したもの(P-3)、覆土中に厚い焼土が形成され、その上面から遺物が出土するもの(P-6)などがある。

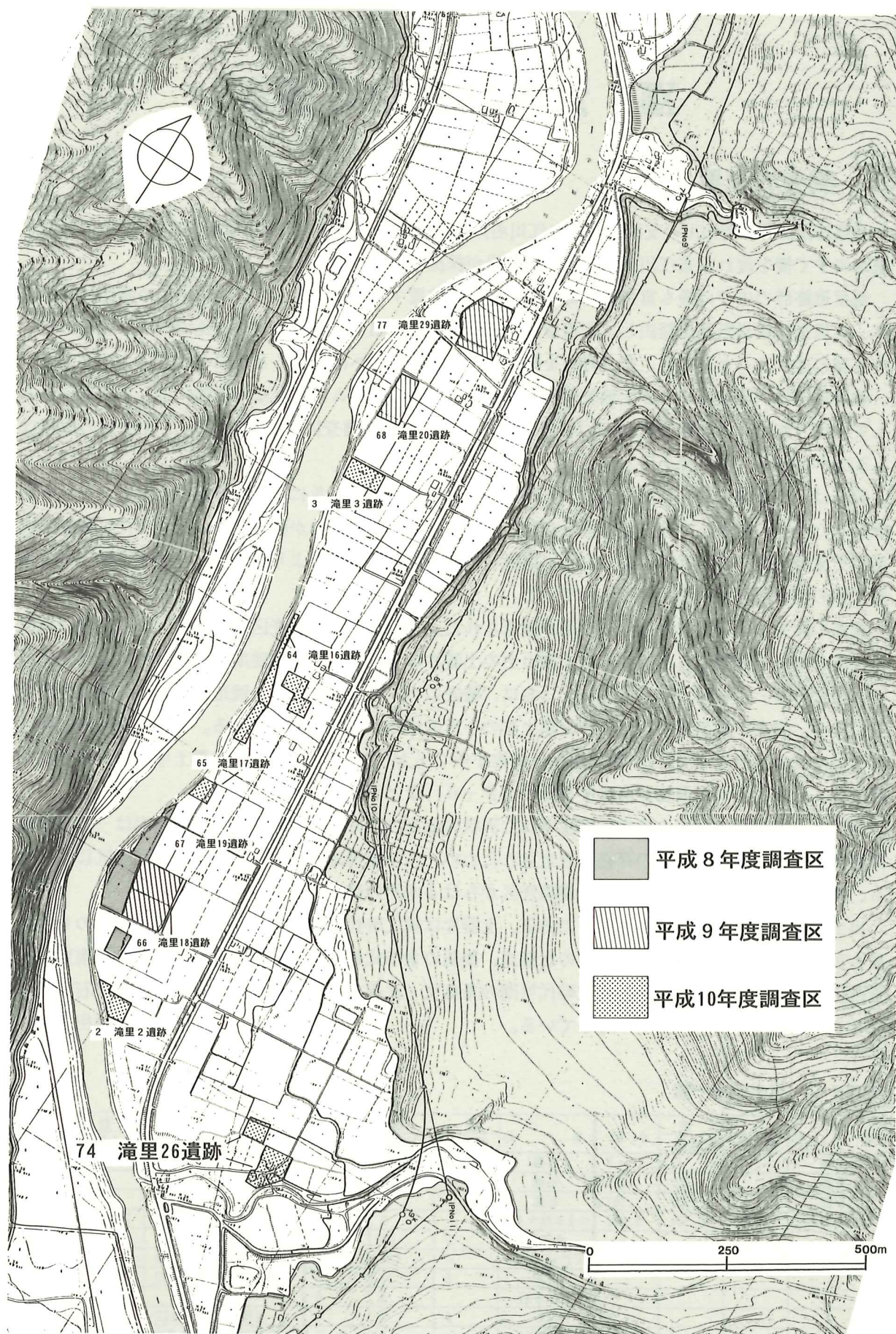
焼土は、南東側調査区の北側に確認された沢状の地形内に分布している。沢状の地形は一部北西側調査区へ続いており、焼土の存在が想定されたため、当初遺構確認区であった北西側調査区についても、すべて手掘調査区とした。北西側調査区からは4か所の焼土が検出されている。

出土遺物点数は以下の表のとおりである。土器片は縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭のものが最も多く、このほかに縄文時代中期の北筒式、後期の余市式のものも少量みられる。また、南東側調査区南側で5点だけであるが、縄文時代早期の条痕文・沈線文土器が出土している。石器は石鏃、スクレイパーなどの剥片石器が卓越している。(村田 大)

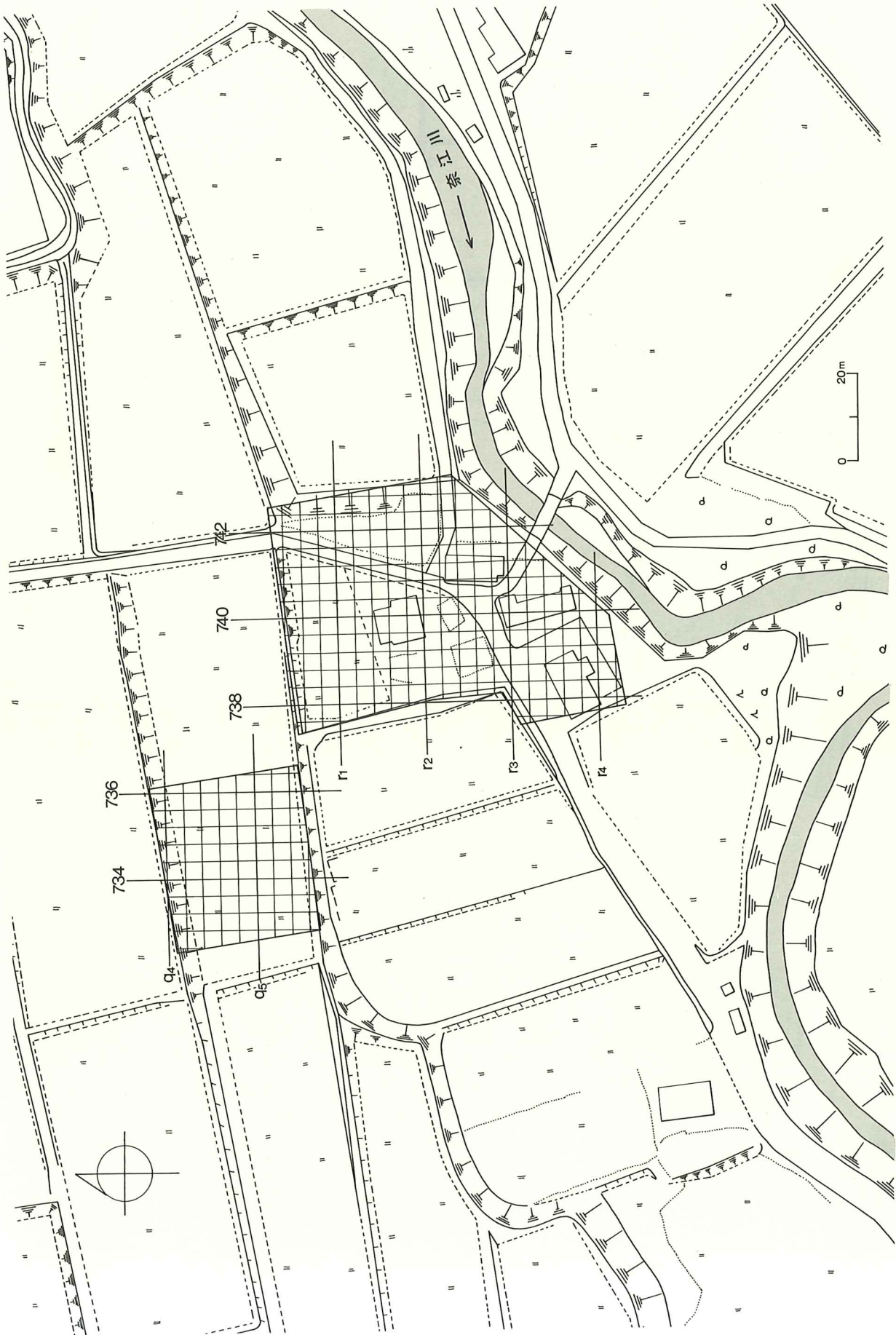
表XII-1 出土遺物一覧

名 称	点 数		小 計	名 称	点 数		小 計	名 称	点 数		小 計
	遺 構	包含層			遺 構	包含層			遺 構	包含層	
I 群		5	5	石鏃	19	140	159	石核		20	20
Ⅲ群		251	251	石槍	11	23	34	原石		4	4
Ⅳ群		167	167	石錐		9	9	R フレイク	4	60	64
V・Ⅵ群	1,317	5,524	6,841	つまみ付ナイフ		4	4	フレイク	1,090	17,694	18,784
				ナイフ	2	26	28	加工痕礫		8	8
				スクレイパー	6	133	139	石製品	4	1	5
				石斧	5	34	39	礫・礫片	37	60	97
				たたき石		4	4	その他		20	20
				台石	6	3	9	玉類	1,822		1,822
				すり石		1	1	石器等計	3,006	18,245	21,251
土器等計	1,317	5,947	7,264	砥石		1	1	合計	4,323	24,192	28,515

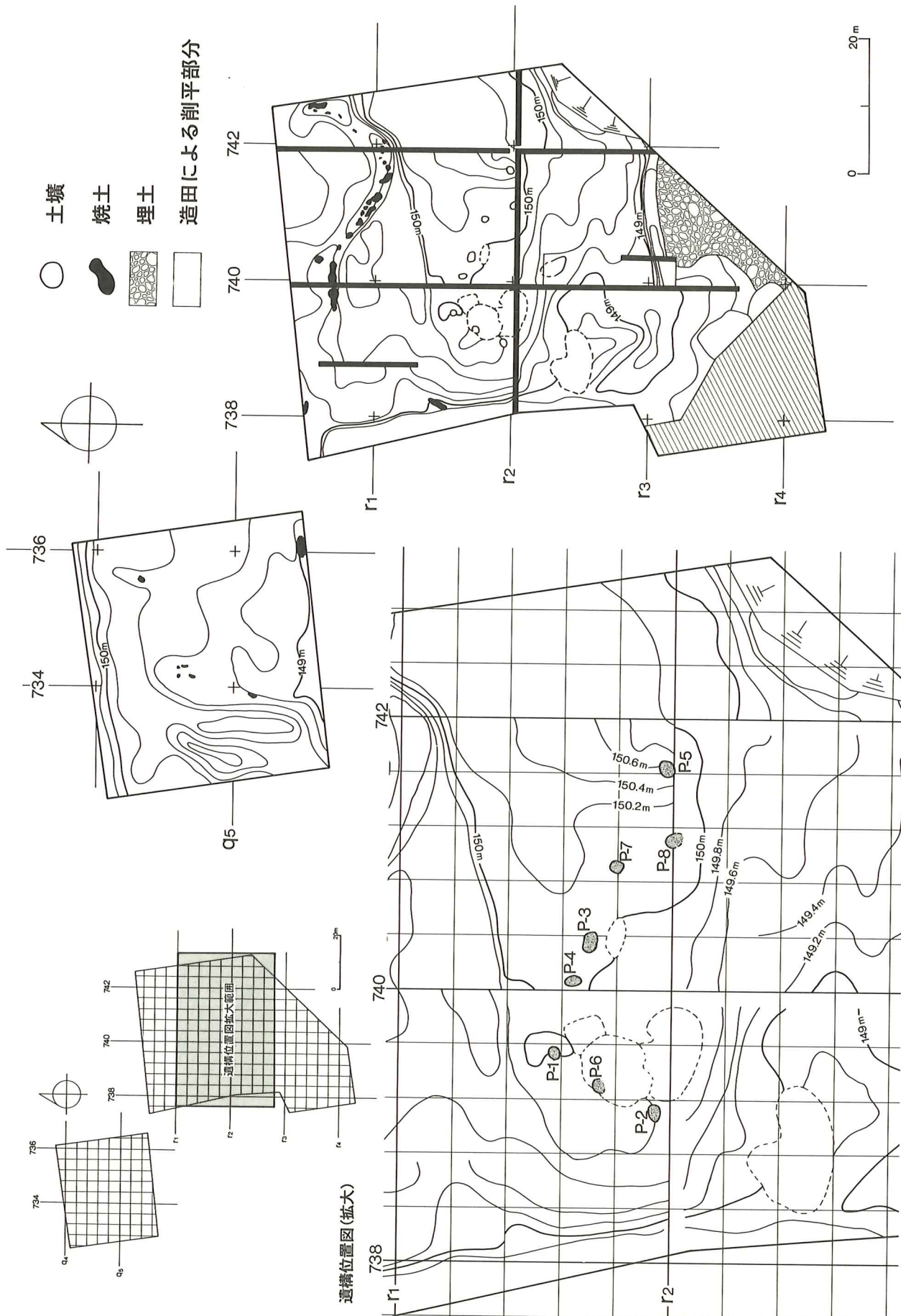
1 調査の概要



図Ⅷ-1 遺跡の位置図



図Ⅻ-2 発掘区設定図及び旧土地利用図



図Ⅲ-3 最終面の地形と遺構位置図

2 基本土層

基本土層は以下のとおりである。漸移層は分層していない。また、遺跡の地形的概観についてもここで若干触れる。

I 層：表土、耕作土、家跡等の攪乱及び埋土。

耕作土は水田造成の盛土または床土や客土である。遺物は出土していない。

II 層：黒色腐植土

遺物包含層である。縄文時代早期から続縄文時代の遺物が出土している。縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭のものが多い。沢状地形の一部と奈江川沿いの肩の部分では色調から3層に分層できるが、不整合面はなく腐植土層としては一連のものである。砂礫や砂質粘土を少量含む。

II a 層：黒色腐植土

II 層と変わらない。砂礫を少量含む。

II b 層：暗褐色腐植土

砂質粘土がやや多い。上面で焼土が検出される。

II c 層：黒色腐植土

粘性あり。上面で焼土が検出される。

III 層：灰褐色土礫層

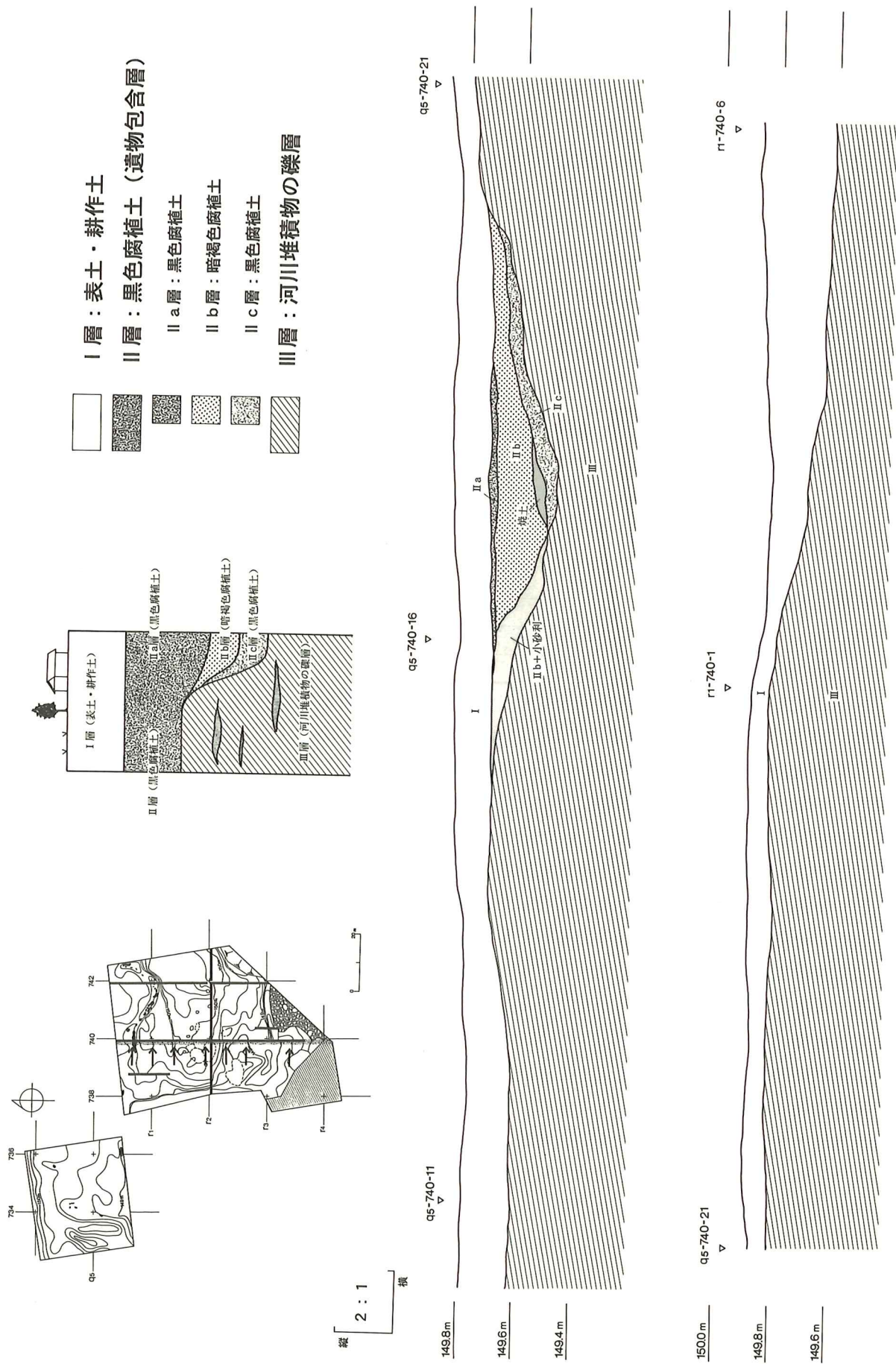
ほとんどが小礫で構成される河川堆積物。沖積錐を形成する層で、小礫、砂礫、砂質粘土の互層が見られる。

図示した土層断面図は、南東側調査区のほぼ中央を南北に縦断する740ラインの東側断面である。なお、土層堆積状況を分かりやすくするために、縦方向を2倍に拡大している。

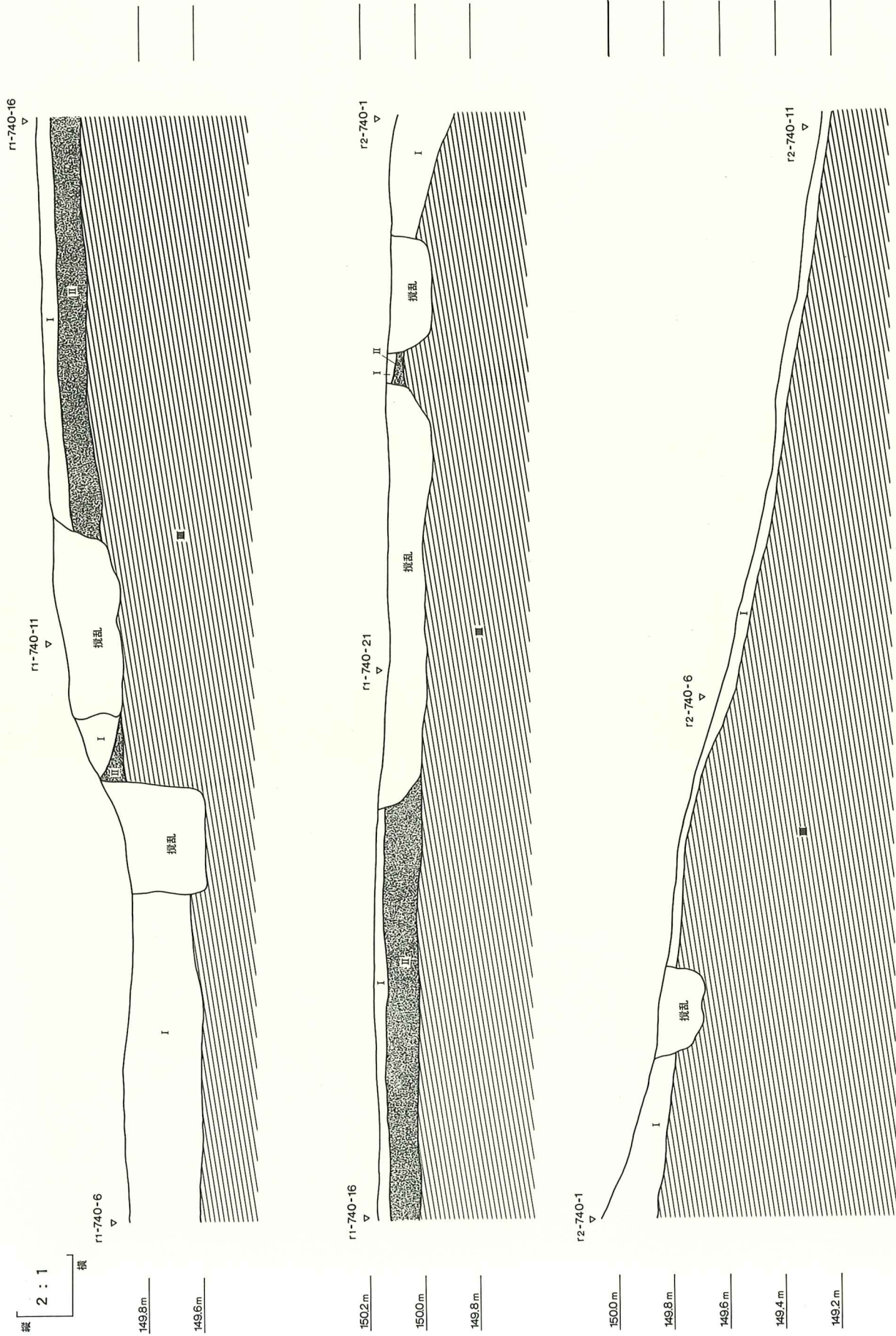
南東側調査区の北端から $r_1-740-6$ 区の中程までは水田造成のためII層は削平されている。I層は水田の床土と客土である。遺物は出土していない。 $q_5-740-16$ 区に沢状地形の断面が観察され、II層が残存している。 $r_1-740-11$ 区から $r_2-740-1$ 区の間はII層の遺物包含層が残存しているが家跡等の攪乱が激しい。8基の土壇が確認されたのはこの間である。 $r_2-740-1$ 区から $r_2-740-21$ 区の中程までは奈江川に向かってなだらかな緩斜面となっている。II層は削平されていた。 $r_2-740-16$ 区の道路跡の下に僅かに残存していたが、遺物はほとんど出土しなかった。 $r_2-740-21$ 区で奈江川の護岸工事の際に埋め立てた土の下から包含層が僅かに残存していた。ここから、縄文時代早期中葉の条痕文・沈線文土器が出土している。

北西側調査区は削平と盛土によって作られた平坦面で、盛土下と沢状の地形にII層が残存していた。沢状の地形は、南東側調査区から連続するものである。

滝里12遺跡の報告の中で述べたように、空知川右岸の主な支流が形成した沖積錐上に立地する遺跡は本遺跡を含め3遺跡ある。ほかの2遺跡（滝里12遺跡、滝里安井遺跡）は空知川との合流点に立地しているのに対し、本遺跡は上位の段丘崖と空知川のほぼ中間地点に位置している。このことは、ほかの2遺跡が同じ沖積錐上の立地でも、空知川に向かう緩斜面上であるのに比べ、この遺跡は奈江川へ向かって傾斜する斜面に立地することと関係しているのであろう。（村田 大）



図Ⅳ-4 土層断面図(1)



図Ⅲ-5 土層断面図(2)



図Ⅱ-6 土層断面図(3)

3 遺構と遺構出土の遺物

(1) 土壌

土壌は8基が確認された。位置は南東側調査区の中央付近に限られる。北側の沢状地形と奈江川にはさまれた台地状の地形となっている。ここは家跡等の攪乱が最も激しい地区で、包含層のほとんどが失われており、攪乱の影響がなければ、多くの土壌が存在した可能性がある。

P-1 (図XII-7 図版XII-2)

位置: r₁-738-14 規模: 0.98×0.76/0.76×0.66/0.15m
平面形: 楕円形 長軸方向: N-36°-W 標高: 149.9m

II層調査中に、礫がまとまって出土したことから、周辺を精査し黒色土の落ち込みとして確認した。覆土は小礫が混じる暗褐色土で、単一層である。壙底は平坦で、壁はややゆるやかに立ち上がる。

遺物出土状況は、礫が10点まとまって出土したほか、覆土にV群土器の小破片と細かい黒曜石のフレイクが散見される程度である。

遺物は、1がV群土器の口縁部付近の破片である。縄線文が見られる。2は石鏃の基部である。

時期: 周辺の遺構及び出土遺物より、縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭と考えられる。

(村田 大)

P-2 (図XII-7 図版XII-2)

位置: r₁-738-23 規模: 1.15×1.08/0.99×0.91/0.26m
平面形: 不整円形 長軸方向: - 標高: 149.8m

II層調査中に、礫がまとまって出土したことから、周辺を精査し黒色土の落ち込みとして確認した。覆土は砂質黒色土で、単一層である。壙底は平坦で、壁はややゆるやかに立ち上がる。

遺物出土状況は、覆土からV群土器の小破片が4点出土したほかは、礫が22点出土している。大きさは人頭大のものから径2~3cmのものまでである。22点中6点が披熟している。まとまって出土した礫の中に台石が1点混じっている。

時期: 周辺の遺構及び出土遺物より、縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭と考えられる。

(村田)

P-3 (図XII-8 図版XII-2-5)

位置: r₁-740-16・17 規模: 1.50×1.02/1.39×1.26/0.11m
平面形: 楕円形 長軸方向: N-71°-W 標高: 150.1m

II層調査中に遺物が集中して出土したので周囲を精査したところ黒色土の落ち込みを確認した。覆土は1層でベンガラを極少量含む。III層を浅く掘り込んで構築されている。壙底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。遺物は確認面に多く、壙底面からの出土は少ない。土壌墓である可能性がある。

1~4はV群c類土器。地文はすべてLR原体の縄文である。1は図XIII-25-27・28と同一個体と思われる。2は沈線の施された胴部破片。5はVI群a類土器の底部破片。上げ底である。6は平基の三角形鏃。先端が欠損している。7・8は柄のないナイフ。作りは粗雑である。8は周縁のみを両面加工して刃部を作出している。9~11はスクレイパー。12は撥形の石斧。打ち欠きによって調整された後に全面に研磨を施している。片刃の円刃である。6~11は黒曜石製、12は片岩製。

時期: 出土遺物などから縄文時代晩期後葉から続縄文時代初頭と考えられる。(酒井秀治)

P-4 (図XIII-9 図版XIII-3-2)

位 置: $r_1-740-16$ 規 模: $1.04 \times 0.82 / 0.87 \times 0.68 / 0.26 \text{ m}$

平 面 形: 隅丸長方形 長軸方向: $N-33^\circ-W$ 標 高: 150.1 m

P-3を確認後周囲を精査したところ黒色土の落ち込みとして確認された。覆土は2層に分かれる。Ⅲ層を浅く掘り込んで構築されている。壙底面は平坦で壁は急激に立ち上がる。壙底面に炭化物がみられる。遺物は覆土中から出土した。性格は不明である。

1~3はV群c類土器で、地文はLR原体による縄文である。胎土は砂粒と石英を多く含み磨滅が激しい。1は口唇部に縄端圧痕文を施し、直下にLR原体による縄線文と沈線文を並行に施している。2は口縁部に1条の縄線文が施される。3は口縁部破片で地文のみである。4は凸基の三角鋸。先端部を欠損している。造りは粗雑である。

時 期: 出土遺物などから縄文時代晩期後葉と考えられる。(酒井)

P-5 (図XIII-10・11 図版XIII-3-5)

位 置: $r_1-740-24 \cdot 25 \cdot r_2-740-4 \cdot 5$ 規 模: $1.26 \times 1.07 / 0.94 \times 0.93 / 0.44 \text{ m}$

平 面 形: 不整楕円形 長軸方向: $N-62^\circ-E$ 標 高: 150.3 m

Ⅱ層調査中に黒色土の落ち込みとして確認された。覆土は1層で小砂利を多く含む黒色土にベンガラが少量含まれる。壙底はⅢ層を掘り込んで構築され、ほぼ平坦で壁は急激に立ち上がる。遺物の出土状況は壙口部中央に集中して出土している。土壙墓と考えられる。

1~3はVI群a類土器である。1は口縁部破片。口唇部は丸みを帯びた角形で、圧痕を施し、口縁部には少なくとも3条の並行したLR原体による縄線文が施されている。2は胴部破片。3は上げ底の底部破片である。4・5は凸基の三角鋸。先端部が欠損している。6~8はスクレイパー。6は縦長のフレイクの端部に刃部を作出している。4~8は黒曜石製。9は乳棒状の石斧。全面を敲打によって調整したのち刃部を研磨によって作出している。両刃の円刃である。閃緑岩製。

時 期: 出土遺物などから続縄文時代初頭と考えられる。(酒井)

P-6 (図XIII-11 図版XIII-4)

位 置: $r_1-738-19$ 規 模: $(1 \times 0.93 / 0.7 \times 0.76) / 0.3 \text{ m}$

平 面 形: 円形 長軸方向: — 標 高: 149.9 m

Ⅱ層調査中に、トロニエム岩の台石が出土したことから、周辺を精査し黒色土の落ち込みとして確認した。東側と南側は、家跡の攪乱で失われている。壙底は皿状で、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土は壙底付近の砂質暗褐色土の上に赤褐色焼土が見られる。焼土の周りの覆土2層には炭化物が多く混入する。

遺物出土状況は、中央の焼土より上層からほとんどの遺物が出土した。覆土上層にV群c類の土器が1個体分まとまって出土している。石器は石鋸、ナイフ、スクレイパーなどがあり、ほとんどが破片で出土した。1は復元できたV群c類土器で、横走る沈線で文様が描かれ、口唇上面には縄の圧痕と棒状工具による刺突が加えられている。6の石鋸は披熱している。13は片岩製の石斧である。

時 期: 出土遺物から、縄文時代晩期後葉のV群c類土器の時期と考えられる。(村田 大)

P-7 (図XIII-10 図版XIII-5-2)

位 置: $r_1-740-18 \cdot 23$ 規 模: $1.08 \times 0.95 / 0.85 \times 0.66 / 0.16 \text{ m}$

平 面 形: 楕円形 長軸方向: $N-24^\circ-W$ 標 高: 150.2 m

II層調査中に黒色土の落ち込みとして確認された。土壌の北側は鉄パイプによって攪乱されている。覆土は1層で小砂利を多く含む黒色土で、黒曜石のフレイクチップが多く混入する。壙底はIII層を掘り込んで構築され皿状である。遺物は覆土中から出土した。性格は不明である。

1・2はVI群a類土器の口縁部。胎土は砂粒や石英を多く含む。1は口縁部に円形の刺突がある。2は内面にLR原体による縄線文が施されている。3は剥片の縁辺を利用して刃部を作出したスクレイパーである。黒曜石製。

時期：出土遺物などから縄文時代初頭と考えられる。

(酒井秀治)

P-8 (図XIII-12・13 図版XIII-5-6・-6)

位置： $r_1-740-23 \cdot r_2-740-3$ 規模： $(1.04)/(0.88)/0.26\text{m}$

平面形：円形

長軸方向：—

標高：150.2m

r_2 ラインのトレンチ調査の際に確認された。覆土は2層に分かれる。1層は小砂利を含む黒褐色土で、ベンガラが少量検出された。2層は暗赤褐色土でベンガラが多く含まれる。覆土中には琥珀玉がばらまかれたような状況で出土する。壙底はIII層を掘り込んで構築されほぼ平坦で、薄くベンガラが撒かれている。壁は急激に立ち上がる。土壌墓と考えられる。

遺物の出土状況は壙口部検出面付近から土器が、壙底面からは石器類と石製品・琥珀玉が出土している。琥珀玉以外の遺物はベンガラの上面から出土している。土壌の東側から出土した乳棒状の石斧の基部には白い粘土が付着している。石製品(16・17)はいずれも故意に折られていたと思われる。16は土壌の西側と北側の壁付近から出土したものが接合し、17は土壌中央部のベンガラの上面から出土した2点が接合している。石製品(17)の下の壙底部から琥珀玉が5列確認できる状況で出土している。また、土壌北側と西側の壁際から琥珀がまとまって出土している。出土状況から壙底面に琥珀玉をばらまきベンガラを散布し、その後石器類を入れ、琥珀玉を散布しながら埋め戻したと思われる。

1・2・4・5はVI群a類土器。地文はLR原体の縄文である。1は平底の浅鉢形土器で口縁部に穿孔がみられる。2つが対になっていたものと思われる。口唇部は丸みを帯びており、作りが雑なため波状のようになっている。2はやや上げ底の浅鉢形土器である。口唇部に圧痕を施す。文様は縄文のみである。底面がわずかに張り出す。4は口唇部に刻みを入れたもの。5は浅鉢形土器の底部破片で周縁に縄圧痕が施される。3はV群c類土器。平行沈線が施され、一部に赤色顔料が塗布される。3～5は胎土に砂粒や石英を含むが、1・2は茶褐色の砂粒と石英を含み、色調は灰白色である。6～11は三角形鏃。6・7は平基、8～11は凸基である。12・13はスクレイパー。12は表面に原石面を残す。6～13は黒曜石製。14は撥形の石斧。剥離による成形を施し、刃部はやや左上がりの直刃である。片岩製。15は乳棒状の石斧である。全面を敲打によって整形し、円刃である。閃緑岩製。16・17は側縁を鋸歯状に加工された黒曜石の石製品である。16は左側を欠損しているが、同様の鋸歯状の加工が左側にもされていたと思われる。17は鋸歯状になっている各先端部はほとんどが欠損している。左右対称を意識して製作されたものと思われる。

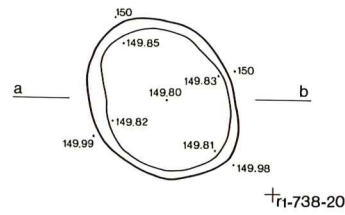
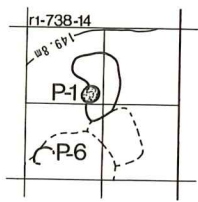
18～47は琥珀製の平玉である。琥珀製の平玉は完形のもの631個、破片1,191個であった。完形品の平均値は直径0.67cm、厚さ0.28cm、重さ0.11gである。直径0.6～0.8cmのものが多く、滝里遺跡群出土の琥珀製平玉の中では小さめである。18～33は片面から、34～47は両面から穿孔されたものである。穿孔方向の確認できたものは556個でそのうち両面から穿孔されたものは96個であった。

時期：出土遺物などから縄文時代初頭と考えられる。

(酒井秀治)

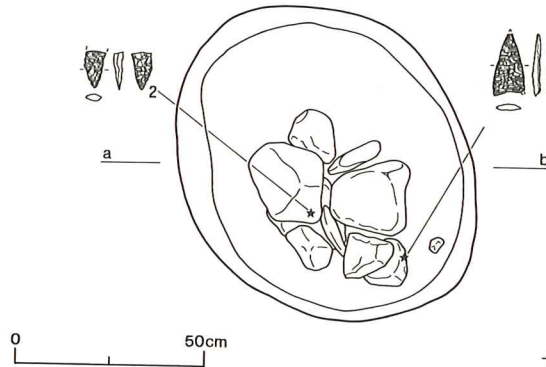
3 遺構と遺構出土の遺物

P-1



1 暗褐色土 小礫混じる

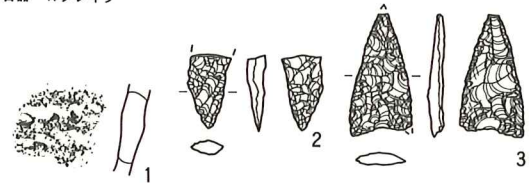
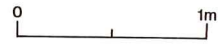
[遺物出土位置図]



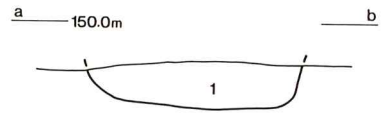
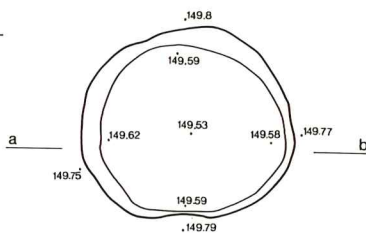
[凡例]

★剥片石器・Rフレイク

r1-738-20



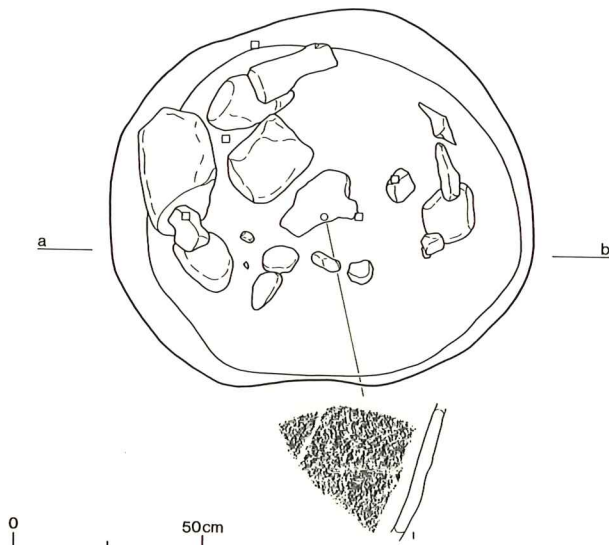
P-2



1 黒色土 砂質



[遺物出土位置図]



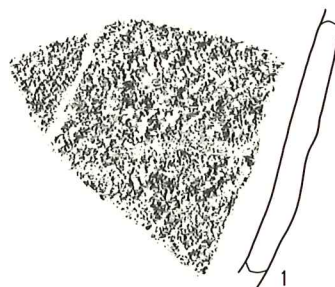
a 150.0m



[凡例]

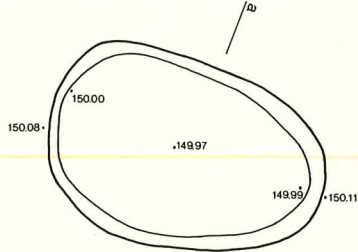
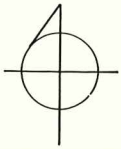
○土器

□礫



図ⅩⅦ-7 P-1・2

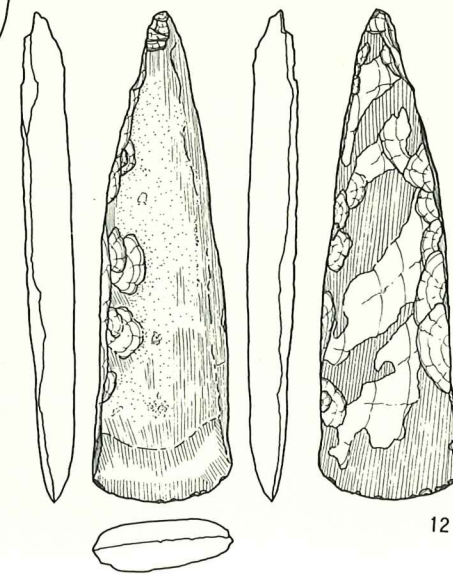
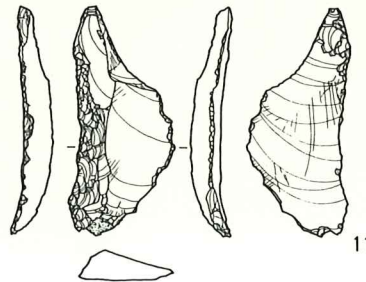
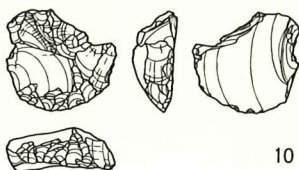
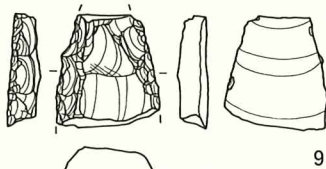
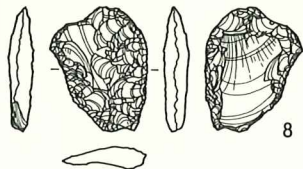
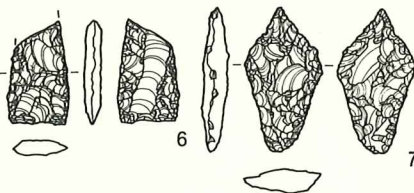
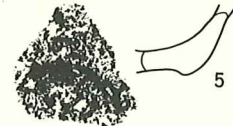
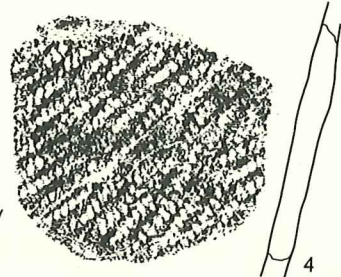
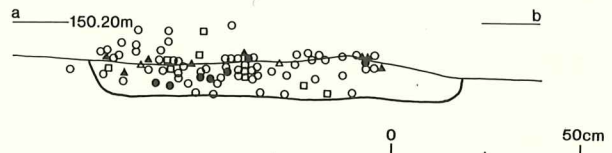
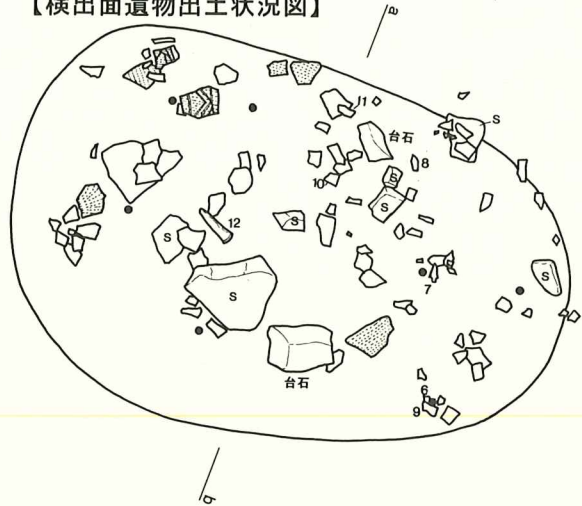
P-3



1 黒色土 小砂利を含み、かたくしまる
ベンガラが覆土中に少量検出される。

0 1m

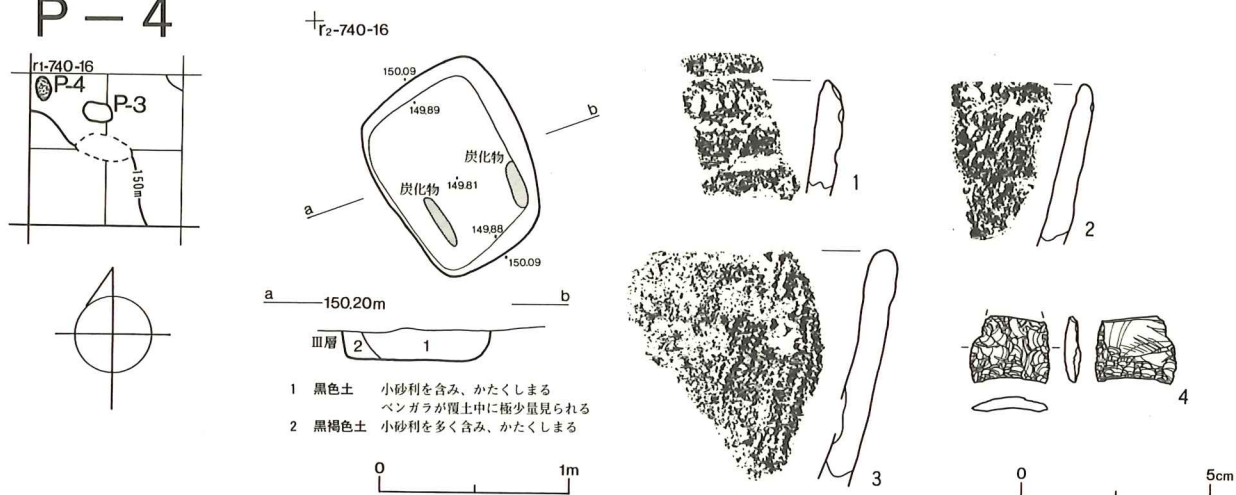
【検出面遺物出土状況図】



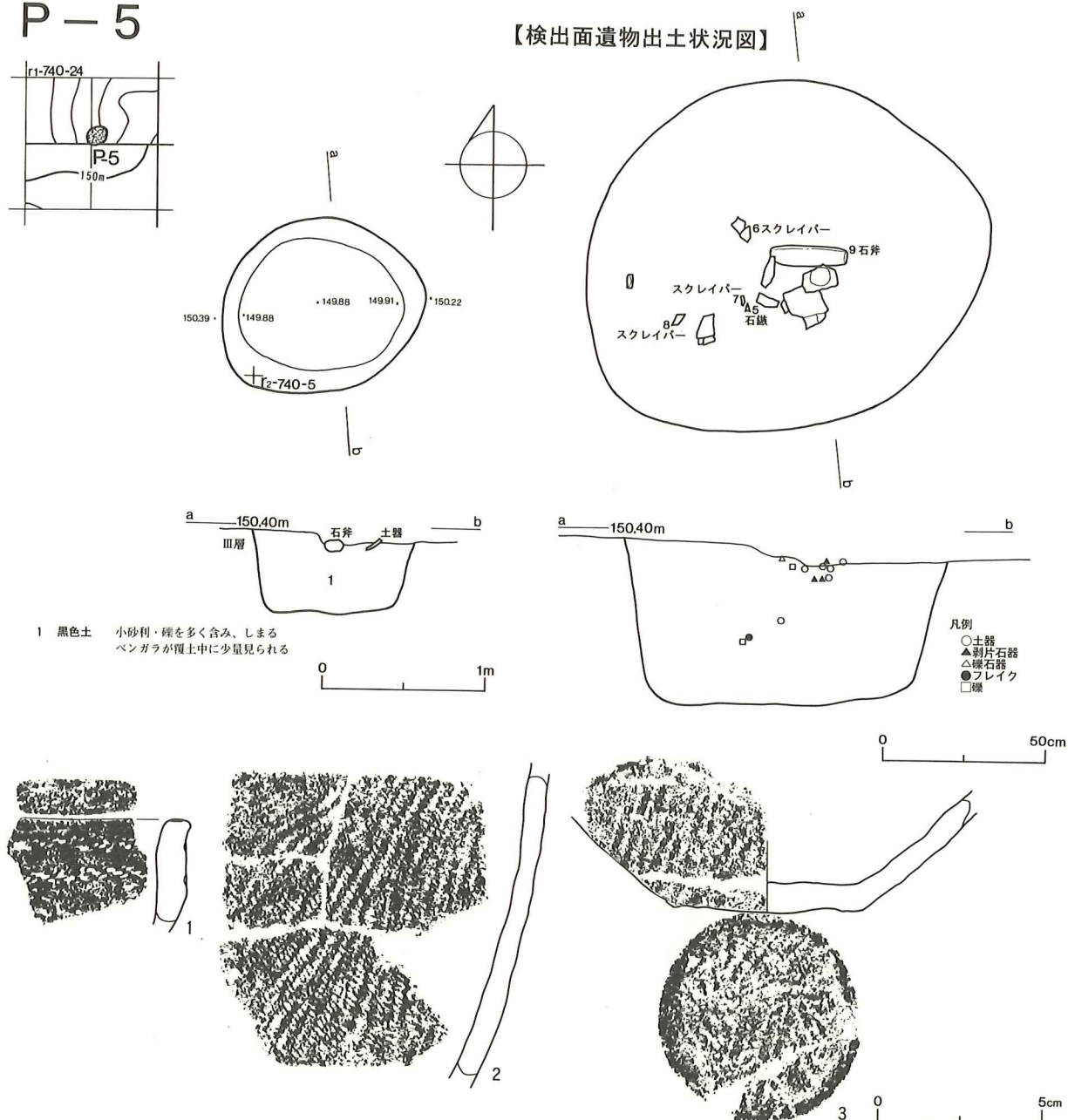
0 5cm

図XIII-8 P-3

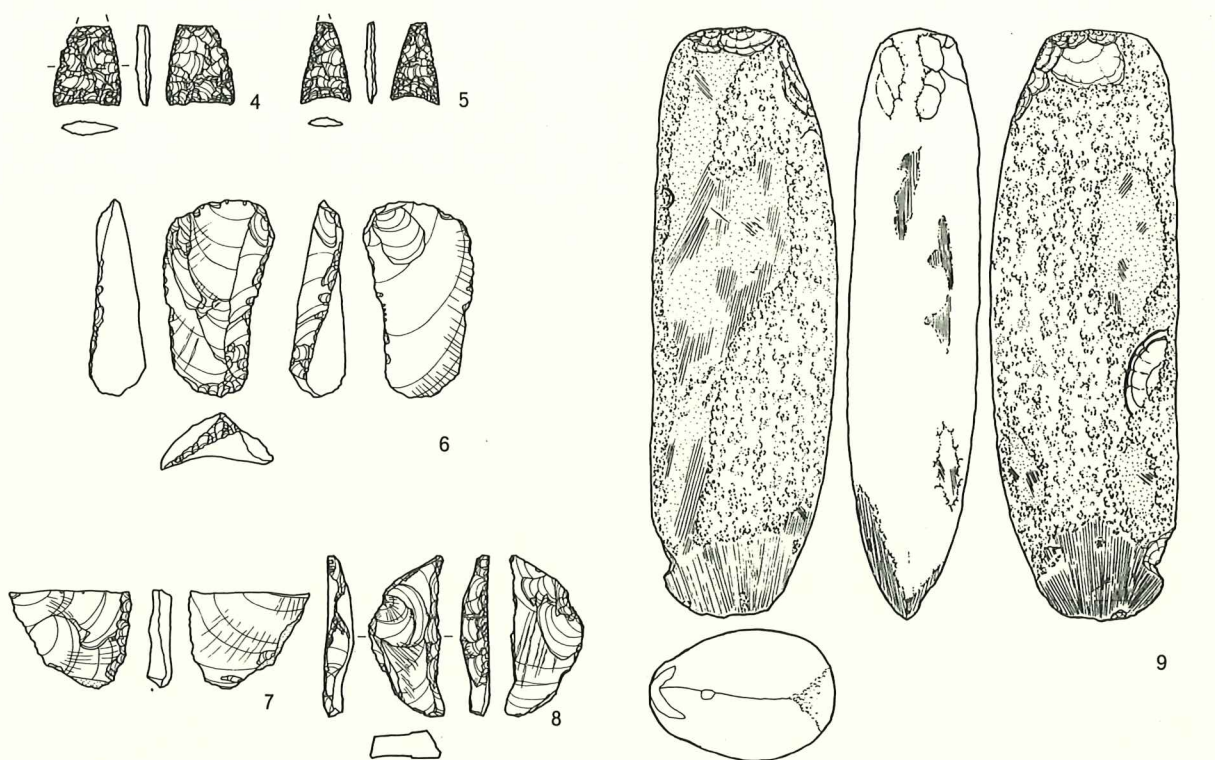
P - 4



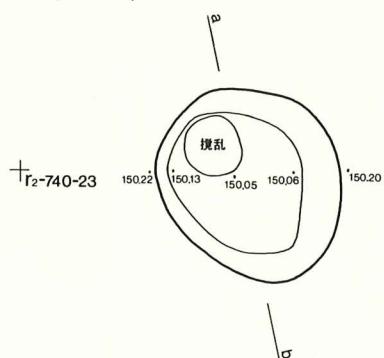
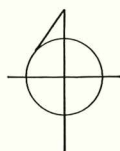
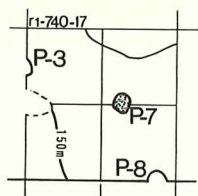
P - 5



图XIII—9 P—4·5(1)



P-7

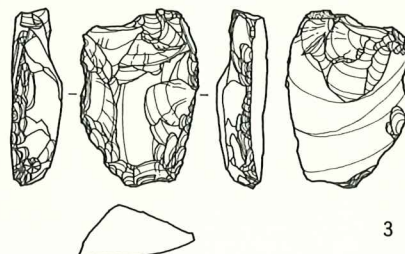


a 150.40m b

III層 1

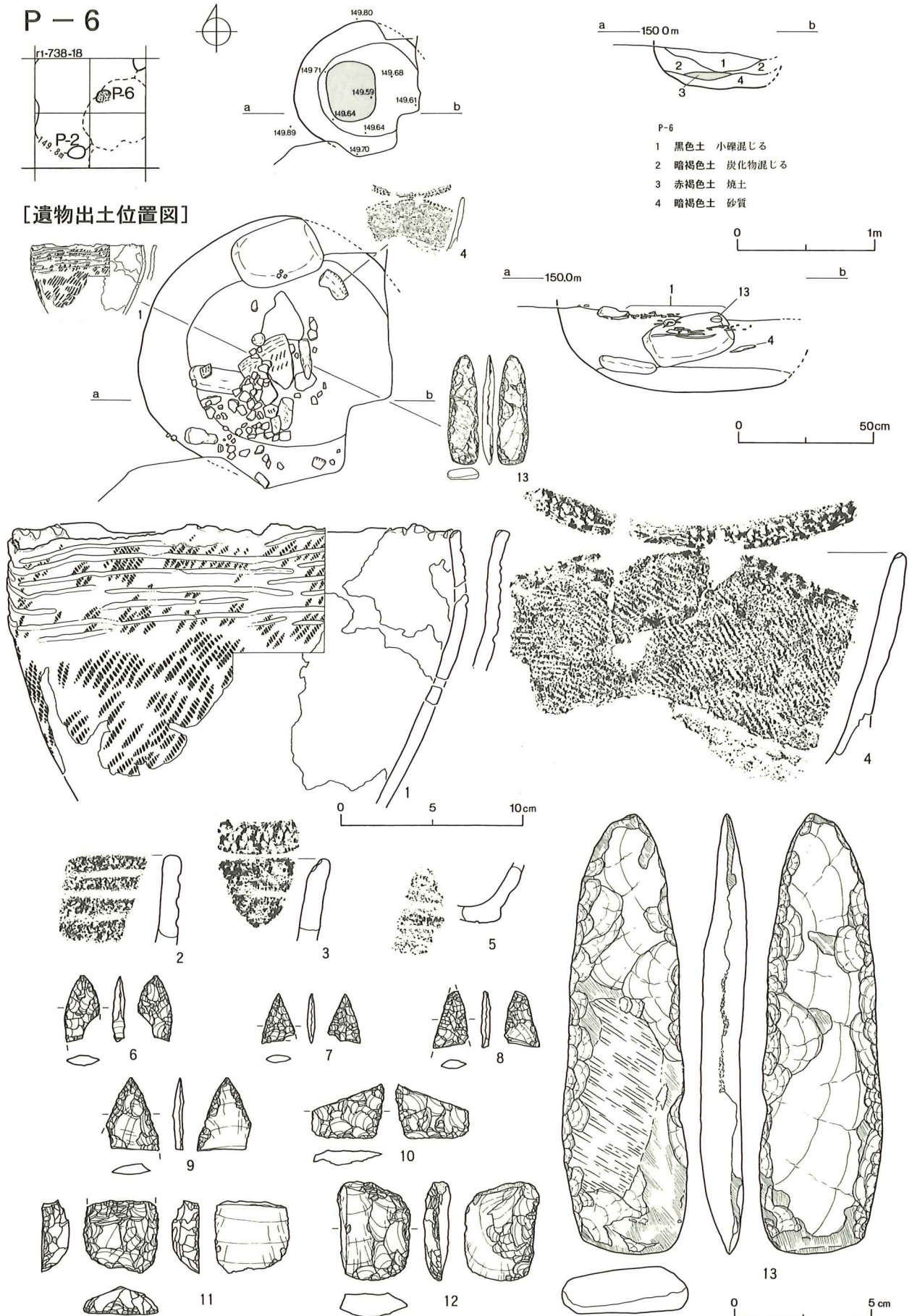
1 黒色土 小砂利を多く含み、しまる
黒曜石フレイクチップが多く混入する

0 1m



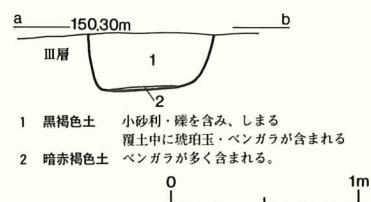
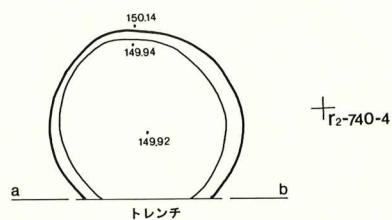
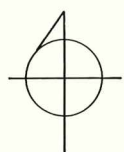
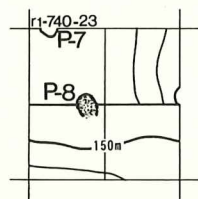
0 5cm

図XIII-10 P-5(2)・7

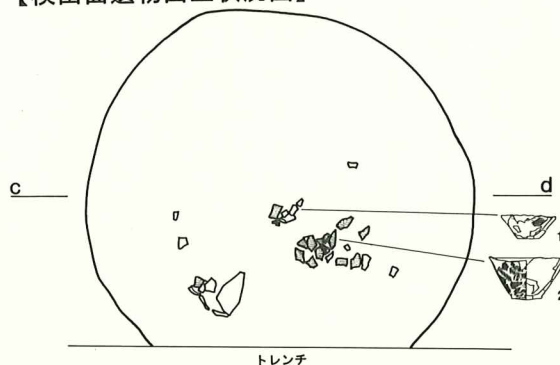


図Ⅺ-11 P-6

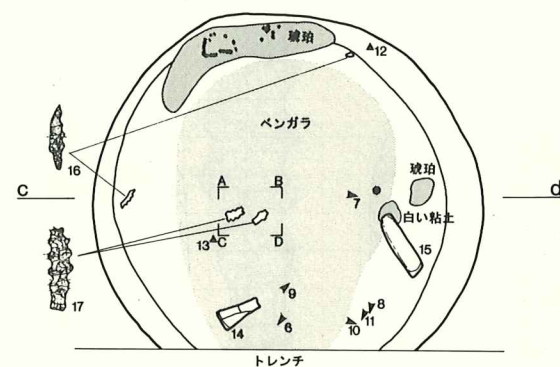
P-8



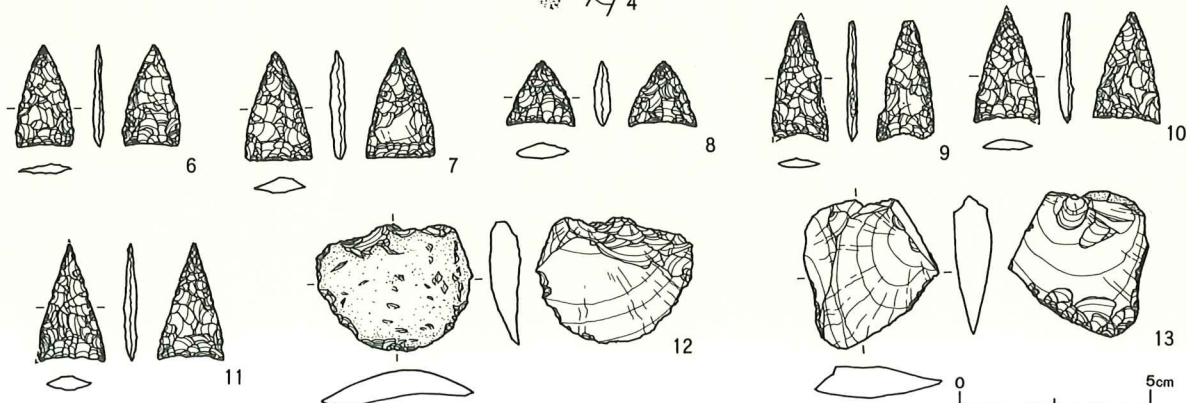
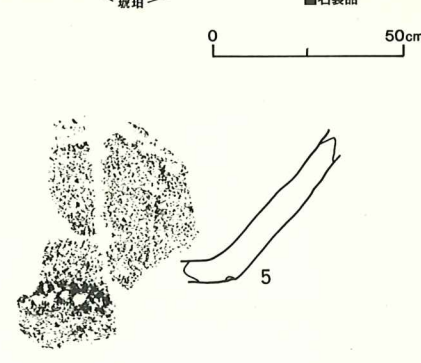
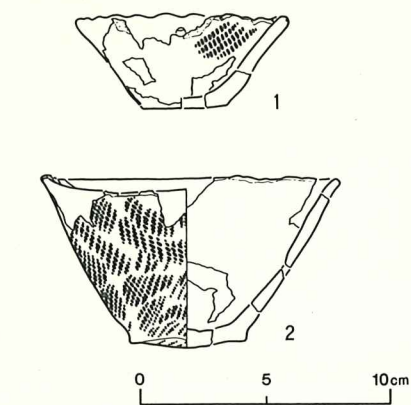
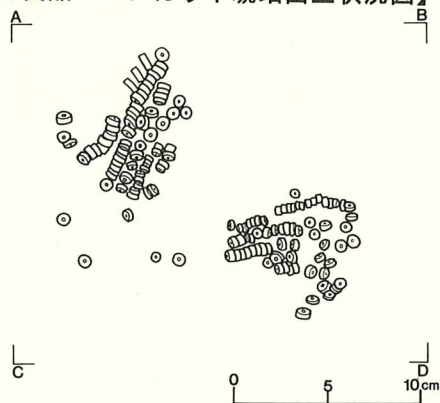
【検出面遺物出土状況図】



【底面遺物出土状況図】

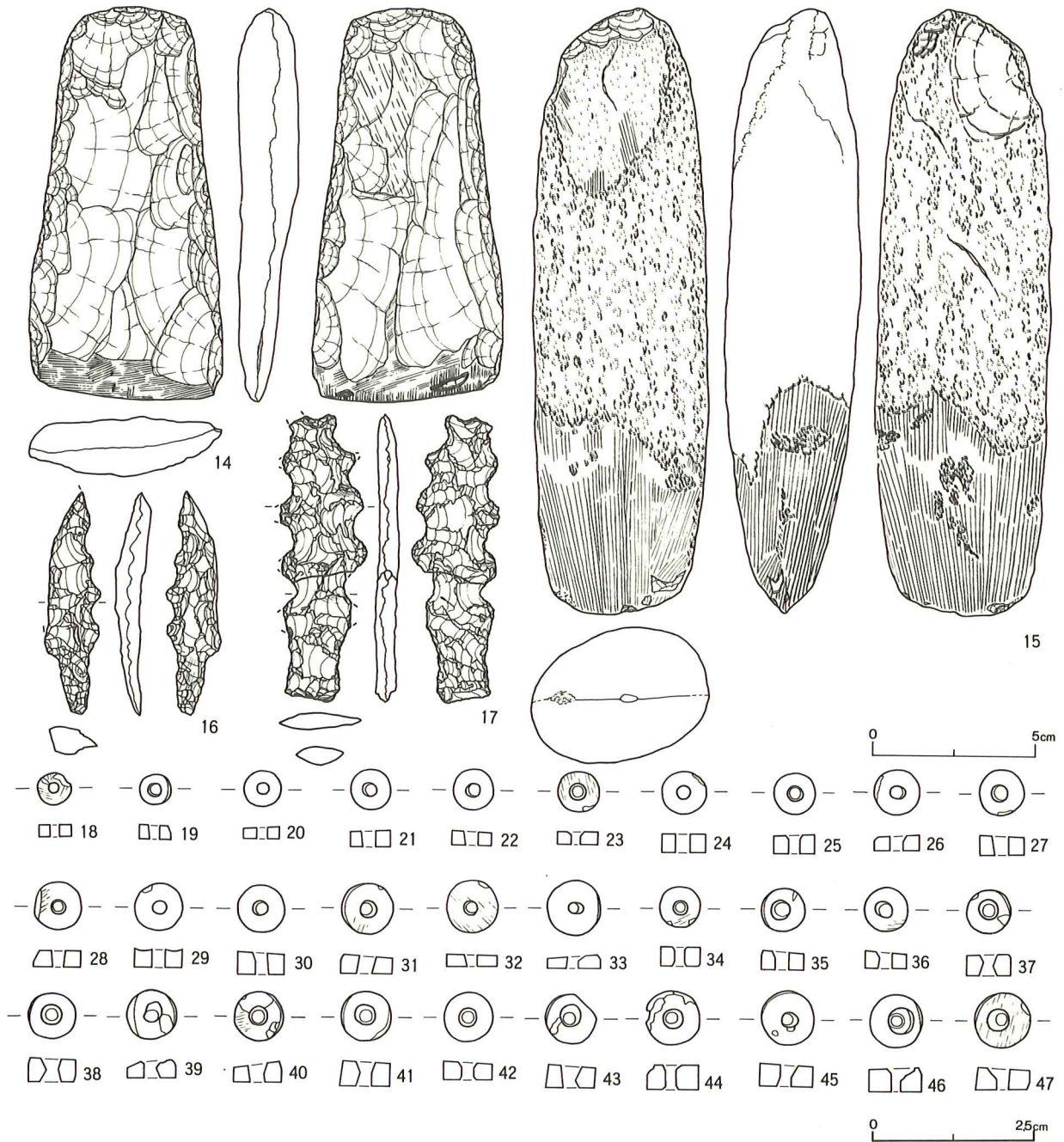


【石製品・ベンガラ下琥珀出土状況図】

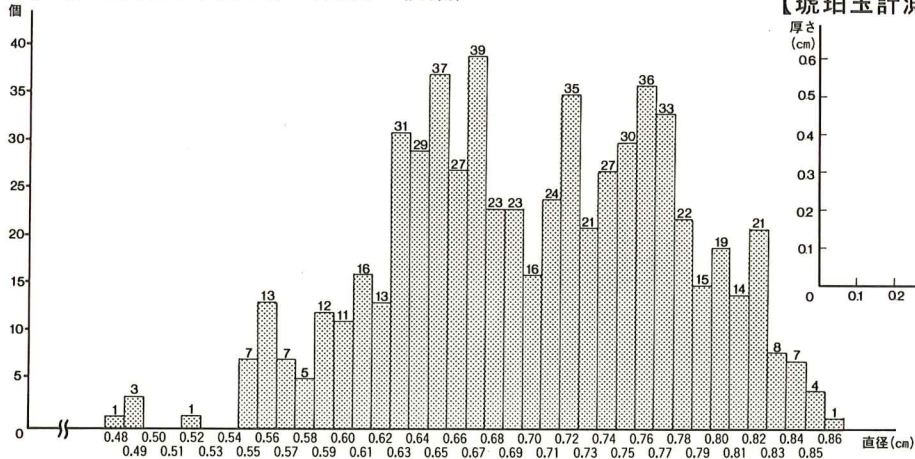


図XIII-12 P-8(1)

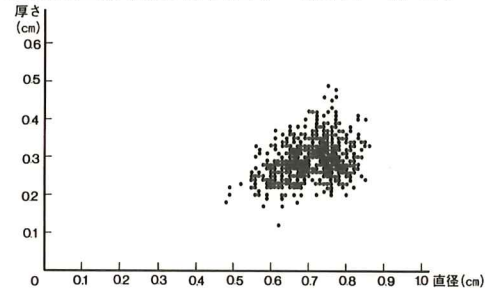
3 遺構と遺構出土の遺物



【琥珀玉計測分布図1】（直径・個数）



【琥珀玉計測分布図2】（直径・厚さ）



図Ⅻ-13 P-8(2)

(2) 焼土

沢状地形から焼土が33か所確認された。沢状地形は南東側調査区の北側及び北西側調査区に一部連続している。740、742ラインのトレンチを調査した際に多量に堆積する焼土を確認した。沢状地形部分では遺物包含層のⅡ層が、色調などからa層、b層、c層の3層に細分される。この地区は全面手掘調査を行った。

焼土はⅡa層から1か所、Ⅱb層から21か所、Ⅱc層から11か所確認された。沢状地形は、遺跡の東側から西側の空知川に向かってなだらかに傾斜する（標高149.00m～150.00m）。南東側調査区の北側の沢状地形はq₁ラインの標高149.50m付近で深さ20cm程度である。北西側調査区の沢状地形は、r₁ラインの北側を深さ50～75cm程度で蛇行している（標高149.00m～150.00m）。南東側調査区の沢状地形と北西側調査区の沢状地形は、q₅-732-15付近で一体となる。焼土はその地形に沿って分布する。

北西側調査区の沢状地形に分布する焼土はⅡb層、Ⅱc層で確認され、比較的規模の小さいものが多い。南東側調査区の北側の沢状地形に分布する焼土はⅡa層、Ⅱb層、Ⅱc層で確認され、様々な規模のものがある。

以下に焼土の特徴を各層位ごとにまとめる。

Ⅱa層からはF-20が確認された。色調は他とは異なり明るく、灰部も明瞭で、小枝状の炭化材を多く含む。焼土はその場で焚かれたものである。残存状況が良いことから続縄文時代以降の比較的新しい時期の可能性がある。

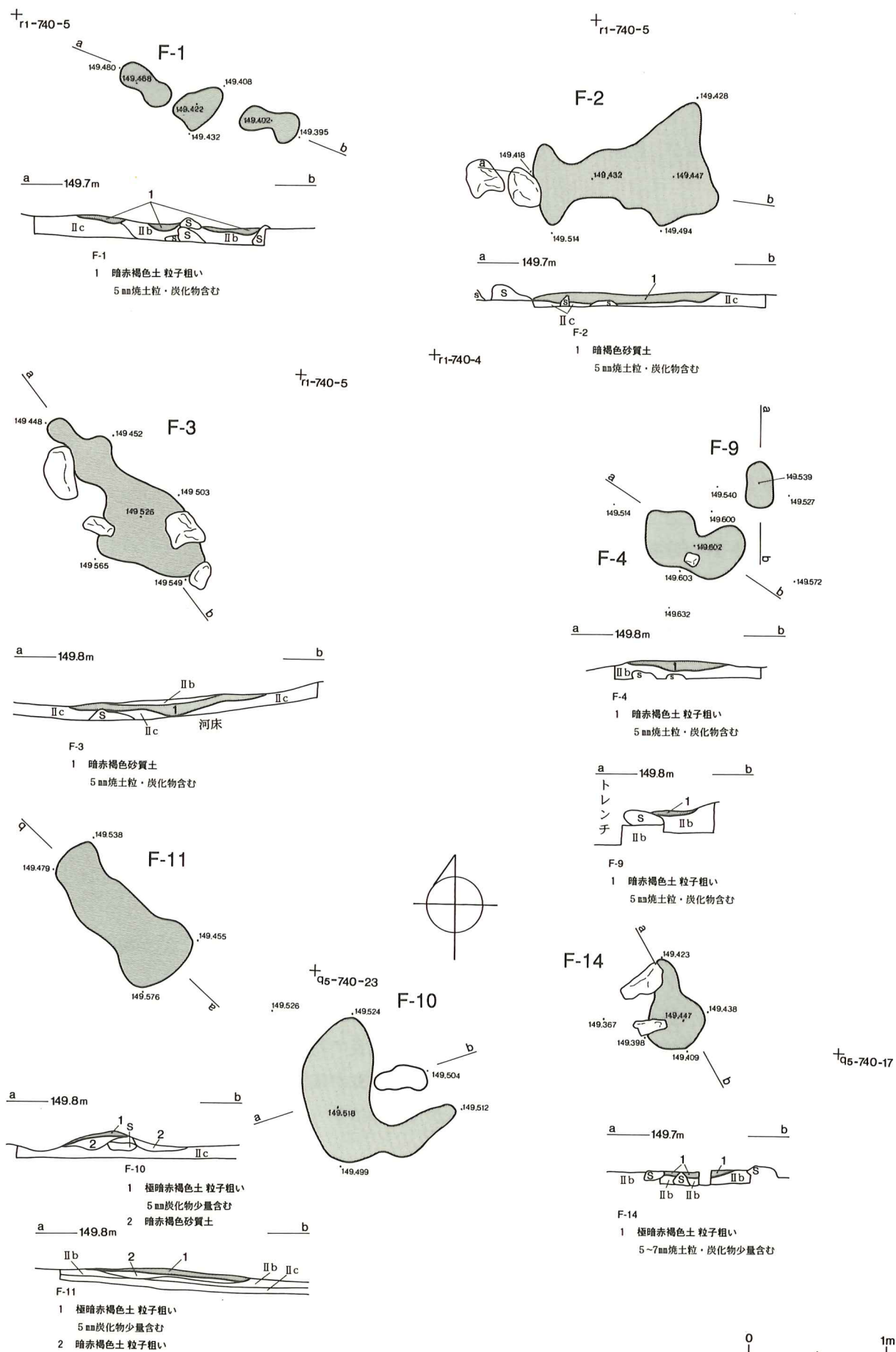
Ⅱb層、Ⅱc層の焼土は大きさや厚み、分布の傾向に著しい違いは見られず、目的や用途が似ていると思われる。焼土は土層の状況から、A) 灰部と焼成部に分けられ焼成部の土層が漸移的に変化するものと、B) 灰部と焼成部が一体となり周囲の土と区別されるものがある。それぞれ、A) その場で焚かれたものと、B) 捨てられたものと考えられる。焼土中には微細な炭化物がみられるほかは、特に伴う遺物がなかった事から、時期の確定は困難である。しかし、台地上に続縄文時代初頭のころと思われる土壌墓が確認されており、その覆土中にも炭化物がみられることや、焼土が形成された土壌（P-6）もあることから、焼土は墓壙に伴うなんらかの祭祀に関係する可能性がある。

F-8、12、13、17、24は、長軸長で約3mを越える大型のものである。平面的な広がり比べ、焼成部の厚みは他の焼土と比べても大きな差はなかった。

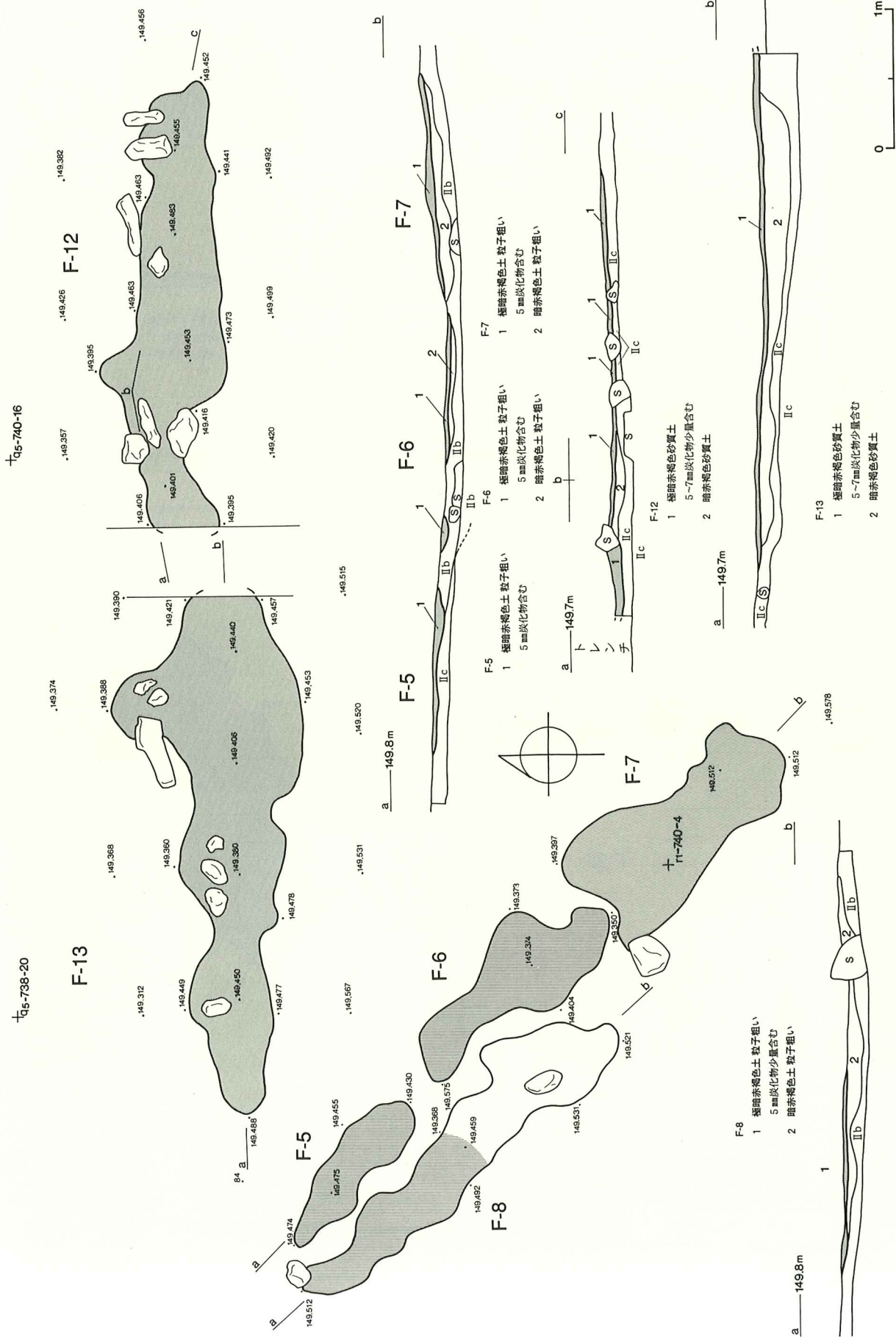
Ⅱb層からはF-1、4～8、10、11、14、16～19、21、22、24～26、30、31、33が確認された。その場で焚かれたものはF-5～8、10、11、16、21、22、24～26、30、31、33である。捨てられたものはF-1、4、14、17～19である。F-5はF-6、8の灰部の可能性が高い。F-19はF-18から捨てられた灰部の可能性がある。F-8、17、24は長軸長で約3mを超える大型のものである。

Ⅱc層からはF-2、3、9、12、13、15、23、27～29、32が確認された。その場で焚かれたものはF-12、13、15、23、27～29、32である。捨てられたものはF-2、3、9である。（佐藤 剛）

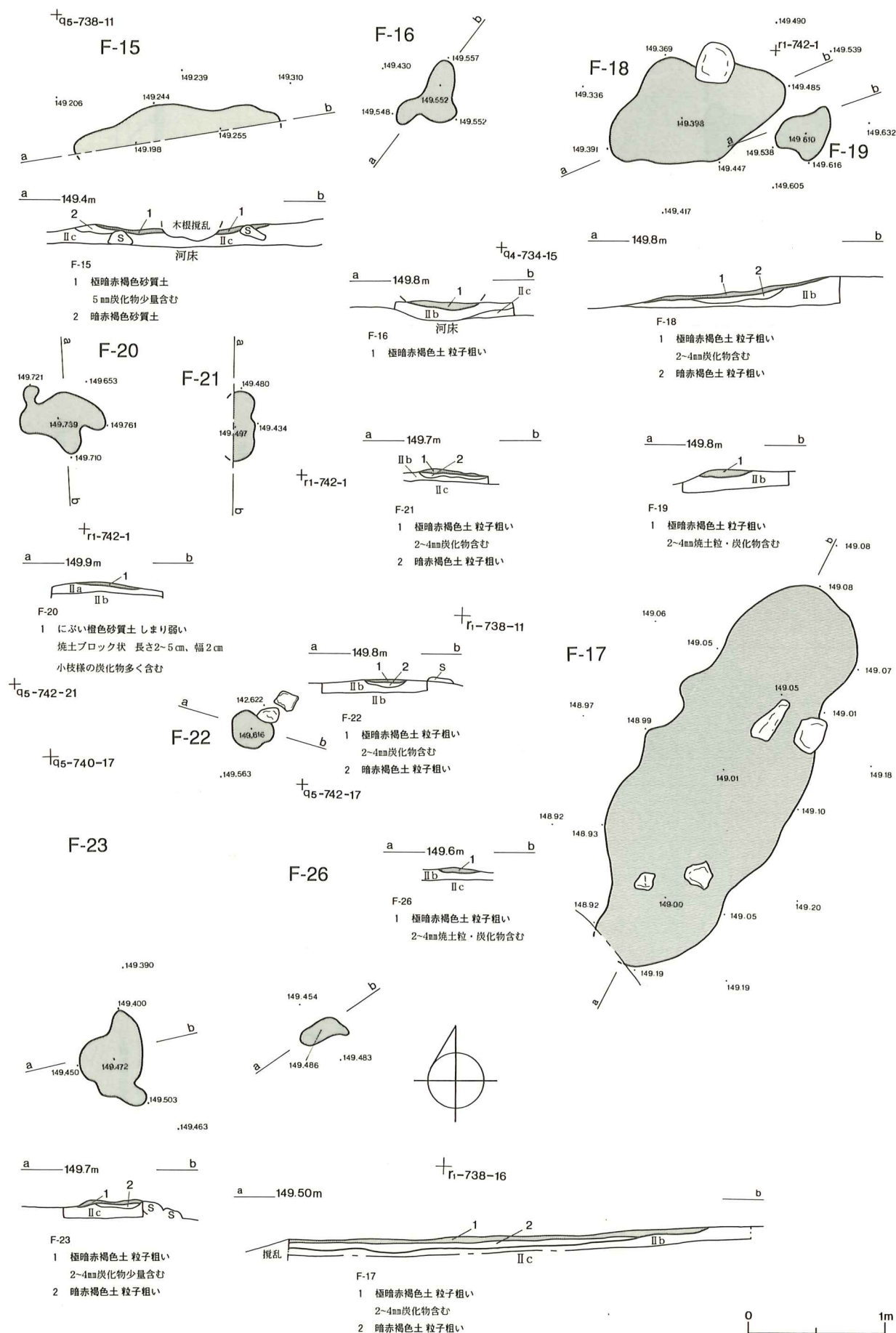
3 遺構と遺構出土の遺物



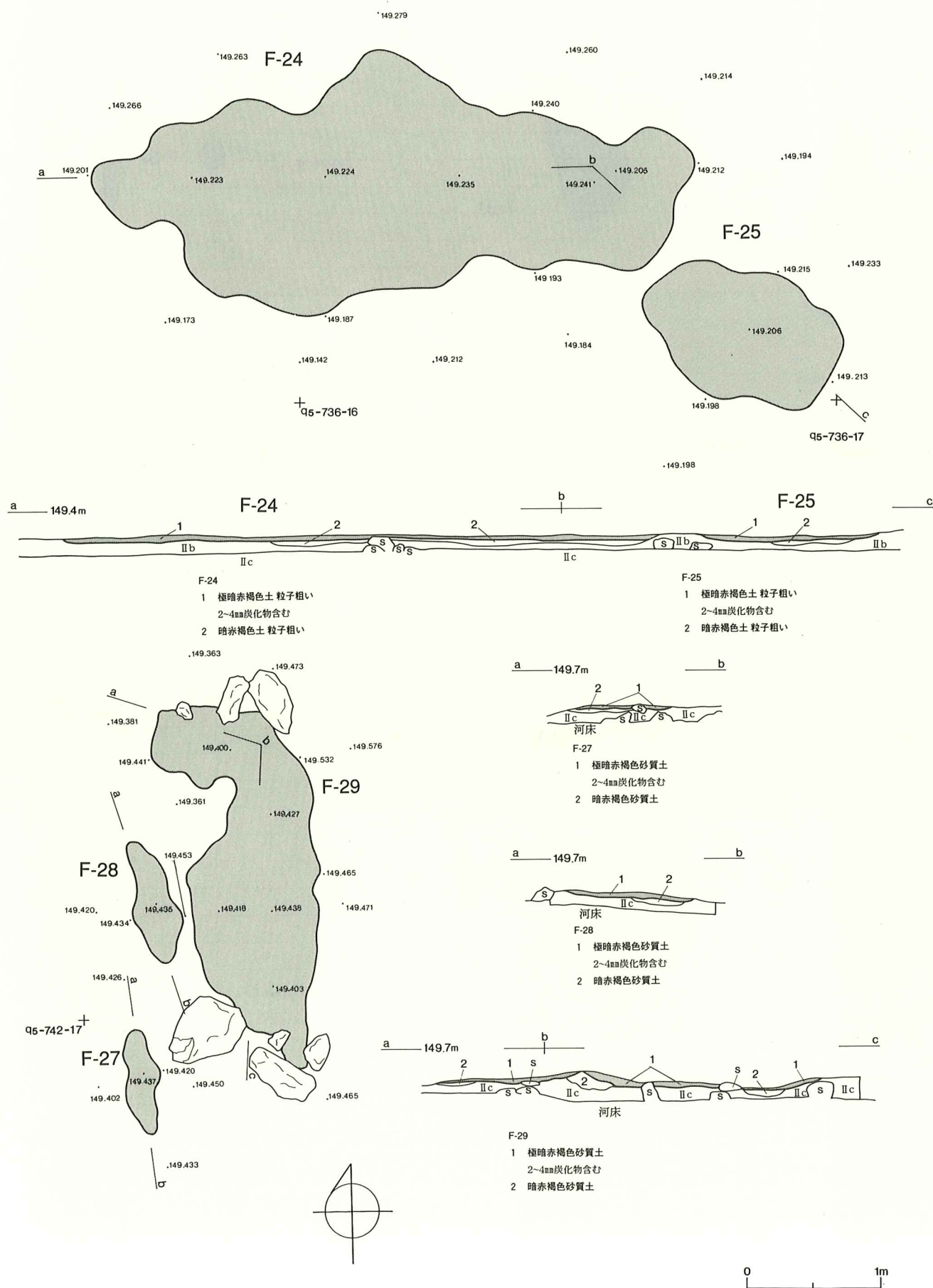
図ⅩⅢ-14 F-1~4・9~11・14



3 遺構と遺構出土の遺物

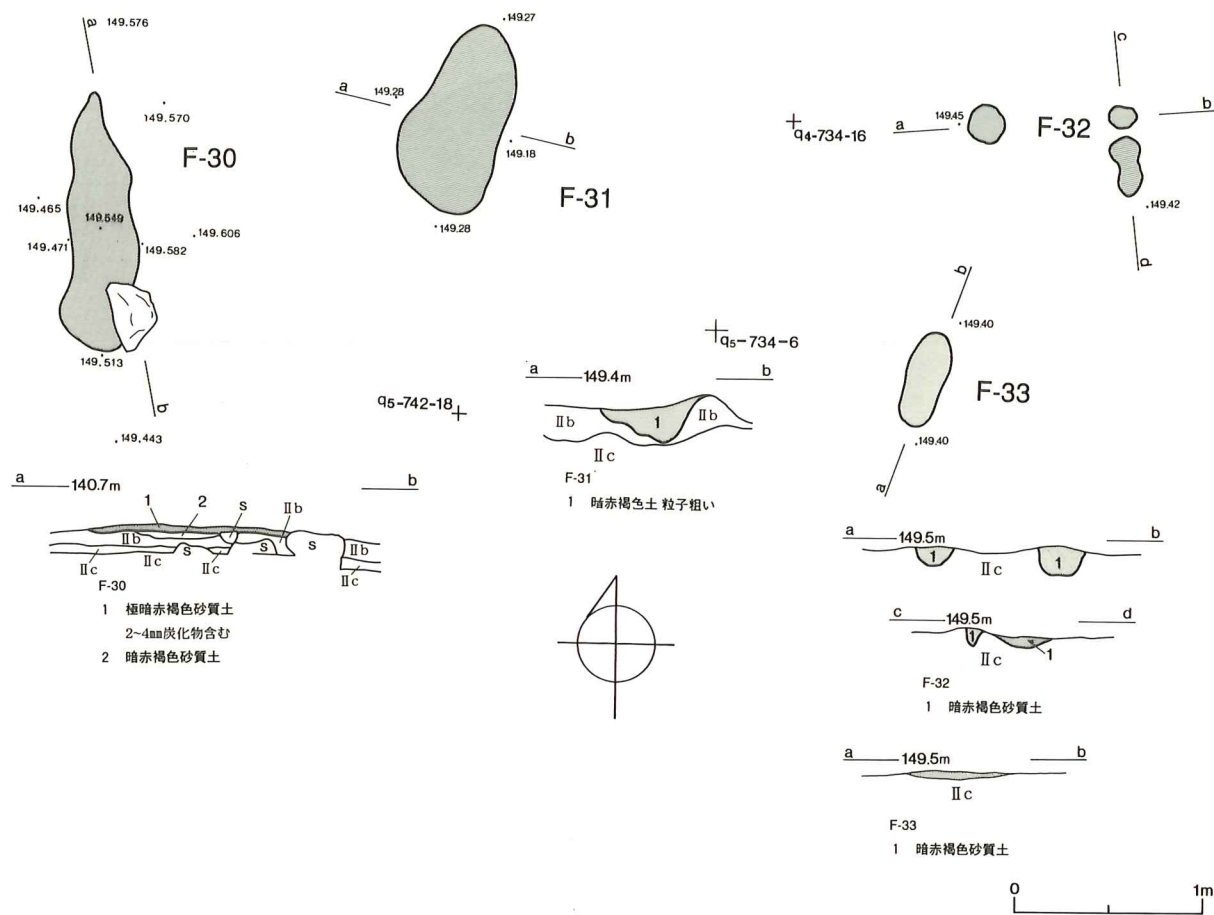


図ⅩⅥ—16 F-15~23・26



图XIII-17 F-24·25·27~29

3 遺構と遺構出土の遺物



図ⅩⅧ-18 F-30~33

4 包含層出土の遺物

(1) 土器 (図XIII-19~28 図版XIII-8~12)

包含層から5,947点の土器が出土している。出土した土器には縄文時代早期 (I群)、中期 (III群) 後期 (IV群)、晩期 (V群) 及び続縄文時代 (VI群) に属するものがある。摩滅しているものや小破片が多く、文様の判別できたものは少ない。縄文のみが施文された胴部破片については、V群とVI群の区別が困難なため、便宜的にすべてV群土器として集計した。V群とVI群の分類は口縁部破片及び底部破片とそれに接合した胴部破片のみ行った。個体数の集計は口縁部破片によって行い、接合片と同一個体としたものは1点として数えた。

出土した土器のうちV群・VI群土器が5,524点で最も多く、全体の93%を占める。このほかI群土器は、a類に属するものが5点出土している。

I群土器 (図XIII-23-4~8 図版XIII-8-4)

a類が5点出土している。

分布は調査区南側の包含層が、奈江川に落ち込む部分からのみ出土している。

a類：(4~8) a-2類のムシリ1式、アルトリ式に相当するものがある。

いずれも沈線文が施されるもので、4は口唇断面が角形を呈する。5・6は同一個体で、口縁部はやや外反し、口唇断面は丸みを帯びる。7・8は胴部破片である。

III群土器 (図XIII-23-9~11 図版XIII-8-4)

b類のものが251点出土している。

分布は、南東側調査区の中央付近に散見できる程度である。

b類：(9~12)

刺突が施されるもので、10は円形刺突が加えられる。11は貼付帯上に竹管状工具で斜めに刺突が施されている。12は底部破片。

VI群土器 (図XIII-22-1、-23-13~15 図版XIII-8-1・4)

a類のものが167点出土している。

分布は、南東側調査区の北側にやや密である。

a類：(1、13~15)

1は簡略化された縦の貼り付けがあり、刺突が器面を巡る。タブコプ式に相当するもの。13・14は円形刺突文が施されるもの。15は底部破片。

V群土器 (図XIII-22-1、-24~27 図版XIII-8-2、-9~11)

c類のみ出土している。

分布は、南東側調査区の中央付近から奈江川にかけてやや多い程度で、目立った傾向はない。胎土には、石英や長石などの砂粒を多く含みもろいものが多い。

c類：(2、16~46) 緑ケ岡式に相当するものがある。

2は胴部に張り出しのある鉢形土器で、逆「U」字状の貼り付けが二か所に見られる。口縁部には沈線による円弧文で文様が描かれ、円弧文のつなぎ部分に竹管状工具による刺突が加えられる。16・

17は縄線文が見られるもので、b類に属する可能性があるが、ここではc類として扱う。18～20は沈線文の見られるもの。19は口唇内面に棒状工具による刻みが加えられ、内面に2条の沈線が横走する。21は胴部に段をもつもの。25・26は同一個体で、2条の平行する沈線で文様が描かれ、口唇上面に棒状工具による細かい刻みが加えられる。27・28は同一個体。沈線で三角形や菱形の文様が描かれるもので、口縁部文様帯上部の横走する2条の沈線の間に1条の縄線文が見られる。P-3出土のもの(図XIII-8-1)と同一個体である。29は無文地になるもの。口唇直下に1条の縄線文が加えられる。30は横走する縄線文に縄端圧痕が加えられるもの。31は沈線と竹管状工具による刺突が組み合わさって文様が描かれるもの。33～35は地文の縄文のみのもの。33は口唇外面に縄による圧痕が加えられている。36は浅鉢の口縁部破片である。口唇部直下は無文地になり、内面は縄線で文様が描かれる。37～39は縦の貼り付けをもつものである。37は沈線で文様が描かれるもので、貼り付け部分に貫通孔がある。38・39は同一個体で、対になる突起部分と思われる。縦の貼り付けに指による凹凸と円形の穿孔が加えられている。40は大形の胴部破片である。41～46は底部破片で平底である。41・42は丸底気味のもの。43～46は底部の縁辺部がやや張り出すものである。

VI群土器 (図XIII-28 図版XIII-12)

a類のみ出土している。

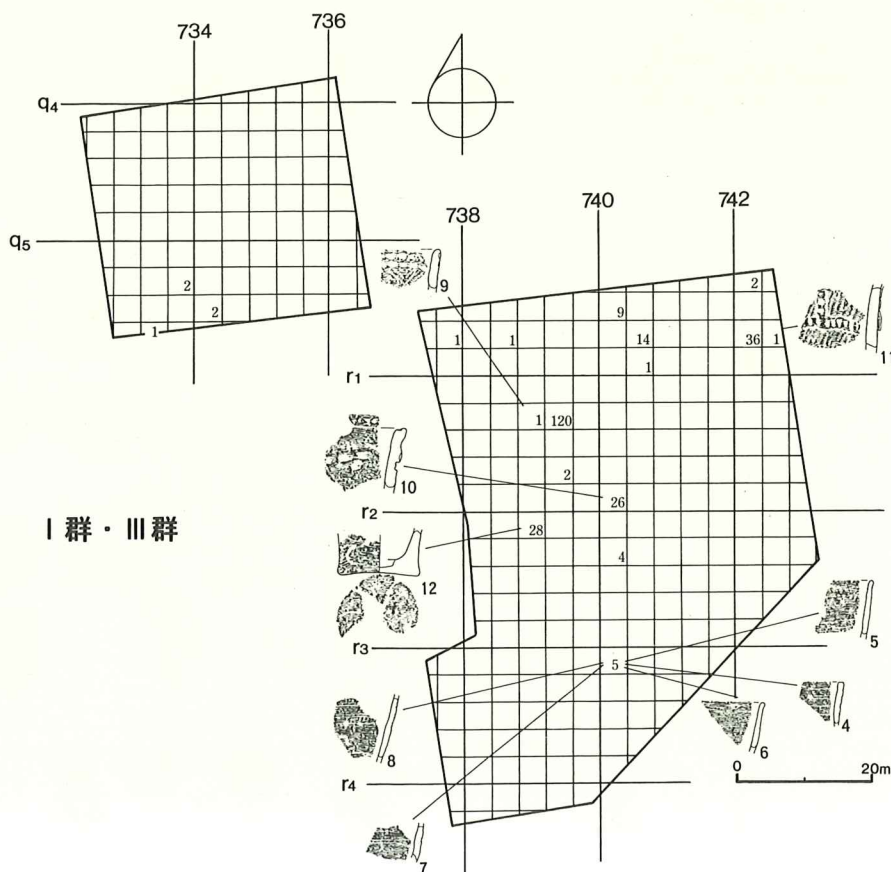
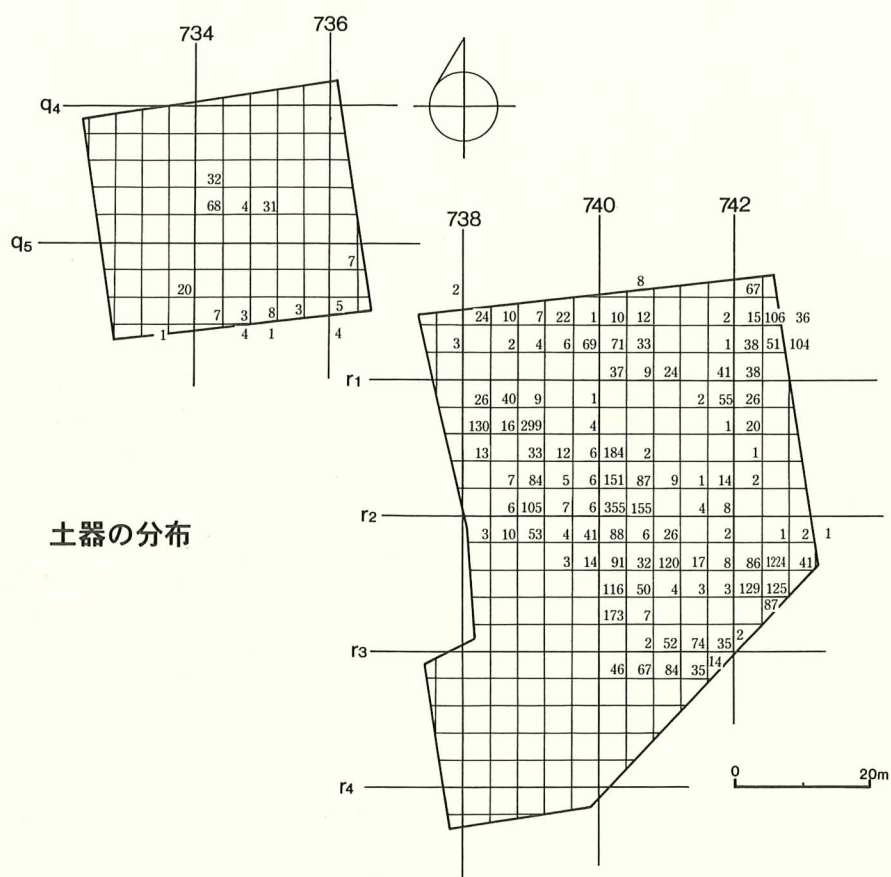
分布は、底部破片が南東側調査区の北側に見られるほかは、目立った傾向はない。

a類：(図XIII-22-3、-28-47～65 図版XIII-8-3、-12) フシココタン下層式、興津式、鳥沼式に相当するものがある。

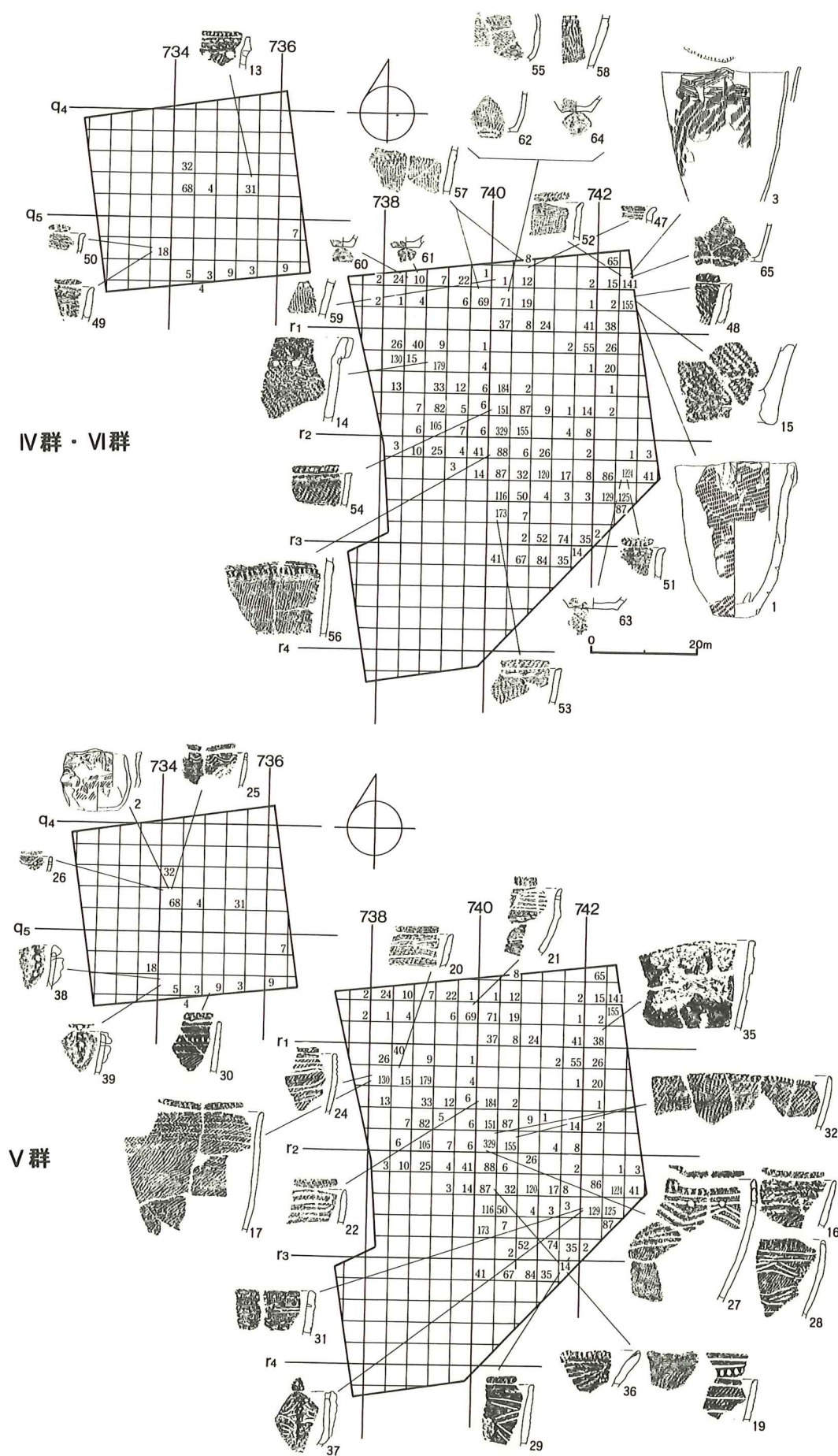
3は南東側調査区の北側から出土した。口唇部がやや外反する深鉢である。沈線により三角形の文様が描かれ、沈線の間に縄線文が施されている。小突起を持ち、2条の沈線が垂下する。小突起の頂部は浅いくぼみを持つ。口唇内面には縄の圧痕が加えられている。

47～50は縄線文の見られるもの。47は口唇部が大きく外反している。48～50は口唇内面に縄の圧痕が加えられ、文様が三角形や菱形を描くと思われもの。51は無文のもので、口唇は外反し、口唇内面には縄端圧痕が加えられるもの。52～54は地文の縄文のみのもの。52は口唇部が外反し、口唇内面に縄の圧痕が加えられる。53・54は口唇部がややめくれ気味になるもの。55～59は胴部破片。56～59の地文の縄文は縦位のものである。55は沈線で三角形の文様が描かれるもの。56は肥厚させた部分に縄端圧痕を施し、口縁部文様帯を区画している。文様帯に縄線が1条見られる。57～59は縄端圧痕がみられるもの。58・59は同一個体である。60～65は底部破片で、いずれも上げ底である。62はやや胴部が張るもの。63・65の胎土は砂粒を含まないものである。

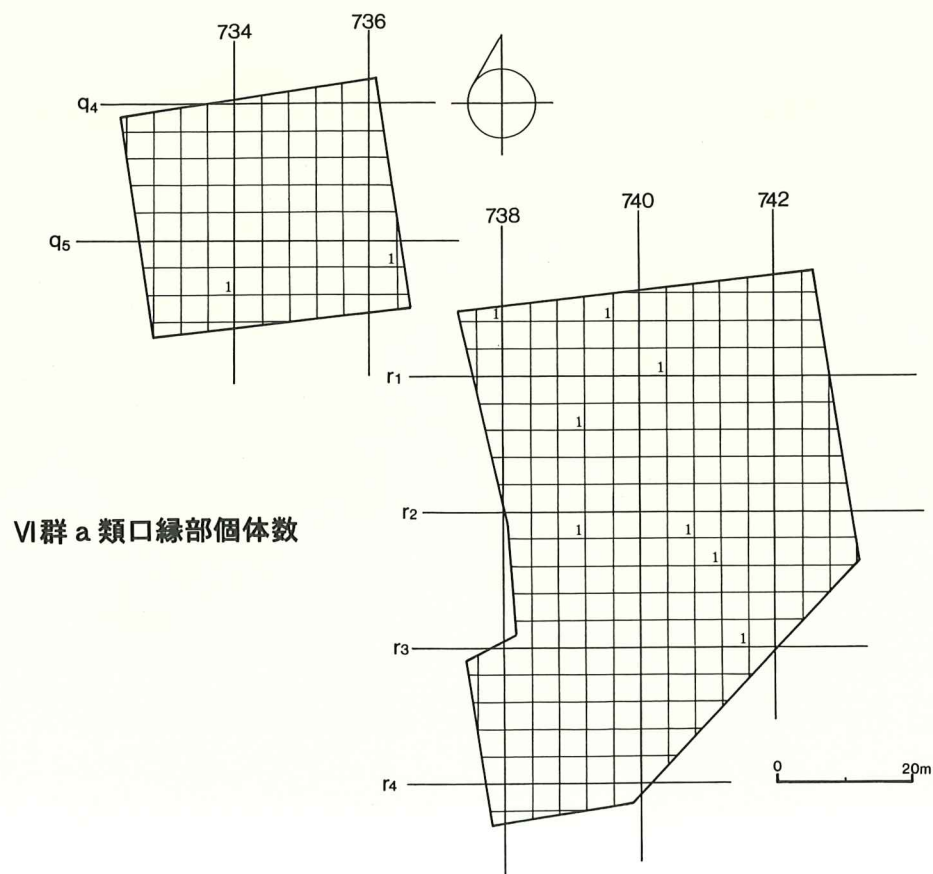
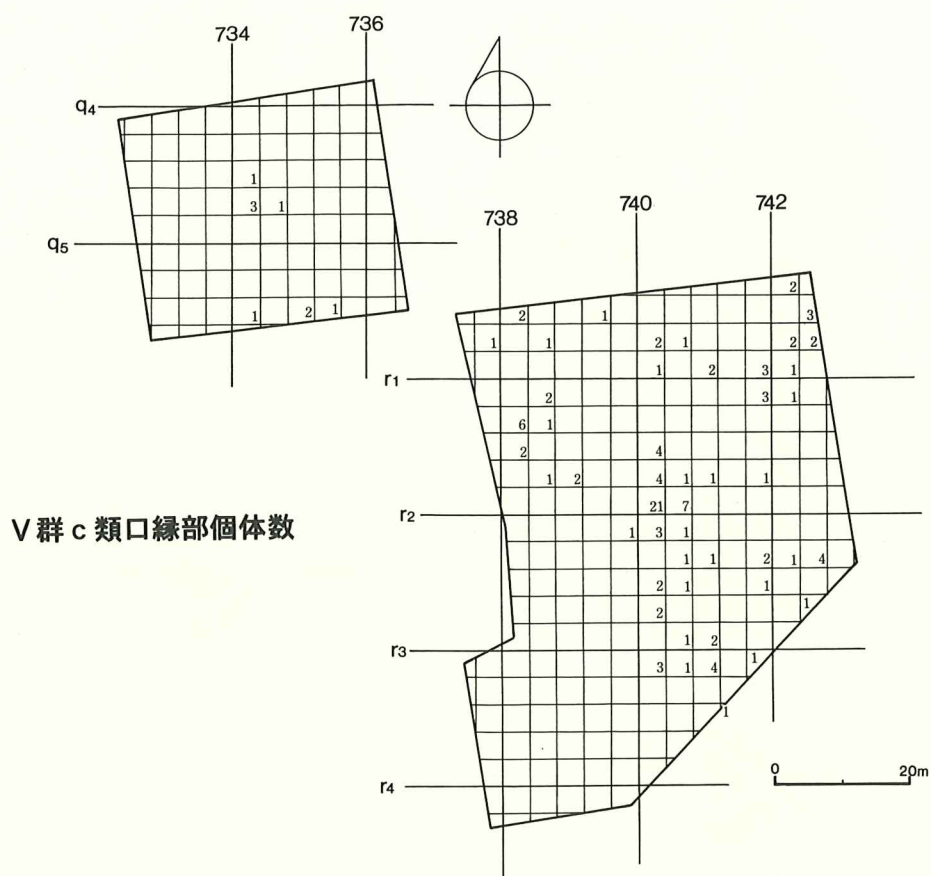
(村田 大)



図Ⅻ-19 包含層出土の土器分布、I群・III群土器の分布

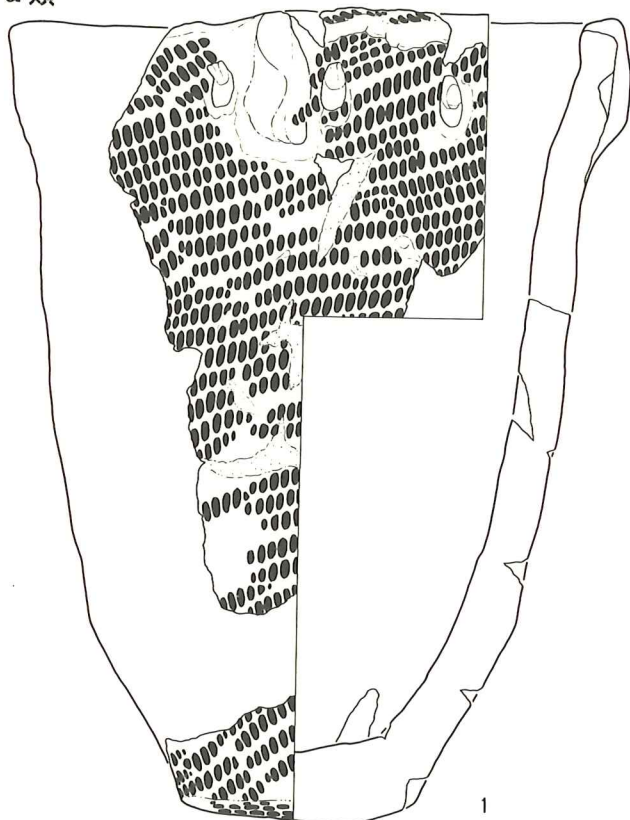


図Ⅸ-20 IV群・VI群 V群土器の分布

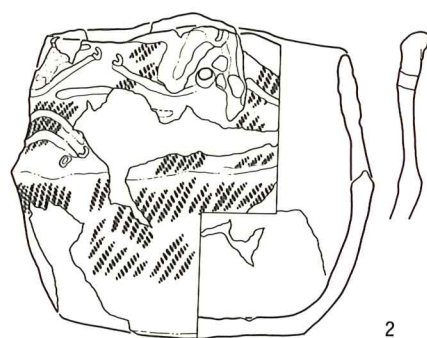


図Ⅻ-21 V群c類・Ⅵ群a類土器発掘区別口縁部個体数

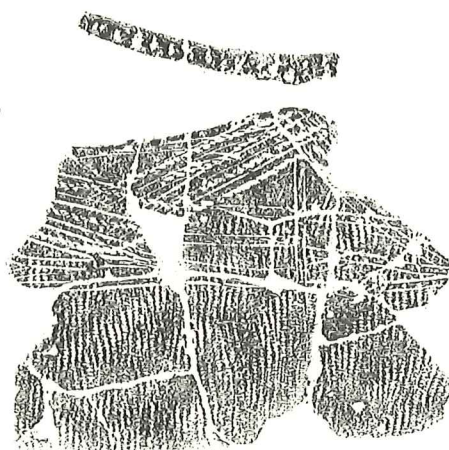
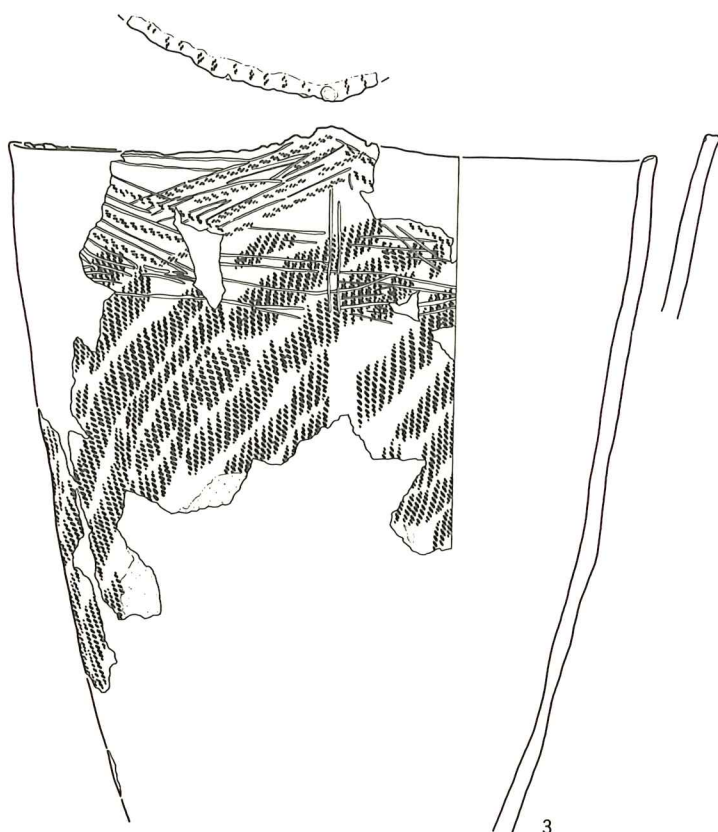
IV群 a 類



V群 c 類



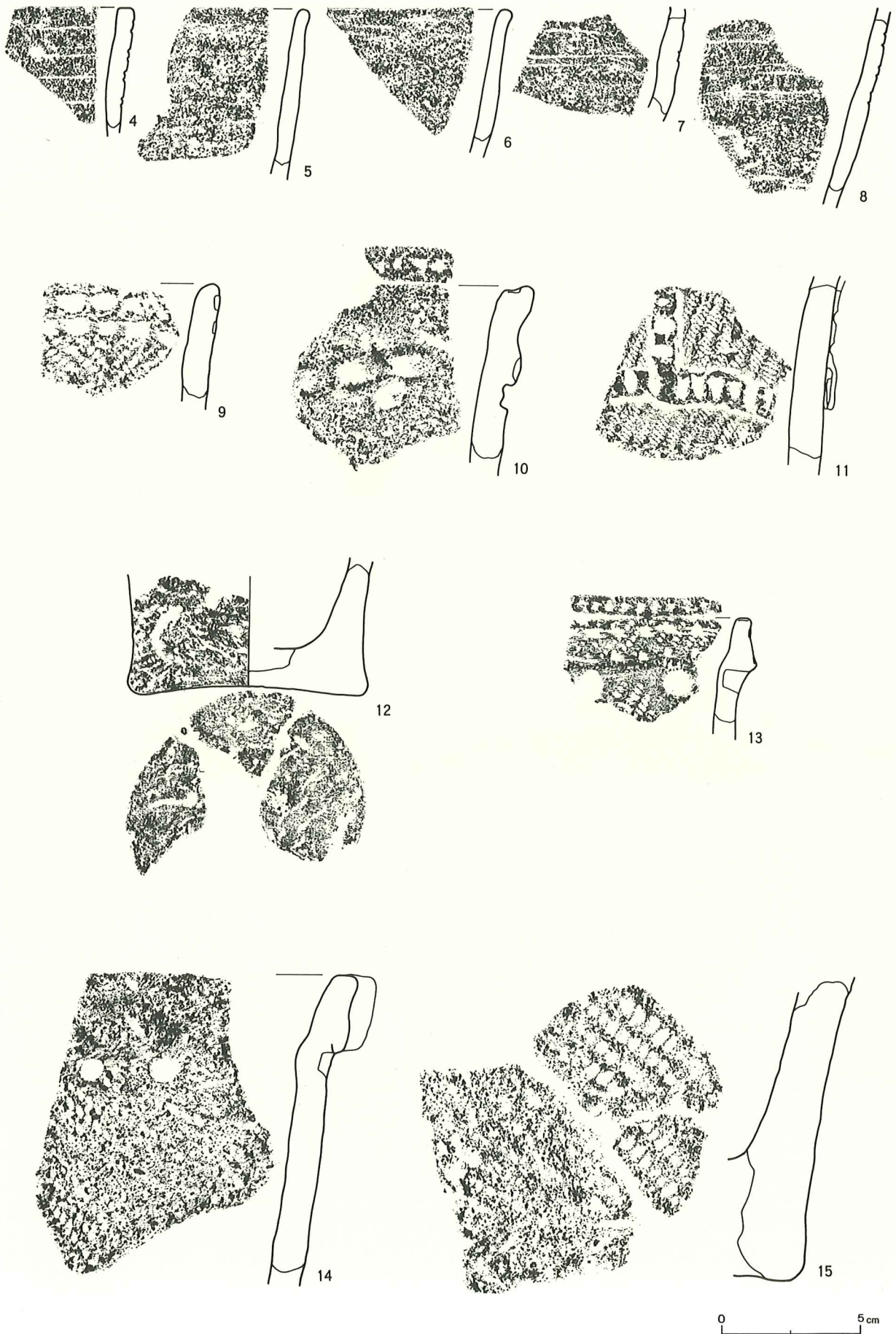
VI群 a 類



拓影図

0 5 10cm

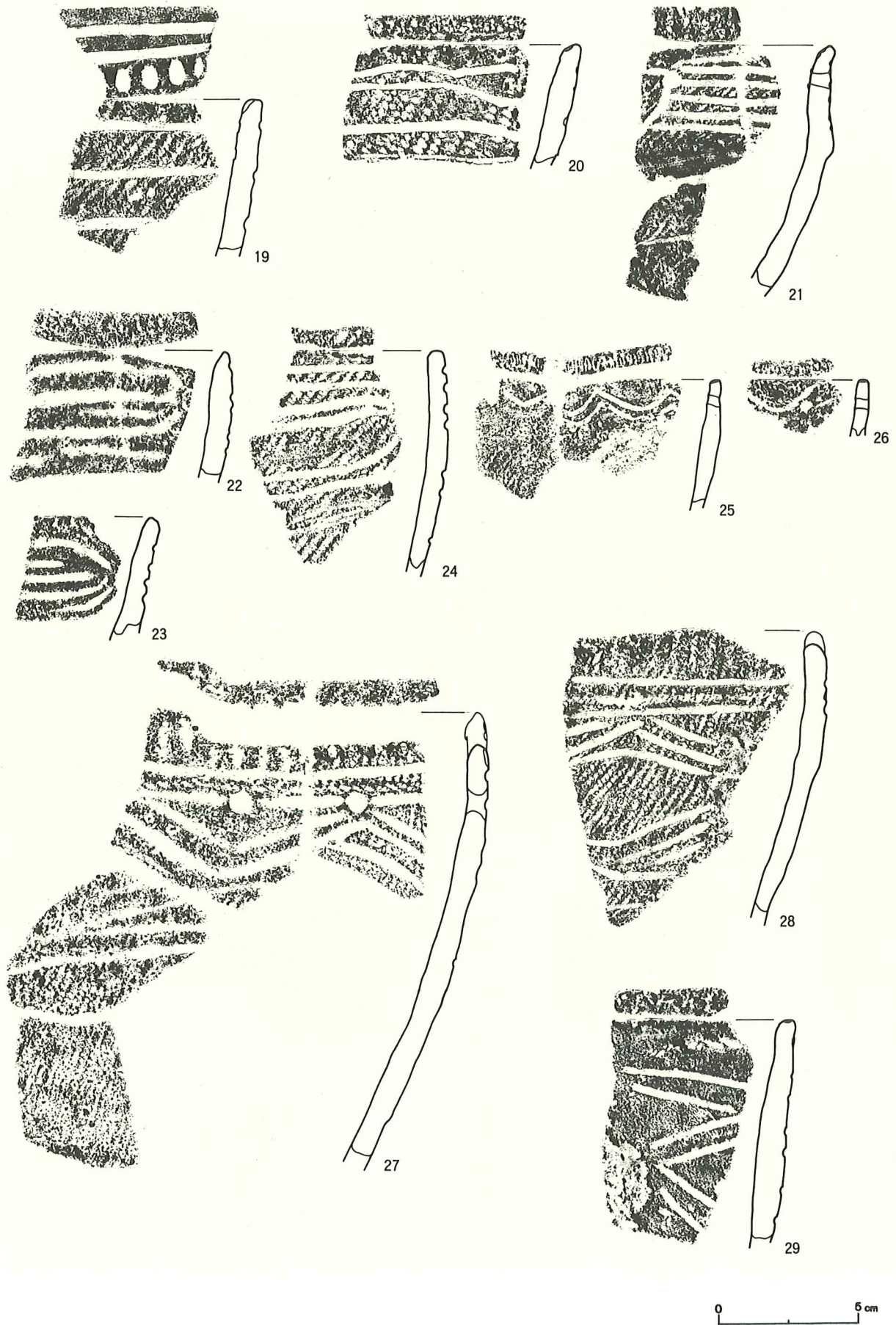
図Ⅷ-22 包含層出土の復元土器 (IV群・V群・VI群)



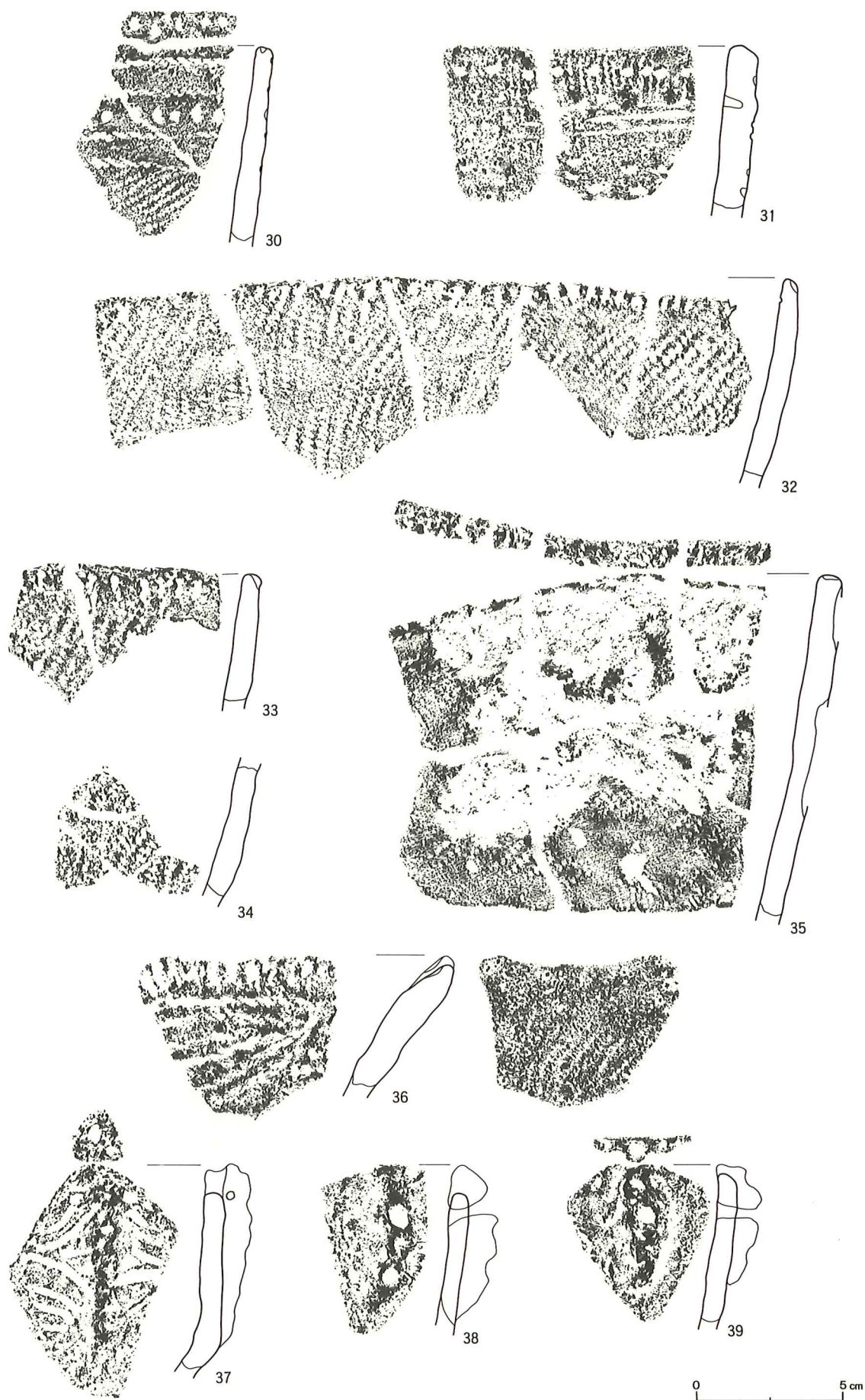
図XIII-23 包含層出土のⅠ群・Ⅲ群・Ⅳ群土器



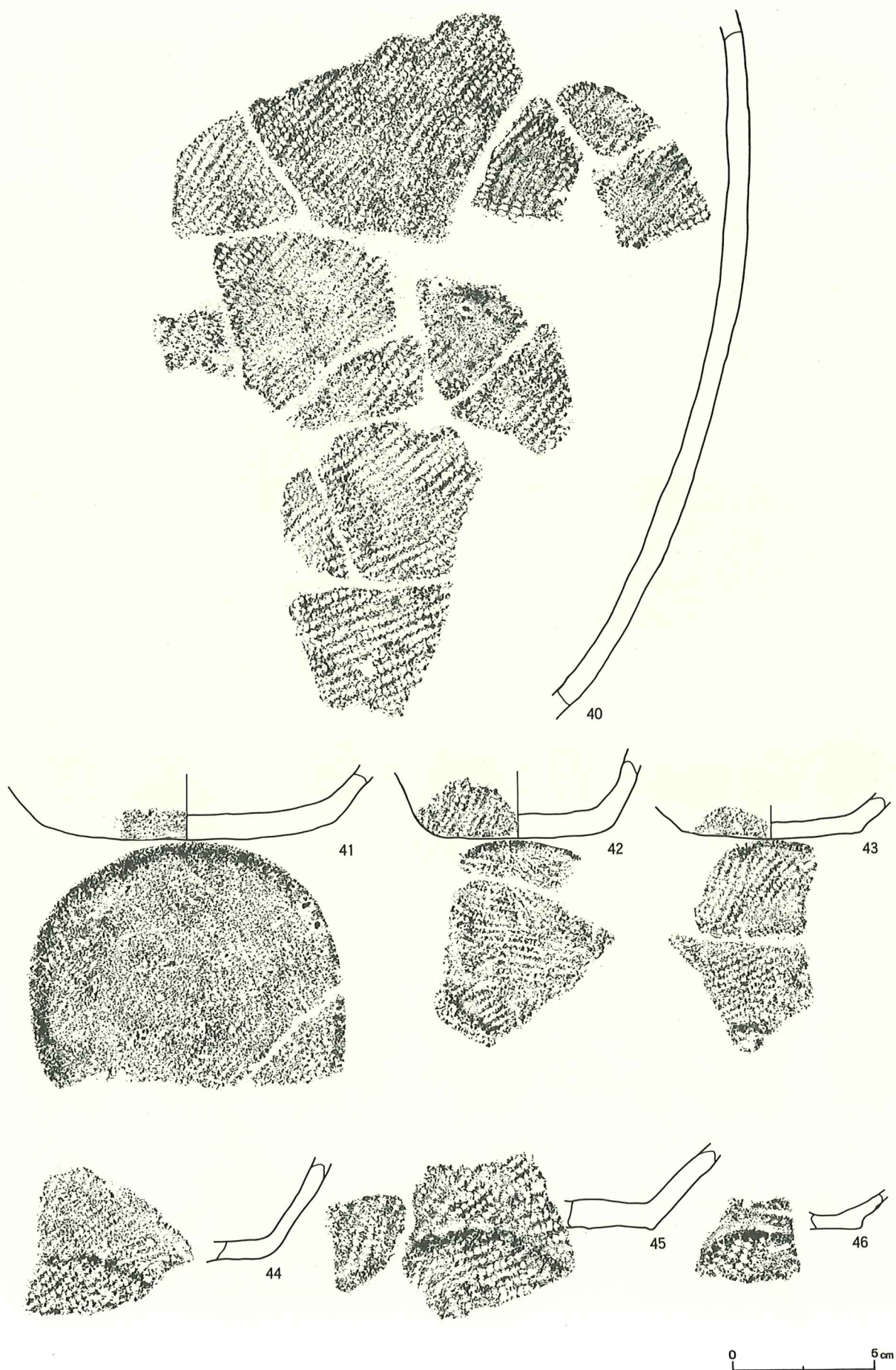
図ⅩⅡ-24 包含層出土のV群土器(1)



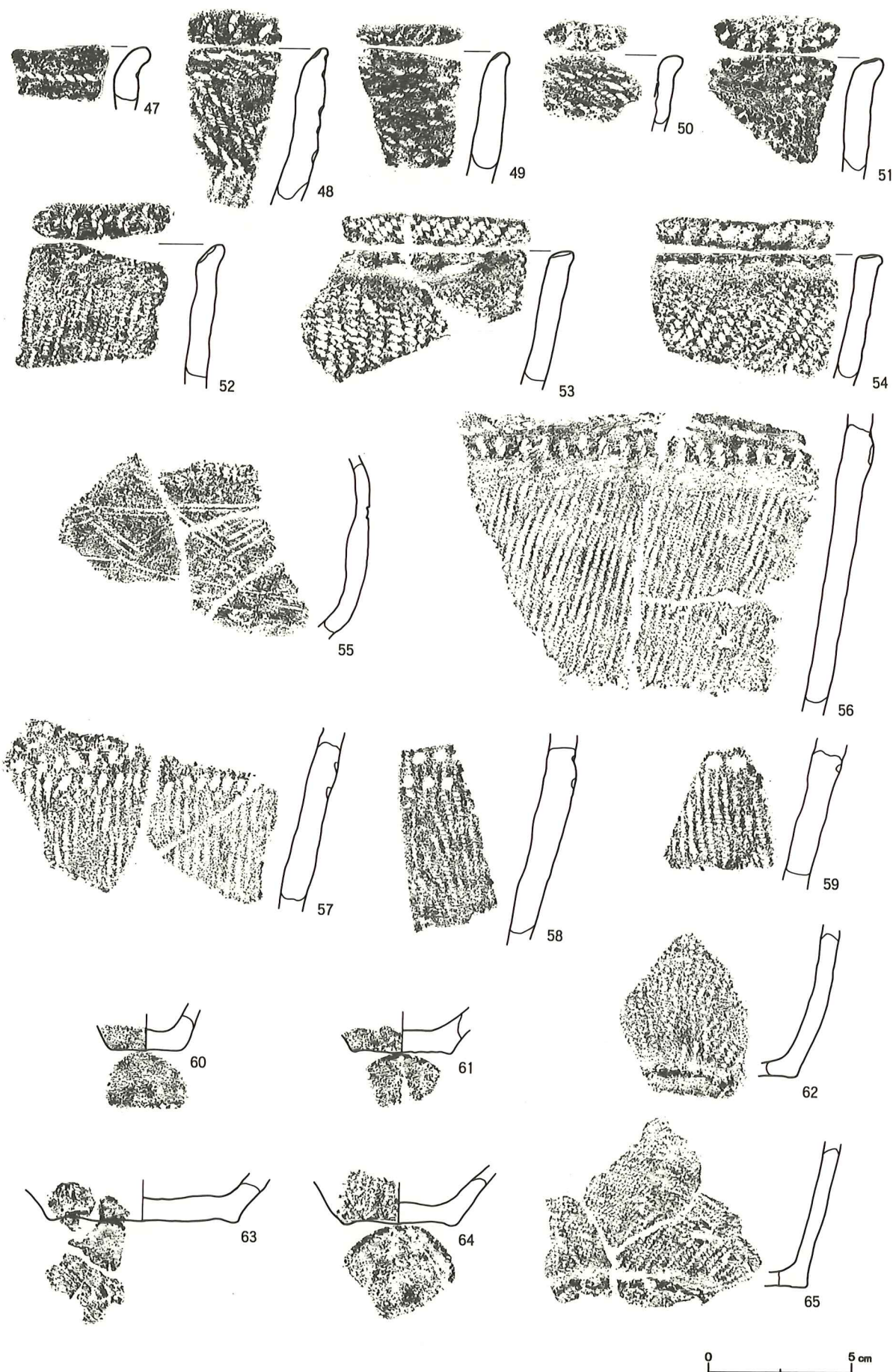
図XIII-25 包含層出土のV群土器(2)



図Ⅸ-26 包含層出土のV群土器(3)



図XIII-27 包含層出土のV群土器(4)



図Ⅸ-28 包含層出土のⅥ群a類土器

(2) 石器等 (図XIII-29~37 図版XIII-13~15)

438点の石器のほか、石核20点、棒状原石4点、フレイク・チップ17,694点、礫・礫片68点、石製品1点、古銭1点のほか焼成粘土塊が19点で、合計18,245点である。

出土した石器のうち、剥片石器は395点(90%)、礫石器は43点(10%)で、剥片石器の占める割合が高い。石器に使用された石材は、剥片石器では、つまみ付ナイフにメノウ質頁岩が使用されるほかは、黒曜石が大部分を占める。礫石器では緑色泥岩、片岩、粘板岩、砂岩などがある。各掲載石器の細分類に関しては一覧表に掲載した。また、石材は特に記載がない限り黒曜石である。

石鏃 (1~37)

石鏃は破片も含めて140点出土している。三角鏃が64点、有茎鏃が8点で三角鏃が卓越している。

1は柳葉形のもので、その形態からI群土器に伴うものであろう。2は五角形鏃である。3~30は三角鏃で3~5は平基のもの。6~30は凹基で、19は特に挟りが深い。31~37は有茎のもの。33は非対称のもの。37は形態からI群土器に伴うものと思われる。

石槍 (38~43)

石槍は23点出土している。38~42は有茎のもの。40は基部が尖頭部より長く、かえしが不明瞭である。43は菱形のもので、先端と基部が欠損している。

ナイフ (44)

すべて破片で26点出土している。44は基部の破片である。

石錐 (45~48)

石錐は9点出土している。45~47は全体に二次加工が施されたものである。48は腹面に使用による擦痕が見られる。

つまみ付ナイフ (49)

つまみ付ナイフは4点出土している。49はメノウ質頁岩製で、背面にある瘤は堅い部分を除去できなかったものである。

ナイフ類 (50~56)

ナイフ類は26点出土している。50は刃部再生剥離によって先細りになったもの。51は基部のみに加工を施し、刃部は剥離した剥片の縁辺をそのまま利用している。52は披熱により表面が風化したもの。53は基部。55は刃部再生が錯向剥離によって行われ、ねじれたものである。

スクレイパー (57~65)

スクレイパーは破片も含めて133点出土している。58は尖頭部を持つもの。62は棒状原石を素材として利用したものと思われる。

石斧 (66~74)

石斧は破片を含めて34点出土している。平面形は撥形、短冊形のものが最も多く、刃部側面は片刃

が圧倒的に多い。66は緑色泥岩製で、側面は敲打調整が施されている。67は片岩製で打ち欠きによって整形し、全面研磨されている。69は泥岩製で棒状礫を素材とし、ごく一部に調整を加えたのみで刃部を研磨しているもの。70・71は片岩製。72・73は乳棒状のもの。74は未製品で、偏平礫を素材として、打ち欠き調整を施したものである。

たたき石 (75・76)

たたき石は4点出土している。75・76ともに棒状礫を用いている。背面・腹面にたたき痕が見られる。

すり石 (77)

すり石は1点のみの出土である。いわゆる北海道式石冠である。

石核 (78～83)

石核は20点出土している。いずれも原石面を残している。

棒状原石 (84～86)

棒状原石は4点出土している。85の一部に二次加工が見られる。

石製品 (87)

I層から1点出土した。87は蛇紋岩製の垂飾で、約半分を欠損している。類例から左右対称のものと考えられ、図上で欠損部を復元している。全面が研磨され、中央に楕円形の貫通孔がある。ほかに貫通する孔が3カ所、貫通しない孔が2カ所穿たれている。上部の貫通孔の表裏には紐擦れが認められ、首にかけられたものであろう。また、表側は沈線で文様が描かれている。石製品については第XII章で若干触れることにする。

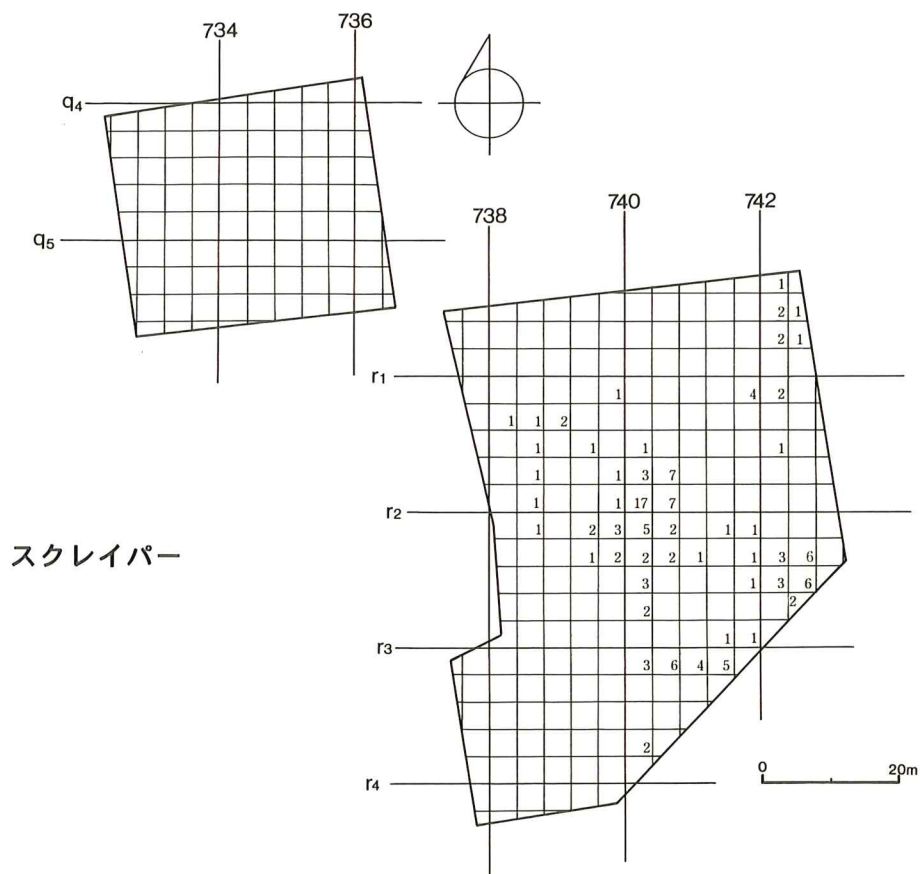
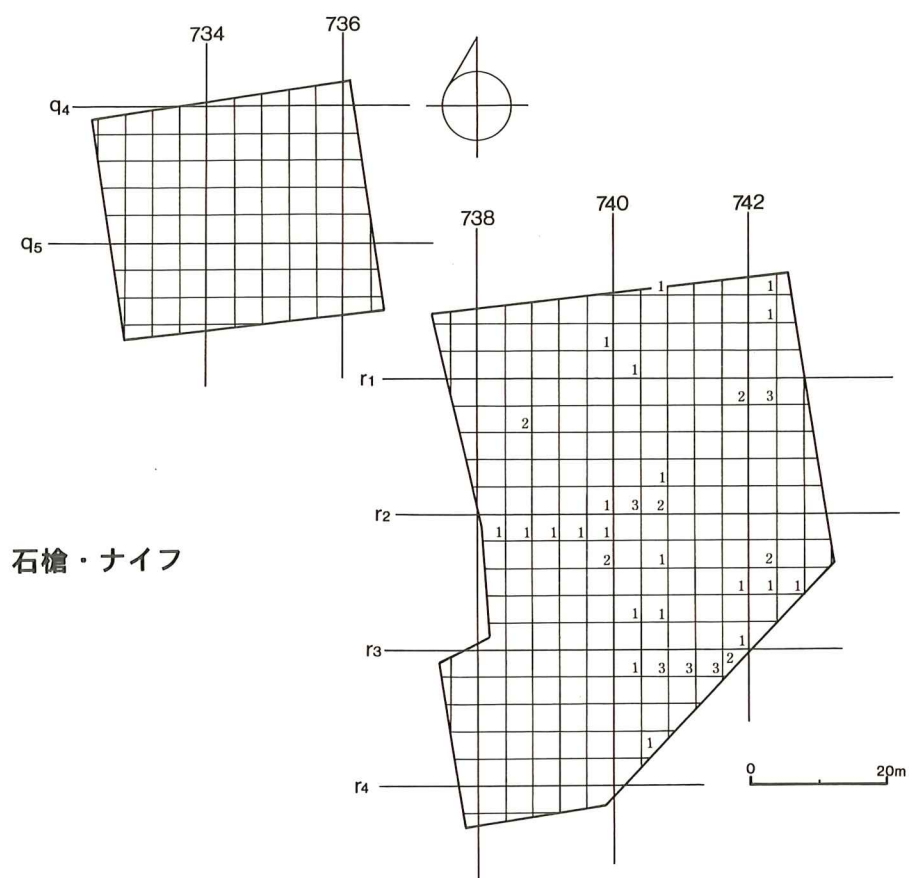
古銭 (88)

88は寛永通宝である。出土したものは、新寛永3期のものと呼ばれる一文銭で、鑄造年代は1,697～1,747年、1,767～1,781年とされ、背面に「元」の字が見られる。

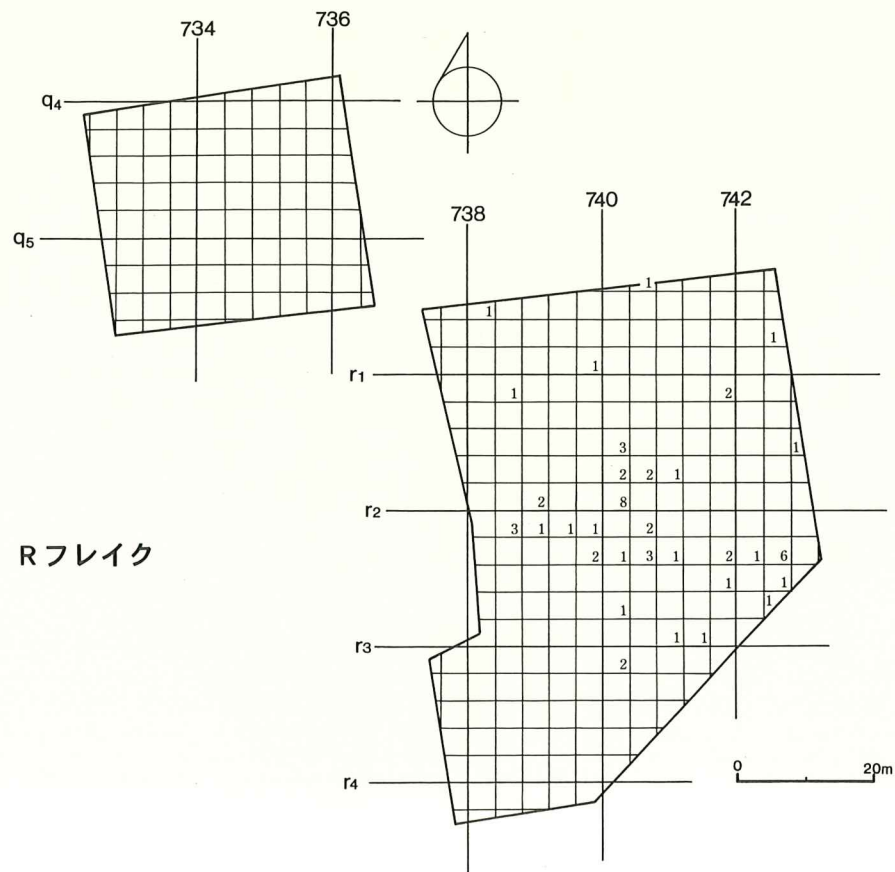
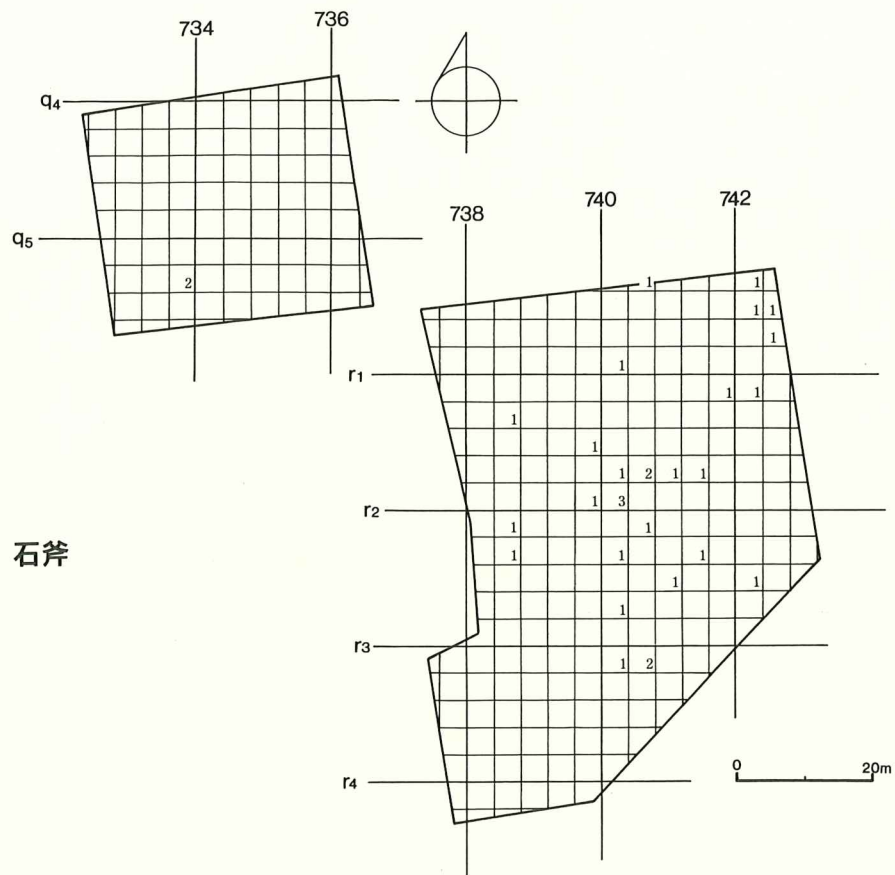
石斧未製品 (図XIII-37-89・90 図版XIII-15)

89・90は石斧未製品である。q₅-732-20区のII層調査中に、加工痕のある礫と剥片がまとまって出土した。接合作業の結果、2個体の石斧未製品であることがわかった。89は打ち欠きによる調整加工が終了し、側縁の敲打調整を行っている際、①・②に折れたので廃棄したものである。90は敲打調整が全く見られず、打ち欠きによる調整加工の途中で①と②・③に割れたもの。さらに②・③を素材とし、打ち欠きによる調整加工を行ったが、②と③に折れたため廃棄されたものである。石材はいずれも片岩である。

(村田 大)

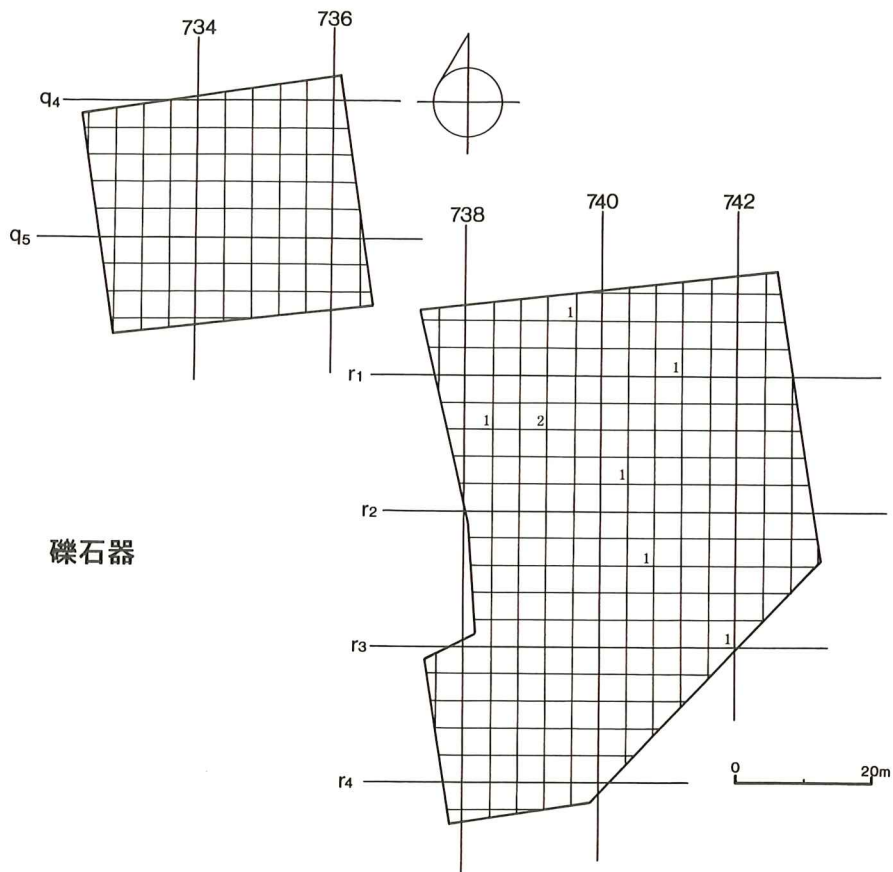
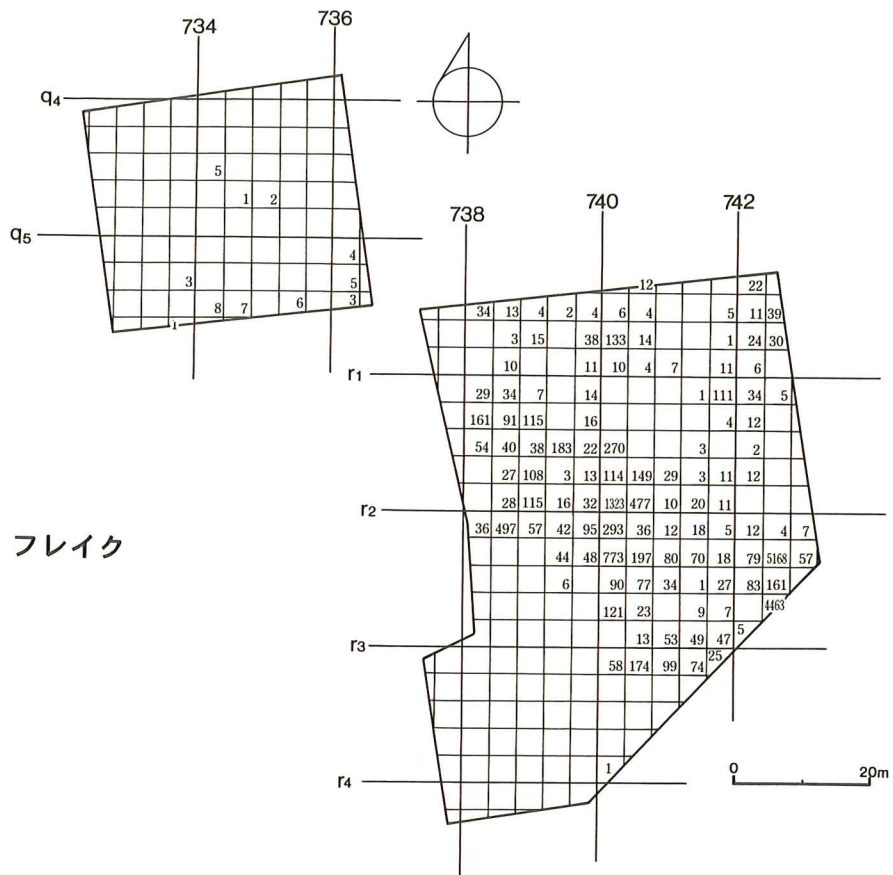


図Ⅷ-30 包含層出土の石槍・ナイフ、スクレイパーの分布

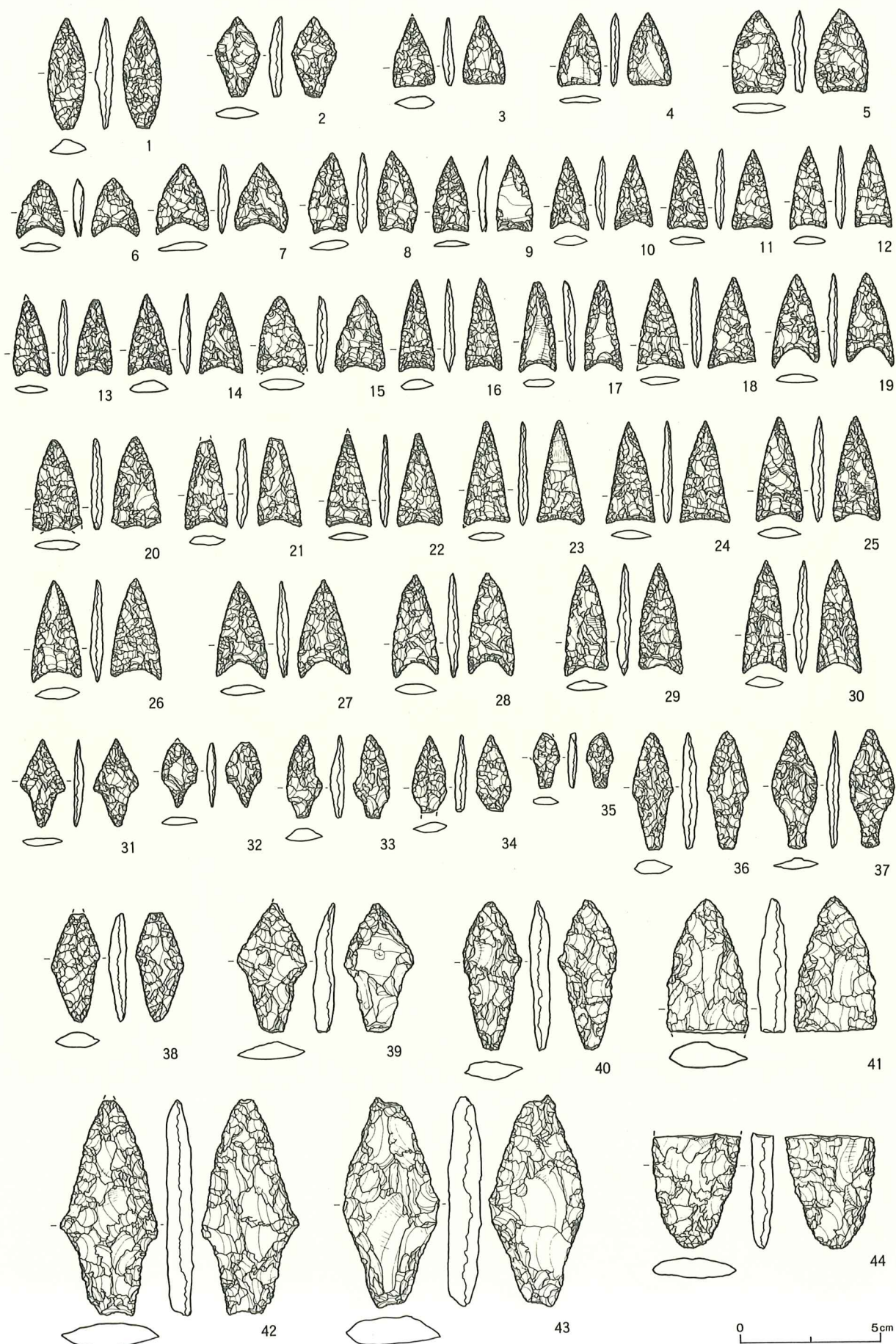


図ⅩⅢ-31 包含層出土の石斧・Rフレイクの分布

4 包含層出土の遺物



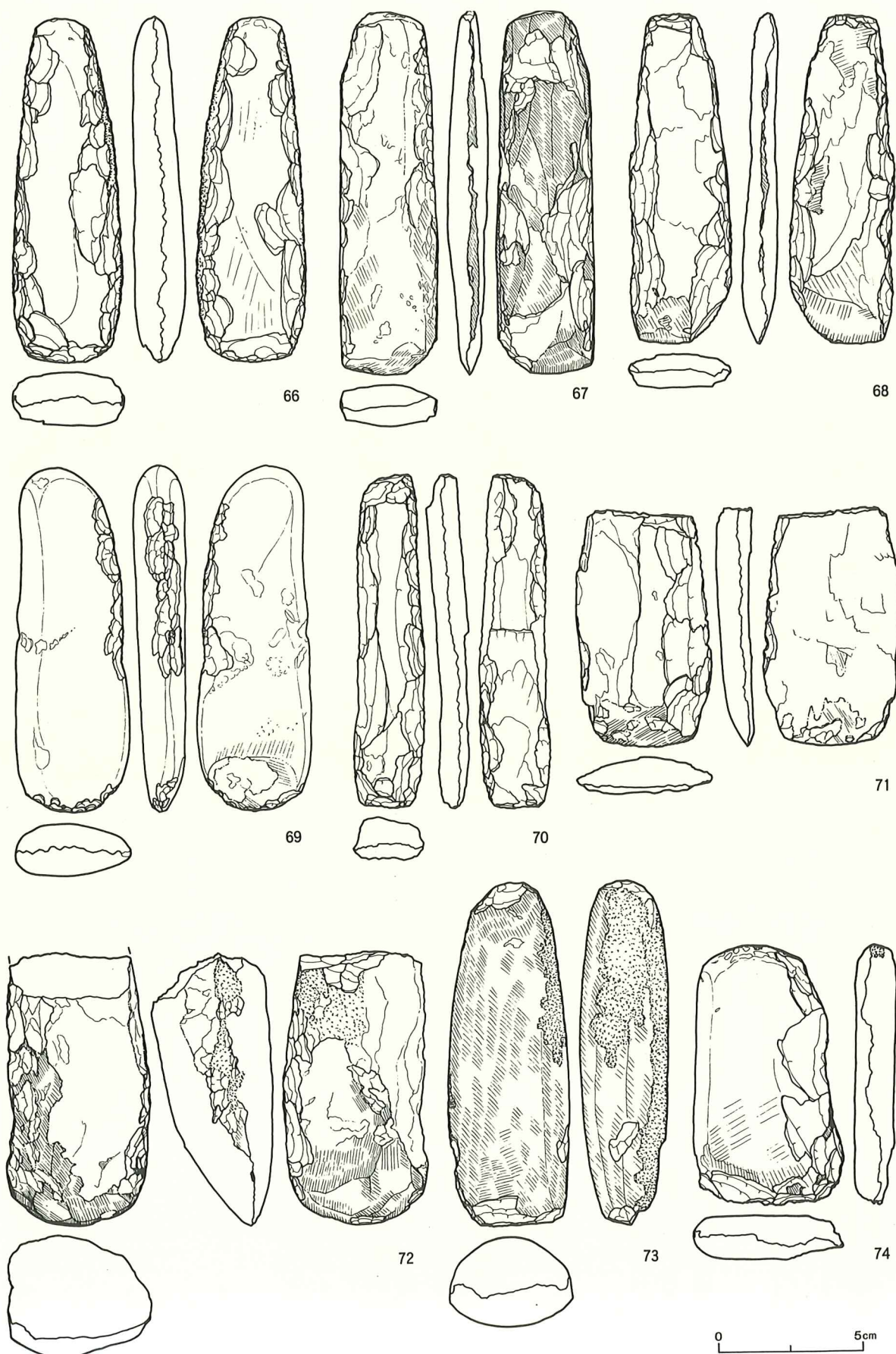
図Ⅲ-32 包含層出土のフレイク・礫石器の分布



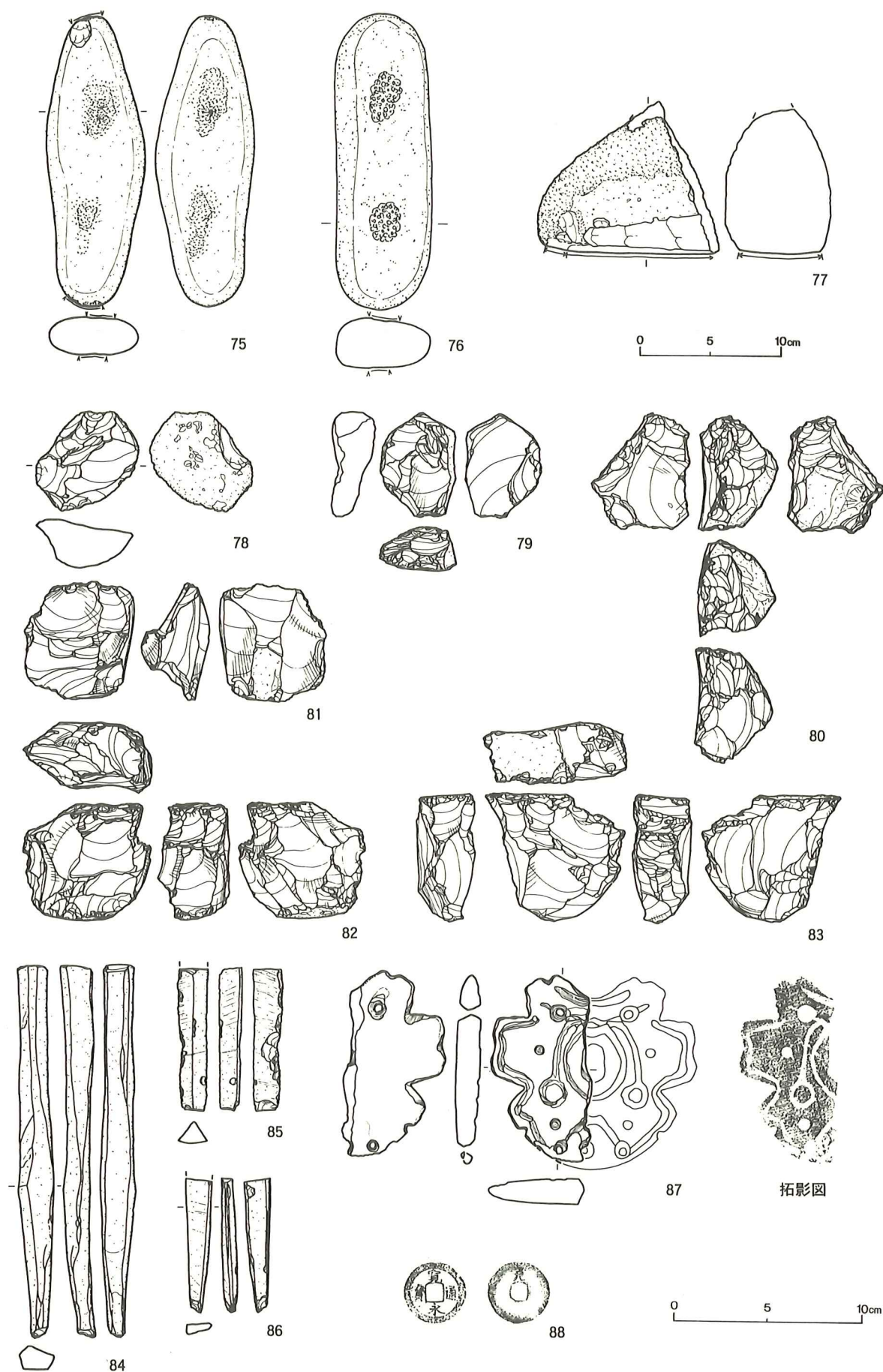
図ⅩⅢ-33 包含層出土の石器(1)



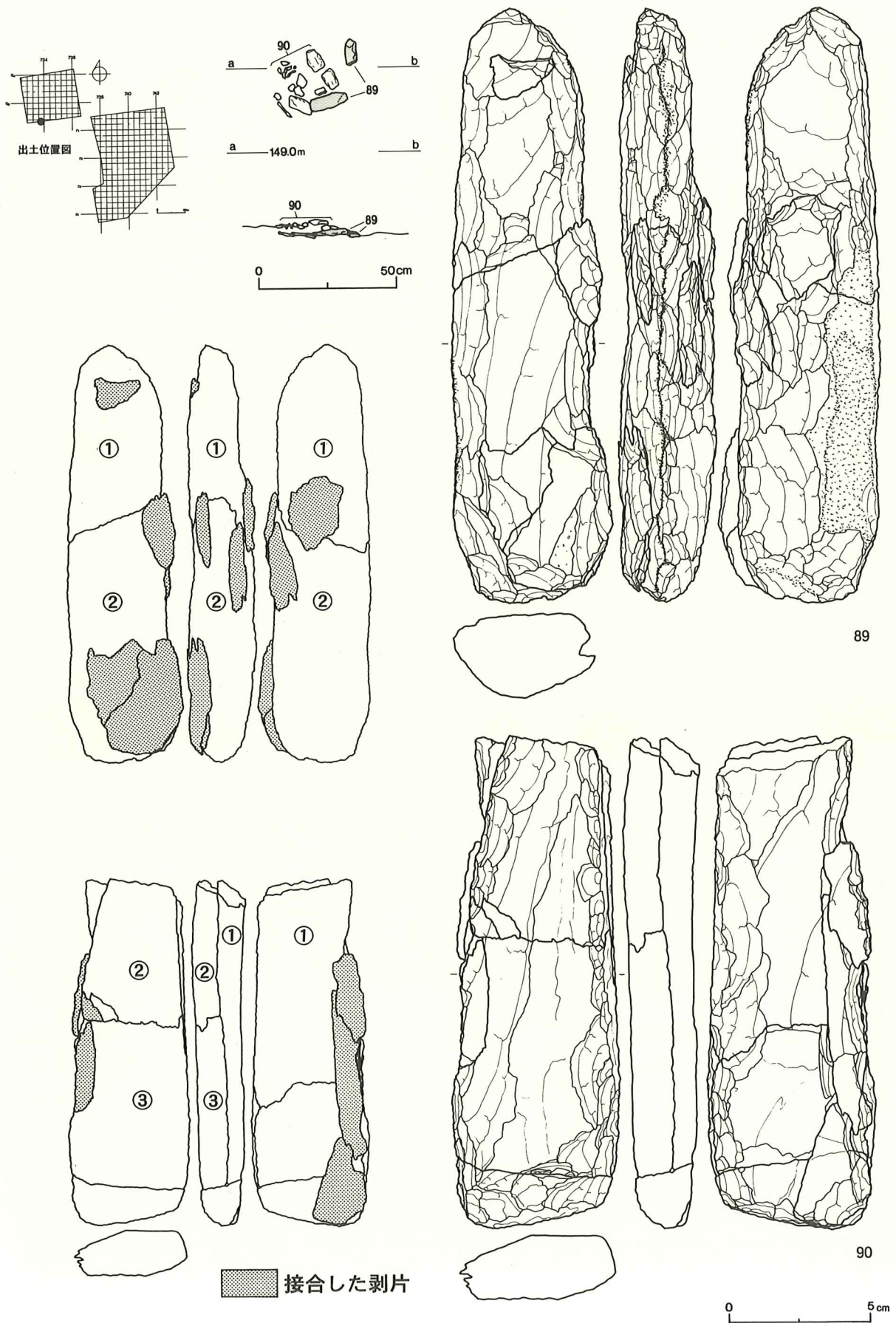
図Ⅲ-34 包含層出土の石器(2)



図Ⅻ-35 包含層出土の石器(3)



図Ⅹ-36 包含層出土の石器(4)



図XIII-37 石斧未製品の出土状況

4 遺構一覧表・遺物一覧表

表Ⅲ-2 遺構規模一覧

遺構名	位置	規模(開口:長軸×短軸/坑底:長軸×短軸/深さ) m	平面形	長軸方向	標高 m
P-1	r ₁ -738-14	0.98 × 0.76 / 0.76 × 0.66 / 0.15	楕円形	N-36°-W	149.9
P-2	r ₁ -738-23	1.15 × 1.08 / 0.99 × 0.91 / 0.26	不整楕円形	N-77°-W	149.8
P-3	r ₁ -740-16・17	1.50 × 1.02 / 1.39 × - / 0.11	楕円形	N-71°-W	150.1
P-4	r ₁ -740-16	1.04 × 0.82 / 0.87 × 0.68 / 0.26	隅丸長方形	N-33°-W	150.1
P-5	r ₁ -740-24・25 r ₂ -740-4・5	1.26 × 1.07 / 0.94 × 0.93 / 0.44	不整楕円形	N-62°-E	150.3
P-6	r ₁ -738-19	(1.00) × (0.93) / (0.70) × (0.76) / 0.31	円形	- -	149.9
P-7	r ₁ -740-18・23	1.08 × 0.95 / 0.85 × 0.66 / 0.16	楕円形	N-24°-W	150.2
P-8	r ₁ -740-3・23	(1.04) × - / (0.88) × - / 0.26	円形	- -	150.2

表Ⅲ-3 焼土一覧

遺構名	位置	規模(長軸×短軸/深さ) m	確認の標高(m)	確認層位
F-1	r ₁ -740-5	1.34 × 0.36 / 0.06	149.480m	Ⅱ b層中位
F-2	r ₁ -740-4・5	1.34 × 1.06 / 0.07	149.514m	Ⅱ c層上面
F-3	r ₁ -740-4	1.43 × 0.65 / 0.13	149.565m	Ⅱ c層上面
F-4	r ₁ -740-4	0.74 × 0.46 / 0.08	149.603m	Ⅱ b層上面
F-5	q ₅ -740-23	1.29 × 0.43 / 0.07	149.475m	Ⅱ b層中位
F-6	q ₅ -740-23	1.73 × 0.73 / 0.08	149.375m	Ⅱ b層中位
F-7	q ₅ -740-23・24 r ₁ -740-3・4	1.78 × 0.90 / 0.12	149.512m	Ⅱ b層中位
F-8	q ₅ -740-23	2.93 × 0.75 / 0.14	149.521m	Ⅱ b層中位
F-9	r ₁ -740-4	0.34 × 0.20 / 0.04	149.539m	Ⅱ b層上位
F-10	q ₅ -740-22・23	1.10 × 0.99 / 0.11	149.518m	Ⅱ b層中位
F-11	q ₅ -740-17・22	1.36 × 0.56 / 0.07	149.576m	Ⅱ b層中位
F-12	q ₅ -748-19・20	(3.20) × 0.90 / (0.10)	149.483m	Ⅱ c層上面
F-13	q ₅ -738-20 q ₅ -740-16	(3.72) × 1.38 / (0.23)	149.488m	Ⅱ c層上面
F-14	q ₅ -740-11	0.66 × 0.44 / 0.05	149.447m	Ⅱ b層上位
F-15	q ₅ -738-11	1.50 × (0.26) / (0.06)	149.255m	Ⅱ c層上面
F-16	q ₄ -734-9	(0.58 × 0.34 / 0.06)	149.557m	Ⅱ b層上位
F-17	r ₁ -738-6・11	3.06 × 1.22 / 0.10	149.188m	Ⅱ b層上位
F-18	r ₁ -740-5 r ₁ -742-1	1.36 × 0.82 / 0.09	149.485m	Ⅱ b層上位
F-19	r ₁ -742-1	0.44 × 0.37 / 0.05	149.616m	Ⅱ b層上位
F-20	q ₅ -740-25	0.62 × 0.45 / 0.22	149.761m	Ⅱ a層中位
F-21	q ₅ -742-25	0.51 × (0.18) / (0.07)	149.497m	Ⅱ b層中位
F-22	q ₅ -742-21	0.32 × 0.27 / 0.06	149.622m	Ⅱ b層中位
F-23	q ₅ -740-17	0.70 × 0.47 / 0.06	149.503m	Ⅱ c層上面
F-24	q ₅ -734-15 q ₅ -736-11	4.49 × 1.97 / 0.07	149.240m	Ⅱ b層中位
F-25	q ₅ -736-11・12・16	1.50 × 1.05 / 0.07	149.215m	Ⅱ b層中位
F-26	q ₅ -742-17	0.34 × 0.20 / 0.04	149.486m	Ⅱ b層中位
F-27	q ₅ -742-17	0.79 × 0.28 / 0.06	149.437m	Ⅱ c層上面
F-28	q ₅ -742-12	0.94 × 0.35 / 0.10	149.453m	Ⅱ c層上面
F-29	q ₅ -742-12・17	2.83 × 1.04 / 0.12	149.465m	Ⅱ c層上面
F-30	q ₅ -742-12	1.38 × 0.43 / 0.08	149.582m	Ⅱ b層中位
F-31	q ₅ -732-5	1.01 × 0.54 / 0.26	149.280m	Ⅱ b層上面
F-32	q ₅ -734-11・16	0.90 × 0.48 / 0.16	149.450m	Ⅱ c層上面
F-33	q ₅ -734-16	0.51 × 0.23 / 0.05	149.400m	Ⅱ b層中位

表Ⅲ-4 遺構出土の遺物一覧

()は破片数

遺構名	土器	石 鏃	石 槍	石 錐	ナイフ	スクレイパー	石 斧	たたき石	台 石	すり石	石 皿	Rフレイク	フレイク	礫	琥珀玉	石製品	合 計
P-1	9	2	10										508				529
P-2	4								(2) 1					22			29
P-3	114	(3)	1		1	3	1		(2)				15	8			148
P-4	29	(1)											4				34
P-5	110	2				1	1						6	¹ (1)			122
P-6	930	(4)			(1)	1	1		1			1	259	³ (1)			1,202
P-7	33					1							265				299
P-8	88	⁶ (1)					2					3	33	² (1)	1,822	4	1,960
合 計	1,317	19	11		2	6	5		6			4	1,090	37	1,822		4,323

表XIII-5 遺構出土の掲載土器一覧

挿図番号	遺構番号	遺物番号	層位	分類	図版番号	備考	挿図番号	遺構番号	遺物番号	層位	分類	図版番号	備考
XII-7-1	P-1	13	覆土1	IV a	XII-2-1		XII-11-2	P-6	19	覆土2	V c	XII-4-2	
XII-7-1	P-2	1	覆土1	V c	XII-2-1		XII-11-3	P-6	19	覆土2	V c	XII-4-3	3点
XII-8-1	P-3	6	確認面	V c	XII-2-1		XII-11-4	P-6	13	覆土2	V c	XII-4-4	3点
-	r ₁ -740-16	1	II		-	接合2点	XII-11-5	P-6	19	覆土2	V c	XII-4-5	
XII-8-2	P-3	49	覆土1	V c	XII-2-2		XII-10-1	P-7	1	確認面	VI a	XII-5-1	
XII-8-3	P-3	56	〃	V c	XII-2-3		XII-10-2	P-7	1	〃	VI a	XII-5-2	14点
XII-8-4	P-3	10	確認面	V c	XII-2-4	2点	XII-12-1	P-8	9	覆土1	VI a	XII-5-1	14点
XII-8-5	P-3	24	確認面	IV a	XII-2-5		XII-12-2	P-8	5 8 9 10	〃	VI a	XII-5-2	5-2点 10-9点 8-8点 9-1点
XII-9-1	P-4	4	〃	V c	XII-3-1								
XII-9-2	P-4	4	〃	V c	XII-3-2								
XII-9-3	P-4	4	〃	V c	XII-3-3								
XII-9-1	P-5	15	〃	VI a	XII-3-1		XII-12-3	P-8	46	覆土	V c	XII-6-3	赤色顔料
XII-9-2	P-5	5	覆土1	VI a	XII-3-2	4点	XII-12-4	P-8	8	覆土1	VI a	XII-6-4	2点
XII-9-3	P-5	5・6・7	〃	VI a	XII-3-3	4点	XII-12-5	P-8	8	〃	VI a	XII-6-5	3点
XII-11-1	P-6	8	覆土2	V c	XII-4-1	52点							

表XIII-6 遺構出土の掲載石器等一覧

挿図番号	遺構名	遺物番号	層位	器種名	分類番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	石材	図版番号	備考
XIII-7-2	P-1	11	覆土1	石鏃	I A 8	20.0×11.8×4.5	0.9	黒曜石	XIII-2-2	
XIII-7-3	P-1	8	覆土1	石鏃	I A 4 b	32.8×16.2×4.5	1.8	〃	-3	
XIII-8-6	P-3	22A	確認面	石鏃	I A 4 a	(27)×16×4	(2.1)	黒曜石	XIII-2-6	
-7	〃	26	〃	ナイフ	III A 2	38×21×7	3.9	〃	-7	
-8	〃	36	〃	ナイフ	III A 2	33×26×7	4.7	〃	-8	
-9	〃	22B	〃	スクレイパー	III C 2	29×(27)×12	(7.9)	〃	-9	
-10	〃	60	覆土1	スクレイパー	III C 4	(30)×(27)×(8)	(8.1)	〃	-10	
-11	〃	59	〃	スクレイパー	III C 7	55×25×8	9.5	〃	-11	
-12	〃	13	確認面	石斧	IV A 1	130×37×13	92.1	片岩	-12	
XIII-9-4	P-4	5	確認面	石鏃	I A 4 b	(17)×21×3	(1.5)	黒曜石	XIII-3-4	
XIII-10-4	P-5	16	覆土1	石鏃	I A 4 b	(21)×18×4	1.3		-4	
-5	〃	8	〃	石鏃	I A 4 b	(22)×13×3	0.6		-5	
XIII-10-6	〃	11	〃	スクレイパー	III C 3	52×30×15	13.5	黒曜石	XIII-3-6	
-7	〃	9	〃	スクレイパー	III C 7	43×19×7	5.6	〃	-7	
-8	〃	1	〃	スクレイパー	III C 8	(26)×32×7	(4.2)	〃	-8	
-9	〃	13	〃	石斧	IV A 3	234×73×52	1,562.0	片岩	-9	
XIII-11-6	P-6	16	覆土2	石鏃片		24.0×12.8×4.5	0.8	黒曜石		
-7	〃	14	〃	〃	I A 8	18.2×12.0×3.0	0.4	〃	XIII-4-7	
-8	〃	8 B	〃	〃	〃	20.8×13.0×4.0	0.6	〃	-8	
-9	〃	15	〃	〃	〃	27.0×19.8×4.0	1.5	〃	-9	
-10	〃	17	〃	〃	〃	20.0×27.0×6.2	2.7	〃	-10	
-11	〃	80	〃	スクレイパー	III C 8	26.8×27.0×10.0	8.4	〃	-11	
XIII-11-12	〃	18	〃	Rフレイク		36.0×27.0×10.0	10.4	〃	-12	
XIII-10-3	P-7	2	確認面	スクレイパー	III C 7	47×31×14	19.6	黒曜石	XIII-5-3	
XIII-12-6	P-8	18	底面	石鏃	I A 4 a	27×15×3	0.9	黒曜石	XIII-6-6	
-7	〃	16	〃	〃		29×18×4	1.6	〃	-7	
-8	〃	20	〃	〃	I A 4 b	17×18×4	0.9	〃	-8	
-9	〃	17	〃	〃	〃	(32)×15×2	1.2	〃	-9	
-10	〃	19	〃	〃	〃	(29)×(17)×2	1.3	〃	-10	
-11	〃	28	〃	〃	〃	(31)×(17)×4	1.3	〃	-11	
-12	〃	23	〃	スクレイパー	III C 7	34×41×8	10.6	〃	-12	
-13	〃	27	〃	〃	〃	39×36×10	12.0	〃	-13	
XIII-13-14	〃	26	〃	石斧	IV A 2	121×59×19	177.4	片岩	-14	
-15	〃	27	底面	石斧	IV A 3	186×53×42	698.0	片岩	XIII-6-15	
-16	〃	25	〃	石製品		(69)×(17)×9	(7.5)	黒曜石	-16	
-17	〃	32・33	ベンガラ上面	〃		(88)×(26)×6	(14.1)	〃	-17	
-18	〃	52-186	底面	平玉		4.9/2.0	0.03	コハク		
-19	〃	53-76	〃	〃		4.9/2.2	0.04	〃		
-20	〃	52-187	〃	〃		5.6/2.0	0.05	〃		

4 遺構一覧表・遺物一覧表

挿図番号	遺構名	遺物番号	層位	器種名	分類番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	石材	図版番号	備考
XIII-13-21	P-8	53-77	底面	平玉		6.1/2.4	0.07	コハク		
-22	〃	53-78	〃	〃		6.3/2.2	0.06	〃		
-23	〃	53-79	〃	〃		6.3/2.3	0.08	〃		
-24	〃	52-188	〃	〃		6.7/2.8	0.10	〃		
-25	〃	53-80	〃	〃		6.6/3.0	0.11	〃		
-26	〃	50-2	〃	〃		7.6/2.9	0.14	〃		
-27	〃	52-189	〃	〃		7.0/3.3	0.12	〃		
-28	〃	52-190	〃	〃		7.4/2.7	0.12	〃		
-29	〃	52-191	〃	〃		7.2/2.6	0.11	〃		
-30	〃	53-81	〃	〃		7.1/3.5	0.15	〃		
-31	〃	57-1	〃	〃		7.9/3.1	0.15	〃		
-32	〃	52-192	〃	〃		8.0/2.0	0.11	〃		
-33	〃	35-17	〃	〃		8.1/2.8	0.15	〃		
-34	〃	57-2	〃	〃		6.3/2.9	0.09	〃		
-35	〃	57-3	〃	〃		6.5/2.9	0.09	〃		
-36	〃	53-82	〃	〃		6.7/2.7	0.09	〃		
-37	〃	50-64	〃	〃		6.8/3.4	0.12	〃		
-38	〃	53-83	〃	〃		7.2/3.6	0.15	〃		
-39	〃	50-6	〃	〃		7.4/3.0	0.13	〃		
-40	〃	52-193	〃	〃		7.5/3.2	0.13	〃		
-41	〃	52-194	〃	〃		7.7/3.8	0.18	〃		
-42	〃	50-38	〃	〃		6.9/2.5	0.10	〃		
-43	〃	52-195	〃	〃		7.8/3.5	0.15	〃		
-44	〃	35-16	〃	〃		8.3/4.1	0.25	〃		
-45	〃	53-84	〃	〃		8.2/3.4	0.19	〃		
-46	〃	34-5	〃	〃		8.2/2.6	0.13	〃		
-47	〃	50-31	〃	〃		8.5/3.4	0.20	〃		

表XIII-7 包含層出土の掲載土器一覧

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	図版番号	備考	挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	図版番号	備考
XII-22-1	q5-742-18	1	II	IV a	XII-8-1	19点	XII-25-22	r1-740-11	6	I	〃	XII-9-22	2点
XII-22-2	q4-734-16	6	II	V c	XII-8-2	36点	XII-25-23	r1-736-6	1	II	〃	XII-9-23	
XII-22-3	q5-742-11	1	II b	VI a	XII-8-3	46点	XII-25-24	r1-738-6	1	〃	〃	XII-9-24	
	q5-742-12	1		〃			XII-25-25	q4-734-16	2	〃	〃	XII-9-25	2点
	q5-742-13	2		〃			XII-25-26	q4-734-16	1	〃	〃	XII-9-26	
XII-23-4	r3-740-1	1	II c	I a	XII-8-4		XII-25-27	r1-740-21	1	II	〃	XII-10-27	3点
XII-23-5	r3-740-1	1	〃	〃	XII-8-5			P-3	5	II	確認面		1点
XII-23-6	r3-740-1	1	〃	〃	XII-8-6		XII-25-28	r1-740-21	1	II	〃	XII-10-28	
XII-23-7	r3-740-1	1	〃	〃	XII-8-7		XII-25-29	r2-740-25	1	III	〃	XII-10-29	
XII-23-8	r3-740-1	1	〃	〃	XII-8-8		XII-26-30	q5-734-13	1	II	V c	XII-10-30	
XII-23-9	r1-738-8	2	〃	III b	XII-8-9		XII-26-31	r2-742-11	1	〃	〃	XII-10-31	
XII-23-10	r1-740-21	49	〃	〃	XII-8-10		XII-26-32	r1-740-21	1	〃	〃	XII-10-32	2点
XII-23-11	q5-742-18	1	〃	〃	XII-8-11			r1-740-22	1	〃	〃		1点
XII-23-12	r2-738-3	1	I	〃	XII-8-12	3点		r1-740-22	12	I	〃		2点
XII-23-13	q4-734-19	1	II	IV a	XII-8-13		XII-26-33	r2-740-		〃	〃	XII-10-33	5点
XII-23-14	r1-738-8	2	〃	〃	XII-8-14		XII-26-34	r2-740-		〃	〃	XII-10-34	7点
XII-23-15	q5-742-13	1	〃	〃	XII-8-15	1点	XII-26-35	q5-742-21	1	II	〃	XII-10-35	
	q5-742-18	1	〃	〃	XII-8-15	2点	XII-26-36	r2-740-6	11	I	〃	XII-10-36	6点
XII-24-16	r1-740-21	1	〃	V c	XII-9-16	2点	XII-26-37	r2-742-11	8	〃	〃	XII-10-37	
XII-24-17	r1-738-6	1	〃	〃	XII-9-17	6点	XII-26-38	q4-734-11	1 A	〃	〃	XII-10-38	
XII-24-18	r1-740-17	1	II I	V c	XII-9-18	3点 9点 1点	XII-26-39	q4-734-11	1 A	〃	〃	XII-10-39	
	r1-740-22	21					XII-27-40	r1-742-7	14	〃	〃	XII-11-40	2点
XII-25-19	r2-740-6	11	I	V c	XII-9-19			r2-742-7	18 A	〃	〃		3点
XII-25-20	r1-738-7	6	II	〃	XII-9-20			r2-742-7	67	〃	〃		3点
XII-25-21	q5-738-20	4	II b	〃	XII-9-21	1点 1点 2点		r2-742-7	73	〃	〃		2点
	q5-738-20	1						r2-742-7	74	〃	〃		1点
	q5-738-13	3						r2-742-7	78	〃	〃		1点
			II c	〃				r2-742-7	92	II	V c		1点
XII-27-42	q4-734-11	1 A	II	〃	XII-11-42	2点	XII-27-41	r1-740-22	21	I	〃	XII-11-41	2点
XII-27-43	r2-738-5	12	〃	〃	XII-11-43	2点	XII-28-54	r1-740-16	13	〃	VI a	XII-12-54	
XII-27-44	r2-742-7	39	〃	〃	XII-11-44		XII-28-55	q5-740-16	3	〃	〃	XII-12-55	4点
							XII-28-56	r2-740-1	6	II	〃	XII-12-56	3点

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	図版番号	備考	挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	分類	図版番号	備考
XIII-27-45	r ₁ -740-21	1	II	V c	XIII-11-45	2点	XIII-28-57	q ₅ -740-7 q ₅ -738-20	1 4	II a II b	◇	XIII-12-57	2点 1点
XIII-27-46	r ₂ -738-14	3	I	◇	XIII-11-46		XIII-28-58	q ₅ -740-16	1	II a	◇	XIII-12-58	
XIII-28-47	q ₅ -740-12	3	◇	VI a	XIII-12-47		XIII-28-59	q ₅ -740-11	2	I	◇	XIII-12-59	
XIII-28-48	q ₅ -742-17	1	II a	◇	XIII-12-48		XIII-28-60	q ₅ -738-12	1	II b	◇	XIII-12-60	
XIII-28-49	q ₅ -732-10	2	II	◇	XIII-12-49		XIII-28-61	q ₅ -738-12	1	◇	◇	XIII-12-61	
XIII-28-50	q ₅ -732-10	2	◇	◇	XIII-12-50		XIII-28-62	q ₅ -740-16	1	II a	◇	XIII-12-62	
XIII-28-51	r ₂ -742-7	48	◇	◇	XIII-12-51		XIII-28-63	r ₂ -742-7	21	II	◇	XIII-12-63	4点
XIII-28-52	q ₅ -742-12	1	II b	◇	XIII-12-52		XIII-28-64	q ₅ -740-16	3	I	◇	XIII-12-64	2点
XIII-28-53	r ₂ -740-16	1	II	◇	XIII-12-53	2点	XIII-28-65	q ₅ -742-12 q ₅ -742-13	1 2	II b II	◇	XIII-12-65	2点 1点

表XIII-8 包含層出土の石器等一覧

器種名	分類記号	点数	器種名	分類記号	点数	器種名	分類記号	点数
石 鏃	IA 3 a	1	ナイフ類	III B 2	7	たたき石	VA 1	3
	IA 3 b	1		III B 8	14		VA 3	1
	IA 4 a	18	スクレイパー	III C 2	2	台 石	VB	3
	IA 4 b	46		III C 3	15	すり石		1
	IA 5 c	8		III C 4	52	砥 石	VII B 1	1
	IA 8	66		III C 5	21	石 核	IX A 1	20
石 槍	IB 1	7		III C 6	5	原 石	IX A 2	4
	IB 2	3		III C 8	38	フレイク	IX B	17,694
	IB 8	13	石 斧	IVA 2	9	Rフレイク	XA	60
石 錐	II A 2	3		IVA 3	2	石製品		1
	II A 3	6		IVA 8	8	礫・礫片		68
つまみ付ナイフ	III A 1	3		IV C 1	2	その他		20
	III A 2	1		IV C 2	12			
ナイフ類	III B 1	5		IV C 8	1	合 計		18,245

表XIII-9 包含層出土の掲載石器等一覧

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	器種名	分類番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	石材	図版番号	備考
XIII-33-1	r ₁ -738-15	2	I	石鏃	IA 3 a	40.0 × 13.8 × 6.0	2.5	黒曜石	XIII-13-1	
XIII-33-2	r ₁ -740-17	4	II	石鏃	IA 3 b	28.8 × 16.0 × 3.4	1.7	◇	XIII-13-2	
XIII-33-3	r ₁ -738-3	2	I	石鏃	IA 4 a	(24.5) × 15.3 × 4.2	1.3	◇	XIII-13-3	
XIII-33-4	r ₂ -742-7	64	II	石鏃	IA 4 a	26.3 × 15.5 × 3.2	1.1	◇	XIII-13-4	
XIII-33-5	r ₂ -740-11	12	ベルト	石鏃	IA 4 a	30.0 × 19.1 × 4.9	2.3	◇	XIII-13-5	
XIII-33-6	r ₁ -740-21	4	II	石鏃	IA 4 b	20.8 × 17.1 × 3.4	1.0	◇	XIII-13-6	
XIII-33-7	r ₂ -742-24	2	II	石鏃	IA 4 b	24.6 × 19.0 × 4.0	1.4	◇	XIII-13-7	
XIII-33-8	r ₁ -740-22	13	I	石鏃	IA 4 b	28.9 × 14.3 × 4.0	1.4	◇	XIII-13-8	
XIII-33-9	r ₂ -742-7	15	II	石鏃	IA 4 b	27.2 × 13.0 × 4.0	0.9	◇	XIII-13-9	
XIII-33-10	r ₂ -742-4	2	I	石鏃	IA 4 b	26.1 × 14.0 × 3.9	0.9	◇	XIII-13-10	
XIII-33-11	r ₁ -740-11	2	II	石鏃	IA 4 b	28.6 × 14.2 × 3.2	1.0	◇	XIII-13-11	
XIII-33-12	r ₁ -738-8	4	II	石鏃	IA 4 b	29.5 × 12.9 × 3.5	1.1	◇	XIII-13-12	
XIII-33-13	r ₁ -740-20	2	トレンチ	石鏃	IA 4 b	(27.4) × 13.4 × 3.5	1.1	◇	XIII-13-13	
XIII-33-14	r ₂ -740-11	13	ベルト	石鏃	IA 4 b	29.0 × 15.5 × 4.1	1.4	◇	XIII-13-14	
XIII-33-15	r ₁ -740-17	6	II	石鏃	IA 4 b	27.5 × 18.0 × 4.0	1.7	◇	XIII-13-15	
XIII-33-16	r ₁ -740-17	3	II	石鏃	IA 4 b	32.7 × 13.1 × 4.1	1.3	◇	XIII-13-16	
XIII-33-17	r ₁ -740-22	4	II	石鏃	IA 4 b	32.2 × 13.8 × 4.5	1.4	◇	XIII-13-17	
XIII-33-18	r ₂ -740-11	2	II	石鏃	IA 4 b	32.1 × (16.9) × 3.8	1.4	◇	XIII-13-18	
XIII-33-19	r ₂ -742-17	5 B	II	石鏃	IA 4 b	33.8 × 16.5 × 3.5	1.4	◇	XIII-13-19	
XIII-33-20	q ₅ -742-11	2	II	石鏃	IA 4 b	33.0 × 17.6 × 4.0	2.1	◇	XIII-13-20	
XIII-33-21	q ₅ -742-13	3	II	石鏃	IA 4 b	(32.0) × 15.5 × 4.2	1.7	◇	XIII-13-21	
XIII-33-22	r ₂ -742-11	21	II	石鏃	IA 4 b	(33.0) × 16.0 × 3.1	1.3	◇	XIII-13-22	
XIII-33-23	r ₁ -740-4	2	II	石鏃	IA 4 b	37.0 × 16.5 × 3.5	1.6	◇	XIII-13-23	

4 遺構一覧表・遺物一覧表

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	器種名	分類番号	長さ(m)×幅(m)×厚さ(m)	重量(g)	石材	図版番号	備考
XIII-33-24	r ₂ -740-6	2	II	石鏃	IA4b	36.7 × 17.5 × 3.6	1.6	黒曜石	XIII-13-24	
XIII-33-25	r ₂ -742-12	25	I	石鏃	IA4b	39.5 × 17.0 × 4.9	2.1	〃	XIII-13-25	
XIII-33-26	r ₂ -738-2	2	II	石鏃	IA4b	36.8 × 18.5 × 4.2	2.4	〃	XIII-13-26	
XIII-33-27	r ₂ -742-17	10	I	石鏃	IA4b	34.8 × 18.8 × 4.0	1.9	〃	XIII-13-27	
XIII-33-28	r ₁ -740-22	5	II	石鏃	IA4b	37.0 × 16.9 × 4.1	2.0	〃	XIII-13-28	
XIII-33-29	q ₅ -742-16	5	I	石鏃	IA4b	39.8 × 16.5 × 5.3	2.1	〃	XIII-13-29	
XIII-33-30	r ₂ -738-10	6	I	石鏃	IA4b	40.2 × 16.0 × 5.8	2.1	〃	XIII-13-30	
XIII-33-31	r ₂ -738-5	13	I	石鏃	IA5a	31.4 × 16.0 × 3.4	1.0	〃	XIII-13-31	
XIII-33-32	r ₁ -738-20	2	I	石鏃	IA5c	(23.0) × 13.0 × 3.1	0.8	〃	XIII-13-32	
XIII-33-33	r ₃ -740-1	4	II c	石鏃	IA5c	11.8 × 13.0 × 5.0	1.4	〃	XIII-13-33	
XIII-33-34	r ₃ -740-2	2	II	石鏃	IA5c	36.8 × 18.4 × 4.2	1.2	〃	XIII-13-34	
XIII-33-35	r ₁ -740-11	3	II	石鏃	IA5c	(19.9) × (9.5) × (3.1)	0.5	〃	XIII-13-35	
XIII-33-36	r ₂ -742-1	1	I	石鏃	IA5c	42.1 × 15.4 × 5.5	2.7	〃	XIII-13-36	
XIII-33-37	r ₁ -740-5	3	II b	石鏃	IA5c	42.1 × 16.0 × 4.8	2.0	〃	XIII-13-37	
XIII-33-38	r ₁ -738-7	2	II	石槍	IB1	(39.0) × 17.1 × 6.5	3.2	〃	XIII-13-38	
XIII-33-39	q ₅ -742-6	4	II a	石槍	IB1	(46.0) × 25.0 × 7.8	6.2	〃	XIII-13-39	
XIII-33-40	r ₂ -738-3	3	I	石槍	IB1	53.9 × 21.0 × 7.5	6.4	〃	XIII-13-40	
XIII-33-41	r ₂ -738-4	6	I	石槍	IB1	47.6 × 29.0 × 10.0	14.0	〃	XIII-13-41	
XIII-33-42	r ₁ -740-5	1	II a	石槍	IB1	77.1 × 34.8 × 10.1	22.5	〃	XIII-13-42	
XIII-33-43	r ₃ -740-21	1	II c	石槍	IB2	63.5 × 29.7 × 11.3	26.2	〃	XIII-13-43	
XIII-33-44	r ₃ -740-3	16	I	ナイフ	IB8	41.4 × 31.8 × 8.0	10.4	〃	XIII-13-44	
XIII-34-45	r ₁ -740-16	15	I	石錐	IIA2	28.7 × 9.2 × 5.0	1.2	〃	XIII-13-45	
XIII-34-46	r ₁ -740-16	7	II	石錐	IIA2	39.1 × 16.5 × 7.8	4.4	〃	XIII-13-46	
XIII-34-47	r ₁ -740-22	14	I	石錐	IIA2	35.0 × 15.5 × 8.0	2.7	〃	XIII-13-47	
XIII-34-48	r ₁ -738-5	2	I	石錐	IIA3	51.5 × 18.0 × 9.2	6.3	〃	XIII-13-48	
XIII-34-49	q ₄ -734-25	1	II	つみぢきり	III A1	66.0 × 30.0 × 15.0	17.7	頁岩	XIII-13-49	
XIII-34-50	r ₃ -740-1	6	II c	ナイフ	III B1	64.5 × 29.7 × 9.8	15.2	黒曜石	XIII-13-50	
XIII-34-51	r ₃ -740-2	4	II	ナイフ	III B1	67.0 × 30.1 × 6.0	7.4	〃	XIII-13-51	
XIII-34-52	r ₃ -740-4	4	II	ナイフ	III B1	66.2 × 21.9 × 9.0	12.3	〃	XIII-13-52	
XIII-34-53	r ₂ -740-17	2	I	ナイフ	III B1	40.0 × 21.2 × 8.4	10.1	〃	XIII-13-53	
XIII-34-54	r ₃ -740-2	18	II c	ナイフ	III B2	50.2 × 17.3 × 8.0	6.5	〃	XIII-13-54	
XIII-34-55	r ₂ -738-10	7	I	ナイフ	III B2	77.0 × 29.9 × 9.8	17.6	〃	XIII-13-55	
XIII-34-56	r ₁ -740-22	9	II	ナイフ	III B2	78.7 × 35.0 × 9.8	25.6	〃	XIII-13-56	
XIII-34-57	q ₅ -742-16	6	I	スクレイパー	III C2	36.6 × 50.2 × 10.4	18.7	〃	XIII-13-57	
XIII-34-58	r ₁ -740-22	26	I	スクレイパー	III C2	47.6 × 45.5 × 13.0	18.1	〃	XIII-13-58	
XIII-34-59	r ₂ -740-1	10	I	スクレイパー	III C3	40.5 × 21.9 × 10.0	10.1	〃	XIII-13-59	
XIII-34-60	r ₁ -740-21	21	II	スクレイパー	III C3	63.5 × 29.7 × 11.3	17.5	〃	XIII-13-60	
XIII-34-61	r ₃ -740-4	6	II	スクレイパー	III C3	67.5 × 33.6 × 13.0	13.9	〃	XIII-13-61	
XIII-34-62	r ₂ -740-1	2	II	スクレイパー	III C3	84.9 × 14.2 × 14.4	22.1	〃	XIII-13-62	
XIII-34-63	r ₂ -738-4	8	I	スクレイパー	III C4	46.0 × 43.3 × 12.5	21.9	〃	XIII-13-63	
XIII-34-64	r ₁ -738-8	6	II	スクレイパー	III C4	71.9 × 34.8 × 14.0	25.4	〃	XIII-13-64	
XIII-34-65	q ₅ -742-18	4	II	スクレイパー	III C6	62.0 × 42.4 × 17.2	19.1	〃	XIII-13-65	
XIII-35-66	q ₅ -742-11	7	II	石斧	IVA2	119.6 × 38.5 × 18.0	134.2	泥岩	XIII-14-66	
XIII-35-67	r ₂ -740-9	2	I	石斧	IVA2	126.1 × 33.6 × 14.1	92.4	蛇紋岩	XIII-14-67	
XIII-35-68	r ₂ -740-2	7	I	石斧	IVA2	114.7 × 35.8 × 11.9	69.6	片岩	XIII-14-68	
XIII-35-69	r ₁ -742-1	11	I	石斧	IVA2	120.5 × 38.0 × 19.0	135.5	流紋岩	XIII-14-69	
XIII-35-70	r ₁ -740-21	54	II	石斧	IVA2	116.0 × 24.5 × 15.0	52.8	片岩	XIII-14-70	
XIII-35-71	r ₁ -740-16	12	I	石斧	IVA2	82.6 × 47.5 × 13.0	69.1	片岩	XIII-14-71	
XIII-35-72	q ₅ -740-21	4	I	石斧	IVA2	94.9 × 49.7 × 39.0	256.1	泥岩	XIII-14-72	
XIII-35-73	q ₅ -742-13	6	II	石斧(未製品)	IVC	119.8 × 42.9 × 31.0	268.6	砂岩	XIII-14-73	
XIII-35-74	r ₁ -740-17	22	II	石斧	IVA3	90.0 × 53.1 × 14.2	124.7	蛇紋岩	XIII-14-74	
XIII-36-75	r ₁ -738-6	7	II	たたき石	VA1	152.5 × 46.0 × 51.6	252.2	砂岩	XIII-14-75	
XIII-36-76	q ₅ -740-23	4	II b	たたき石	VA3	104.8 × 33.2 × 18.4	363.0	〃	XIII-14-76	

挿図番号	発掘区	遺物番号	層位	器種名	分類番号	長さ(m)×幅(m)×高さ(m)	重量(g)	石材	図版番号	備考
XIII-36-77	r ₁ -738-20	4	I	すり石	VI A 2	80.0 × 95.0 × 56.0	531.8	砂岩	XIII-14-77	
XIII-36-78	r ₂ -740-6	8	II	石核	IX A 1	35.0 × 35.5 × 17.0	18.1	黒曜石	XIII-14-78	
XIII-36-79	r ₁ -738-25	4	II	石核	IX A 1	31.5 × 26.5 × 15.0	13.0	◇	XIII-14-79	
XIII-36-80	r ₁ -740-17	20	II	石核	IX A 1	33.8 × 40.5 × 27.0	31.5	◇	XIII-14-80	
XIII-36-81	r ₁ -742-5	5	II a	石核	IX A 1	40.5 × 44.6 × 25.0	48.3	◇	XIII-14-81	
XIII-36-82	q ₅ -738-11	6	II a	石核	IX A 1	40.5 × 44.6 × 25.0	48.3	◇	XIII-14-82	
XIII-36-83	r ₂ -740-7	6	I	石核	IX A 1	44.2 × 49.0 × 20.6	43.7	◇	XIII-14-83	
XIII-36-84	r ₁ -740-22	10	II	棒状原石	IX A 2	130.5 × 12.5 × 11.6	17.0	◇	XIII-14-84	
XIII-36-85	r ₁ -738-24	2	II	棒状原石	IX A 2	50.0 × 10.5 × 8.0	4.5	◇	XIII-14-85	
XIII-36-86	q ₅ -738-11	2	II	棒状原石	IX A 2	54.0 × 9.5 × 5.4	2.4	◇	XIII-14-86	
XIII-36-87	r ₁ -740-23	2	I	石製品		(63.4) × (33.1) × 8.2	28.1	蛇紋岩	XIII-14-87	
XIII-36-88	r ₂ -740-1		I	古銭			2.0		XIII-14-88	
XIII-37-89	q ₅ -732-20	1 A	II	石斧(未製品)	IV C 1	75.5 × 57.2 × 28.0	436.3	片岩	XIII-15-89	
	q ₅ -732-20	1 B	II							
	q ₅ -732-20	2	II							
	q ₅ -732-20	3	II					片岩		
	q ₅ -732-20	4	II							
	q ₅ -732-20	5	II							
	q ₅ -732-20	6	II							
XIII-37-90	q ₅ -732-20	7	II	石斧(未製品)	IV C 1	213.0 × 57.5 × 35.0	630.7	片岩	XIII-15-90	
	q ₅ -732-20	8	II							

XIV 淹里29遺跡の調査

XV 滝里29遺跡の調査

1 調査の概要

(1) 遺跡の位置

滝里29遺跡は、標高138～140m、空知川に形成された河岸段丘及び自然堤防上に立地している。標高にして約6m下には空知川が流れており、遺跡はその右岸にあたる。本遺跡は、滝里遺跡群の中で、富良野市よりの空知川上流域にあたり、最も南に位置する滝里26遺跡から直線距離で約1.3km北側にある。近接する遺跡では、滝里3遺跡からは約350m、滝里20遺跡からは約150m北に位置する。

(2) 調査方法

調査区は耕作及び宅地造成による攪乱を調査区全域に亘って受けていた。攪乱は旧地形を改変するほどに大規模なものであったため、包含層はあまり残存していないことが予想された。このため調査は、バックフォアによって宅地造成の攪乱層であるI層を除去することから行った。その結果、調査区北西側でややまとまって土器が出土し、空知川に向かって傾斜する包含層を確認した。この包含層の広がりを確認するため、包含層を検出した地点から放射状にトレンチを設定した。その結果、包含層は調査区北西端の部分に限って残存していること。空知川に向かって傾斜し、次第に薄くなっていくことがわかった。このため調査は包含層残存区域に関しては、4×4mの小グリッドを設定して人力で調査を行った。

また、今回の報告では、既に年報10で述べた包含層の残存範囲より狭まっているが、その後の検討の結果、南側の包含層残存部分は、北西部で検出された包含層に色調は類似するが、遺物が全く出土しない。また北西部の包含層との連続が確認できなかったことから、包含層ではないと判断したためである。またその地区で検出されたF-4も、上面、焼土中に遺物を伴わないこと、I層直下で検出されたことから、I層で形成されたものと考え、報告から除外した。

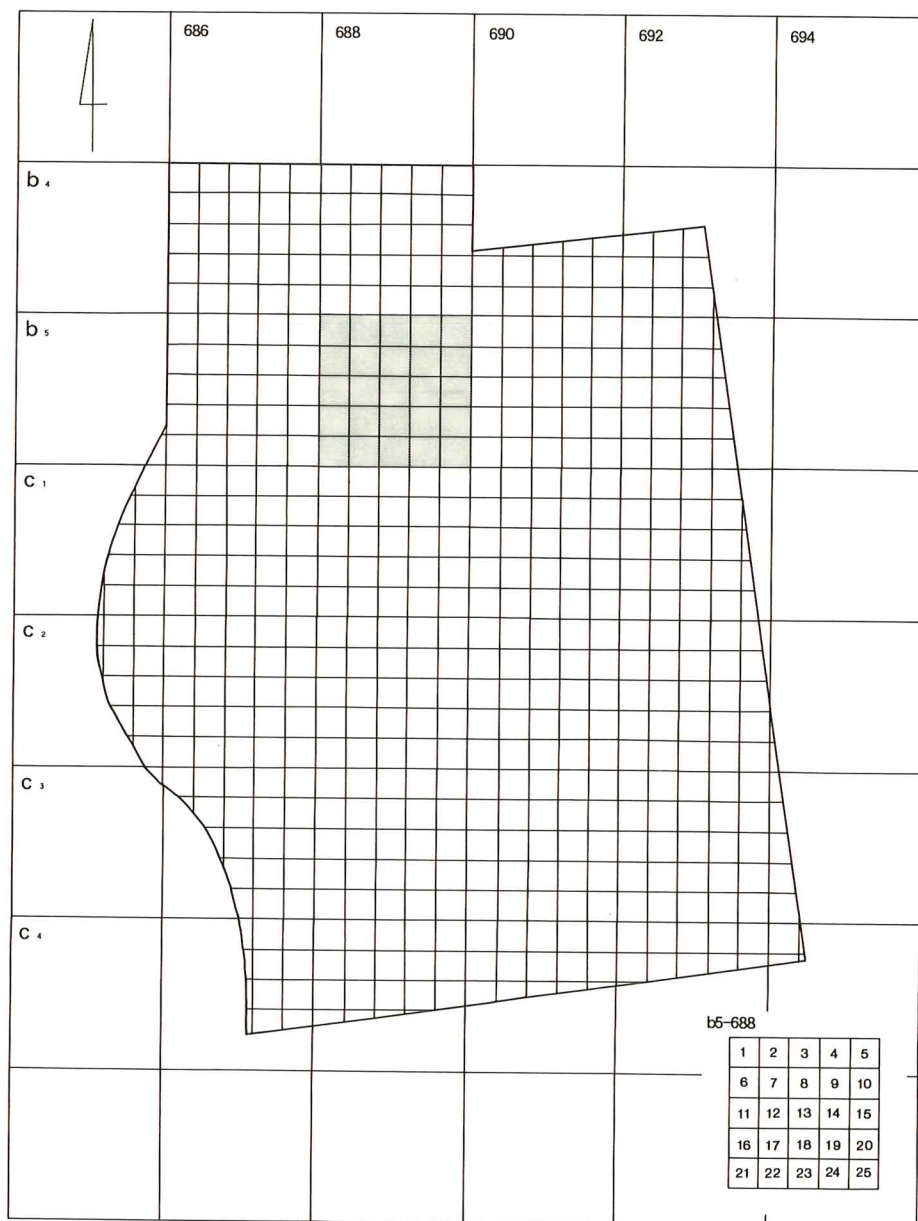
(3) 調査結果の概要

遺構は土壌2基、Tピット7基、焼土3箇所を検出した。いずれも包含層残存区域内である調査区北西部で検出した。遺物総点数は9,026点で、内訳は土器が681点、石器等は8,345点である。土器は縄文時代前期初頭から後期初頭に相当する土器が出土している。ほとんどが縄文時代前期末～中期前

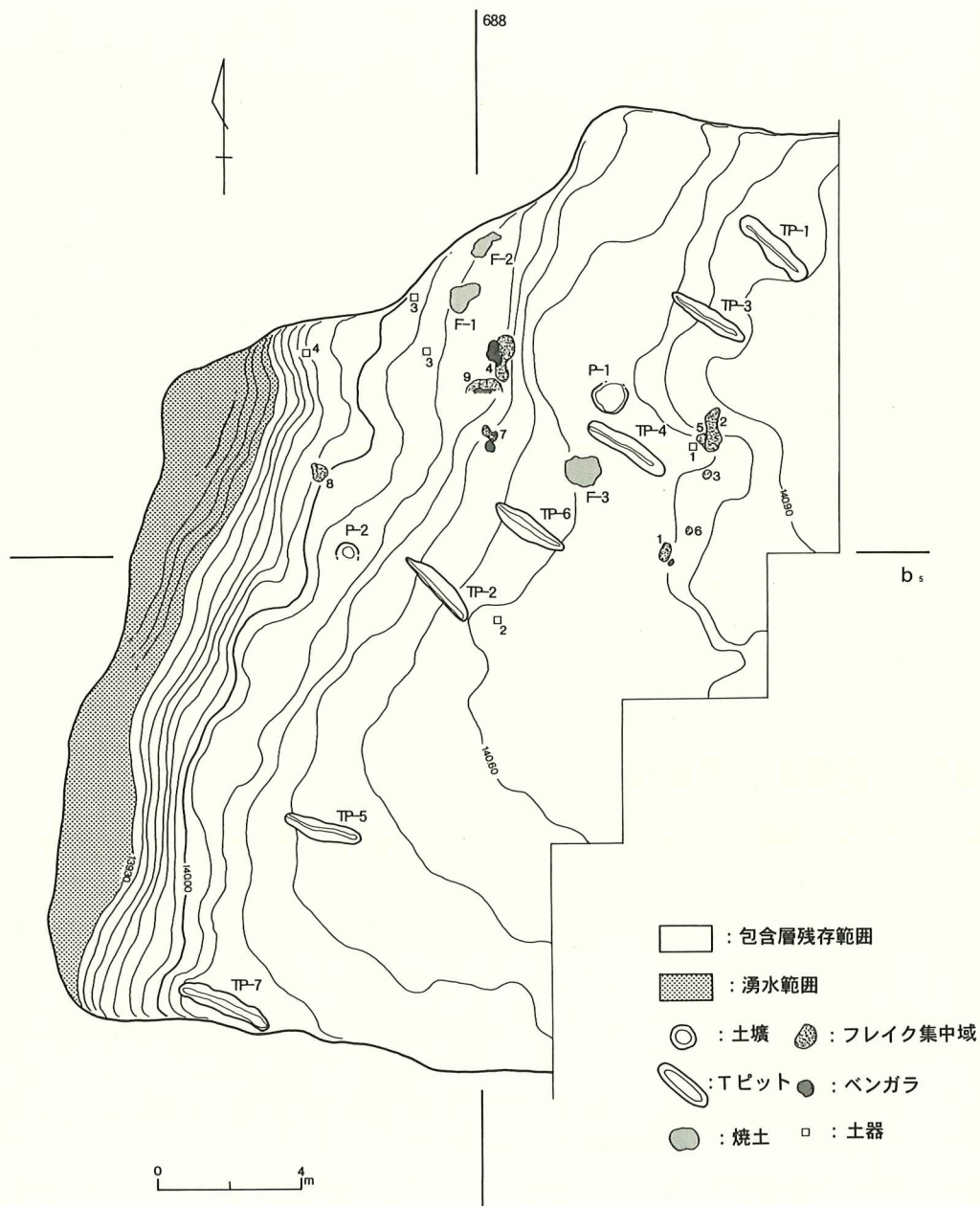
表XV-1 出土遺物一覧

名 称	点 数	名 称	点 数	名 称	点 数
Ⅱ 群 土 器	513	スクレイパー類	15	砥 石	55
Ⅲ 群 土 器	167	石 斧	9	剥 片	8,117
Ⅳ 群 土 器	1	研 磨 石 材	2	R フ レ イ ク	29
石 鏃	12	石 斧 原 材	1	焼 成 礫	2
石 槍	8	石 斧 剥 片	27	礫	39
つまみ付きナイフ	17	た た き 石	4	出土遺物総合計	9,026
ナ イ フ 類	6	石 皿	2		

1 調査の概要



図Ⅳ－1 発掘区設定図



図XV-2 遺構位置図

葉にかけての押引文が施文される土器である。石器等は剥片石器では、つまみ付きナイフ、石鏃、石槍、スクレイパー類等が出土し、磨製石器では石斧、石斧剥片が出土している。礫石器では、たたき石、砥石、石皿等が出土している。その他フレイク、焼成礫が出土している。(立田 理)

2 基本土層

基本土層は次のように把握した。

- I 層 耕作土（水田、宅地造成によるものと見られる土）
- II a 層 黒褐色土（水田、宅地造成によるとみられる客土）
- II b-1 層 暗褐色弱粘質土（ややシルト質、炭化物を若干含む）遺物包含層
- II b-2 層 暗灰褐色粘質土（黄褐色シルトを斑状に含む）遺物包含層
- III 層 黄褐色シルト質粘土（やや緻密）
- IV 層 灰褐色土（炭化物を若干混じる）
- V 層 黄褐色シルト（やや緻密）

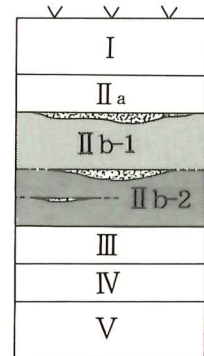


図 XV-3 基本土層図

ローマ数字でII層とした層位が3枚あるが、これは、I層を除去した後、遺物包含層らしき黒褐色土を検出し、それをII層と呼んだが、包含層の層厚と枚数を把握するためのトレンチ調査で、これが2枚に別れ、さらにそのうち下層の1枚がさらに二つに別れることがわかったためである。調査はわかるかぎり細かく分層し、取り上げを行ったが、分層不可能な部分があったためそうした遺物はII層として取り上げた。これらのII層はやや層厚が薄くなるけれども、空知川に向かって続いていくため、できる限り追いかけて調査をした。標高約138m付近まで掘り下げたところで湧水が激しくなり、遺物も出土しなくなったため、調査を終了した。また、IV層も色調から判断すると包含層の可能性があったが、調査終了後に設定したトレンチ調査で遺物が全く出土しなかったことから、無遺物層と判断した。V層は基盤層である黄褐色土である。この層以下の層位は、礫層と砂層の互層をなす堆積である。

3 遺構と遺構出土の遺物

本遺跡で検出された遺構は、土塋2基、Tピット7基、焼土3ヶ所である。全て包含層残存範囲内で検出されている。土塋2基のうち1基は墓の可能性はある。Tピットは、標高140.2m～140.9mの範囲に長軸が傾斜に沿う形で分布している。焼土は上面及び周囲にフレイク等の遺物が多く出土することが多い。

(1) 土塋

P-1（図 XV-6 図版 XV-2、6）

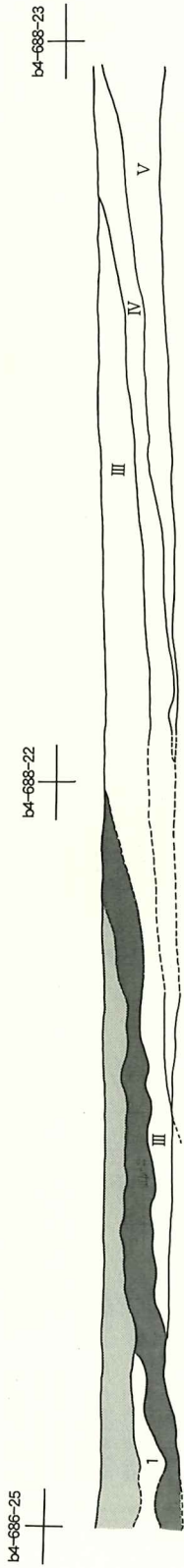
位 置：b₄-688-21・22 規 模：0.98×(0.92)／0.84×0.82／0.38m

平 面 形：不整円形 長軸方向：N-86°-W

出土遺物：覆土からII群b類土器1点、石鏃片1点、ナイフ類3点、スクレイパー類6点、石斧剥片3点、Rフレイク2点、剥片1,077点が出土している。その他では炭化物が出土している。塋底からは石皿が1点、剥片1,974点、礫1点が出土している。1はスクレイパーである。覆土中から出土している。2は塋底から出土した石皿である。使用面が明瞭にくぼんでいる。

トレンチ調査中にIV層と見られる土にフレイク、赤色顔料が混じる部分があることを確認した。IV層が包含層となる可能性もあったためトレンチの拡張を行った。その結果、この土はIV層とは異なる落ち込みであり、確認できた平面形は半円形を呈し、トレンチの反対側に残したセクションベルトに延びていることがわかった。セクションベルトを精査すると、壁の立ち上がりが確認され、土塋であることが判明した。平面形は北西部分がやや膨らむ円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、塋底との境は明瞭である。塋底は平坦である。土層は7層に区分できた。人為的な埋め戻しとみられる様

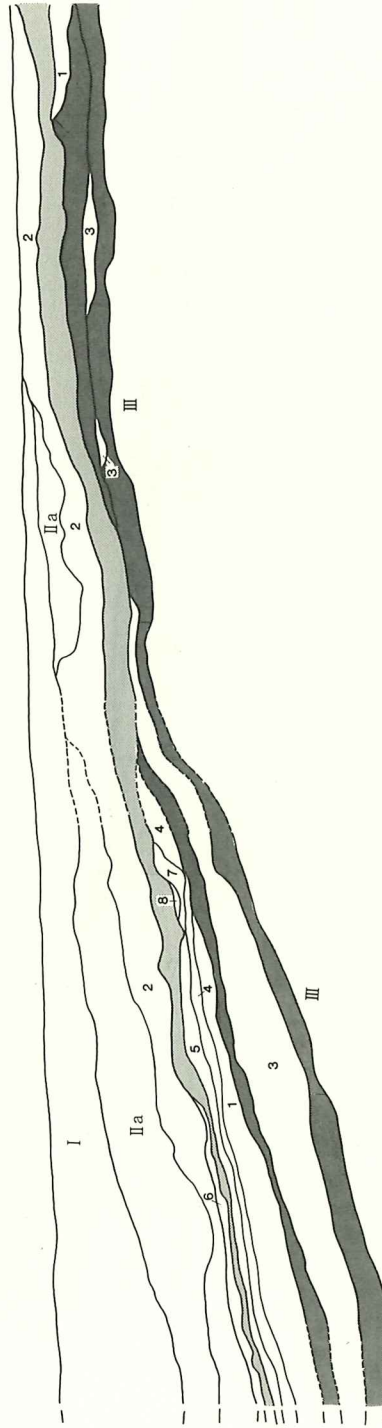
Aセクション



b4-686-25
141.10m

b4-686-24

b4-686-25

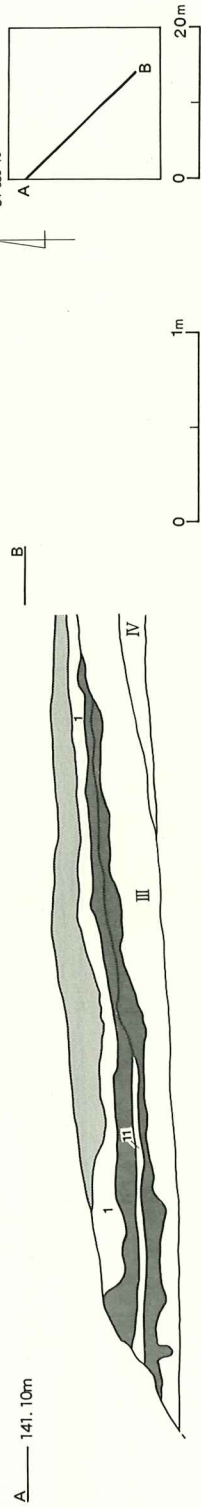


b4-686-25
141.10m

b4-686-24

b4-686-25

Cセクション



A 141.10m

b4-686-16

図ⅩⅣ-4 土層断面図(1)

Bセクション

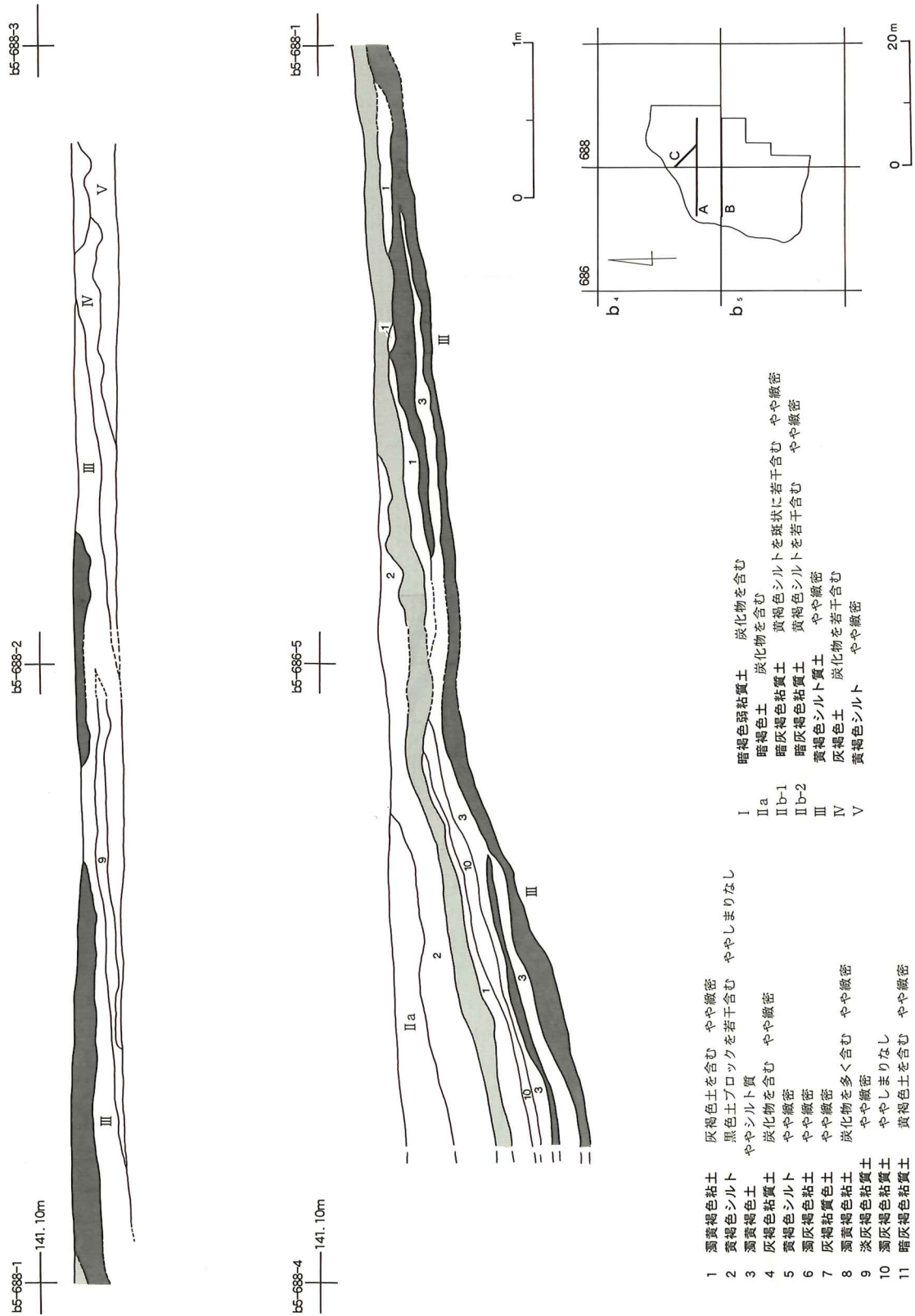


図47-5 土層断面図(2)

相を呈する。最下層である7層は、フレイク、赤色顔料、炭化物を均等に含んでおり、水平に堆積する。

出土遺物：壙底から石皿が出土した。土壙北西側の壁面近くに使用面を上にした状態で確認された。(図XV-6)

時期：不明であるが、掘り込み面がⅡb-2層とみられることから、縄文時代前期末葉から中期初頭である可能性が高い。

P-2 (図XV-6 図版XV-2)

位置：b₄-686-24・25 **規模：**0.63×(0.42)／0.32×0.32／0.26m

平面形：不整円形 **長軸方向：**N-86°-W

出土遺物：なし

セクションベルトの精査中に確認した。平面形は確認できた部分で、ほぼ円形を呈する。壁はやや急である。壙底は南北方向で丸底状を呈し、東西方向では浅い皿状を呈する。

時期：不明であるが、縄文時代中期から後期の間に構築された可能性が高い。

(2) Tピット

TP-1 (図XV-7 図版XV-3.6)

位置：b₄-686-12・13・18 **規模：**2.42×0.68／1.97×0.05／0.88m

平面形：長円形 **長軸方向：**N-48.5°-W

出土遺物：覆土からスクレイパー類1点、フレイクが3点出土している。1はスクレイパーである。背面調整によって刃部が作出される。

Ⅲ層上面で暗褐色の落ち込みを検出した。長軸は傾斜に沿う。平面形は壙口で不整の長円形、壙底で細い溝状を呈する。壁は長軸方向で急で、短軸方向でY字状を呈する。

時期：不明であるが、縄文時代前期から後期まで間に構築された可能性がある。

TP-2 (図XV-7)

位置：b₄-686-5 **規模：**2.42×0.68／2.24×0.09／0.97m

平面形：長円形 **長軸方向：**N-45°-W

出土遺物：なし

Ⅲ層上面で暗褐色の落ち込みを検出した。短軸上にトレンチを設定して断面形を確認した。平面形は壙口が不整の長円形で、壙底は細い溝状を呈する。壙底は平坦である。壁は垂直に立ち上がるが、北西方向が崩落によって崩れている。

時期：不明であるが、縄文時代前期から後期までの間に構築された可能性がある。

TP-3 (図XV-8 図版XV-6)

位置：b₄-688-17 **規模：**(2.37)×0.48／1.86×0.1／0.90m

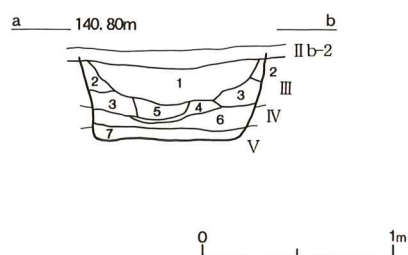
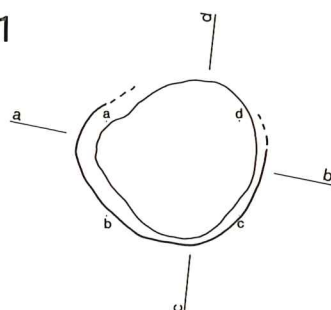
平面形：長円形 **長軸方向：**N-56°-W

出土遺物：覆土からつまみ付きナイフ1点、フレイクが1点出土している。1はつまみ付きナイフである。つまみ部の作り出しが不明瞭なものである。頁岩製である。

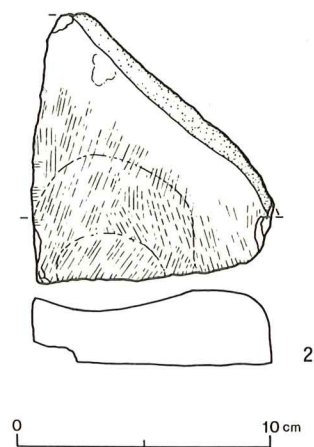
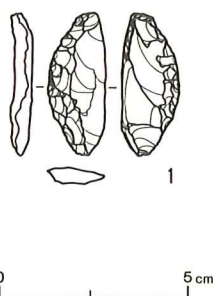
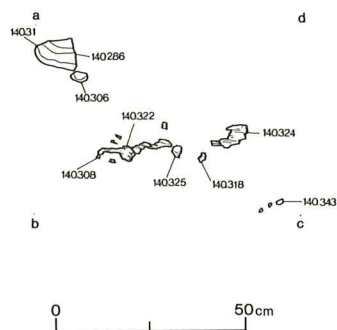
Ⅲ層上面で検出した。長軸は傾斜に沿う。平面形は不整の溝状を呈する。短軸方向の断面形は、V

3 遺構と遺構出土の遺物

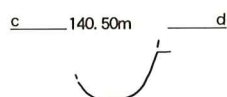
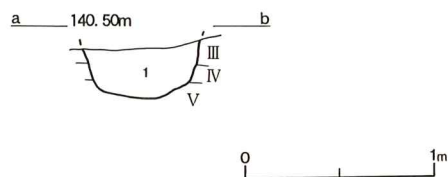
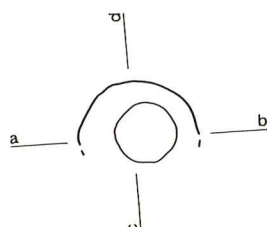
P-1



- 1 黄褐色粘土 灰褐色土を斑状に含む しまりあり
- 2 濁淡灰褐色土 黄褐色粘土を若干含む しまりあり
- 3 濁灰褐色土 上部に黄褐色土を斑状に含む やや粘質 しまりあり
- 4 濁灰褐色土 上部に黄褐色土を斑状に含む やや粘質 しまりなし
- 5 灰褐色粘土 炭化物、フレイクを多量に含む しまりなし
- 6 灰褐色粘土 フレイクを少量含む しまりなし
- 7 灰褐色粘土 赤色顔料、フレイク、炭化物を多量に含む ややしりなし



P-2



- 1 濁灰褐色土 黒褐色土を斑状に含む しまりなし

図Ⅳ-6 P-1・P-2と出土遺物

字状を呈する。長軸方向の壁は急に立ち上がる。壙底は平坦である。

時期：不明であるが、縄文時代前期から後期までの間に構築された可能性がある。

TP-4 (図XV-8 図版XV-3、6)

位置：b₄-688-21・22 規模：(2.25) × 0.57 / 2.00 × 0.06 / 1.02 m

平面形：長円形 長軸方向：N-57° -W

出土遺物：覆土からつまみ付きナイフ1点、フレイクが1点出土している。1はつまみ付きナイフである。縦長剥片を利用し、背面調整によってやや急角度の刃部が作出される。

Ⅲ層上面で黒褐色土の落ち込みを検出した。平面形は壙口で不整の長楕円形、壙底では不整の溝状を呈する。断面形は短軸方向でV字状を呈する。長軸方向の壁は急に立ち上がる。壙底は平坦である。

時期：不明であるが、縄文時代前期から後期までの間に構築された可能性がある。

TP-5 (図XV-9)

位置：b₅-686-9・10 規模：2.20 × 0.54 / 1.96 × 0.13 / 0.96 m

平面形：長円形 長軸方向：N-73° -W

出土遺物：なし

Ⅲ層上面で灰褐色土の落ち込みを検出した。平面形は壙口で不整の長楕円形を呈する。壙底で細い溝状を呈し、やや蛇行している。断面形は短軸方向で不整のU字状を呈する。長軸方向の壁は急で、東側はオーバーハングする。壙底は東に向かってやや傾斜する。

時期：不明であるが、縄文時代前期から後期までの間に構築された可能性がある。

TP-6 (図XV-9 図版XV-3)

位置：b₄-688-21 規模：2.26 × 0.64 / 1.85 × 0.90 / 0.90 m

平面形：長円形 長軸方向：N-56° -W

出土遺物：なし

Ⅲ層上面で灰褐色土の落ち込みを検出した。平面形は中心のやや膨らむ不整の溝状を呈する。断面形は短軸方向で壁の崩落により不整のV字状を呈する。壙底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

時期：不明であるが、縄文時代前期から後期までの間に構築された可能性がある。

TP-7 (図XV-9 図版XV-3)

位置：b₄-686-13・14・18・19 規模：2.7 × 0.66 / 2.52 × 0.14 / 0.86 m

平面形：長円形 長軸方向：N-66° -W

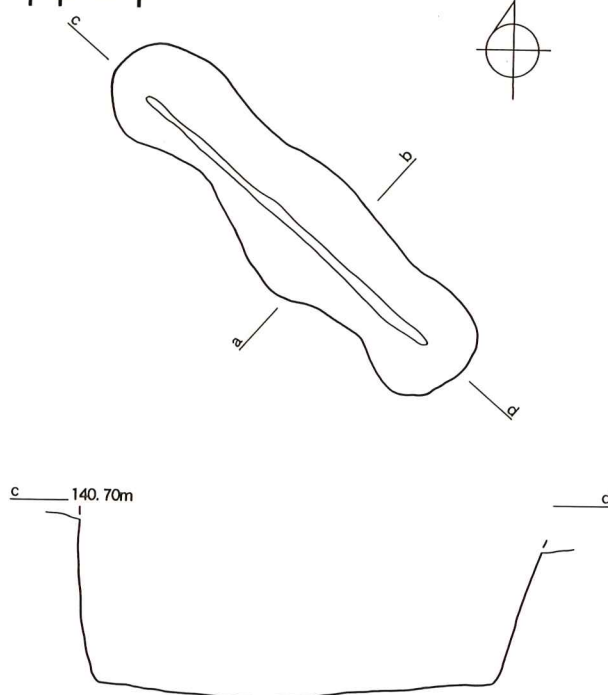
出土遺物：なし

Ⅲ層上面で灰褐色土の落ち込みを検出した。平面形は不整の溝状を呈する。断面形は短軸方向ではV字状を呈する。壙底はでこぼこしており、西向きに傾斜している。壁は両方向で小さくオーバーハングする。

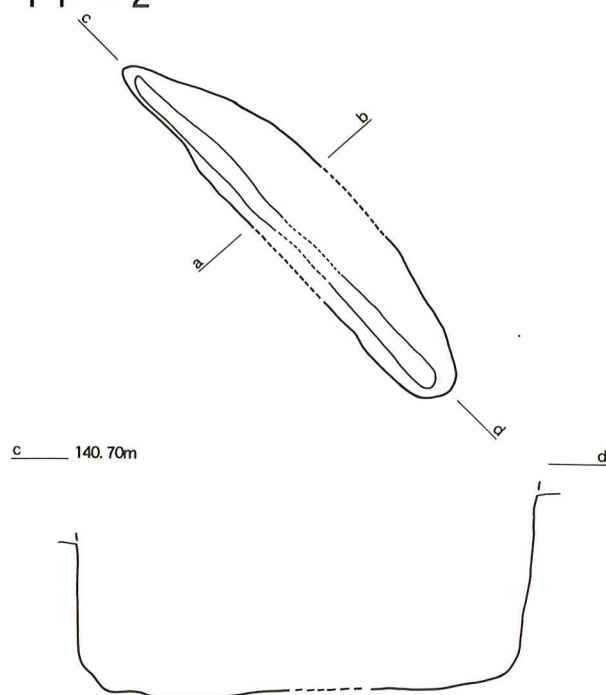
時期：不明であるが、縄文時代前期から後期までの間に構築された可能性がある。

3 遺構と遺構出土の遺物

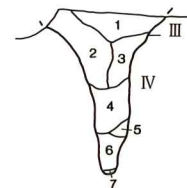
TP-1



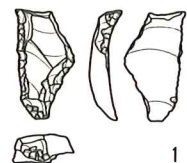
TP-2



a 140.70m b

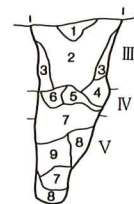


- 1 暗褐色土 暗黄褐色シルト粒を少量含む しまりあり
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土を微量含む やや粘性あり しまりあり
- 3 暗黄褐色土 暗褐色土を少量含む やや粘性あり しまりあり
- 4 暗黄褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む やや粘性あり
- 5 暗黄褐色土 暗褐色土ブロックを多量に含む やや粘性あり
- 6 暗黄褐色土 暗褐色土ブロックを多量に含む やや粘性あり
- 7 暗褐色土



0 5cm

a 140.70m b

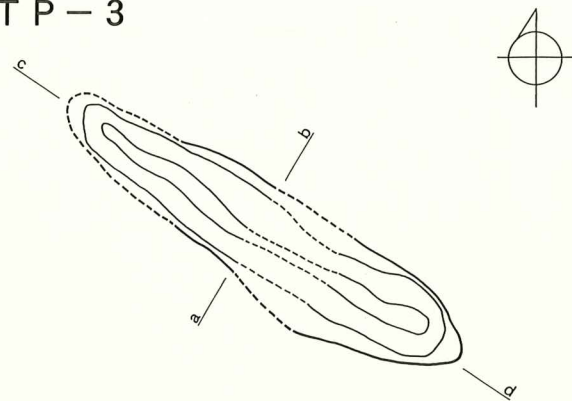


- 1 暗黄褐色土 黒褐色土を斑状に含む やや粘性あり しまりあり
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒を少量含む 粘性あり しまりあり
- 3 暗褐色土 黄褐色土粒を多量に含む 粘性あり しまりあり
- 4 暗黄褐色土 暗褐色土粒を微量含む
- 5 暗褐色シルト質土 暗褐色土を含む
- 6 暗褐色土 黄褐色土粒を微量含む
- 7 暗黄褐色シルト質土
- 8 暗黄褐色砂
- 9 暗黄褐色土

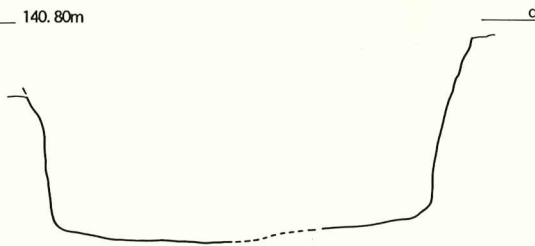
0 1m

図Ⅳ-7 TP-1・TP-2と出土遺物

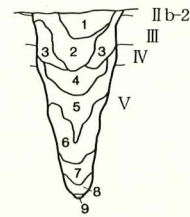
TP-3



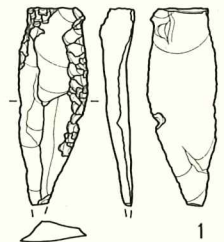
c 140.80m



a 140.80m b

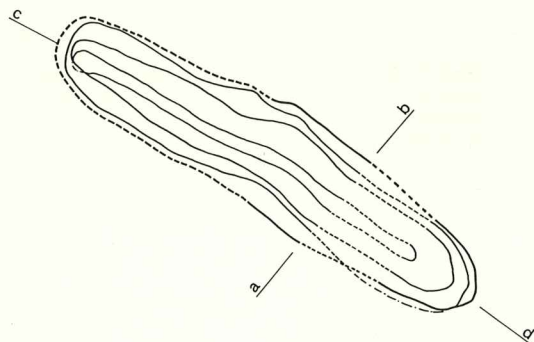


- 1 暗灰褐色弱粘質土 炭化物を若干含む 黄褐色土 灰褐色土を少量含む
ややしまりなし
- 2 灰褐色粘質土 黄褐色土 黒色土粒を若干含む やや緻密
- 3 濁灰褐色土 ややしりなし
- 4 灰褐色粘質土 黄褐色土を若干含む
- 5 濁黄褐色粘質土 やや緻密
- 6 黄褐色粘質土 黄褐色シルト質土を部分的に含む 緻密
- 7 黄褐色粘質土 灰褐色粒子を少量含む
- 8 黄褐色粘質土 やや緻密
- 9 黄褐色粘質土 ややしりなし

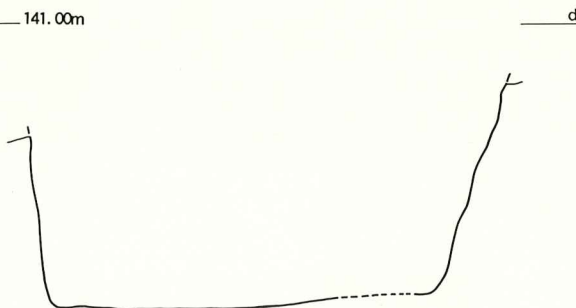


0 5cm

TP-4

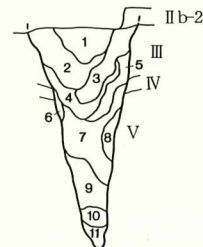


c 141.00m

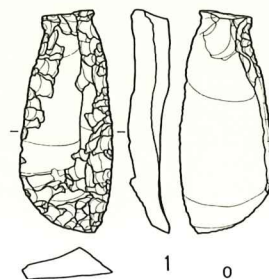


0 1m

a 141.00m b



- 1 濁黒褐色粘質土 黄褐色土を斑状に含む やや緻密
- 2 濁淡灰褐色土 黄褐色土 黒褐色土を若干含む やや緻密
- 3 灰褐色粘質土 炭化物を若干含む やや緻密
- 4 濁黄褐色土 灰褐色土ブロックを若干含む ややしりなし
- 5 黄褐色粘質土 ややしりなし
- 6 濁黄褐色土 ややしりなし
- 7 濁灰褐色粘質土 黄褐色土ブロックを含む
- 8 黄褐色粘質土 やや緻密
- 9 黄褐色粘質土 灰褐色土を少量含む やや緻密
- 10 濁淡灰褐色粘質土 黄褐色土含む 緻密
- 11 黄褐色シルト質土 ややしりなし

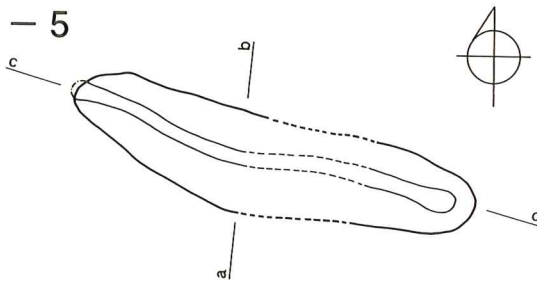


0 5cm

図XV-8 TP-3・TP-4と出土遺物

3 遺構と遺構出土の遺物

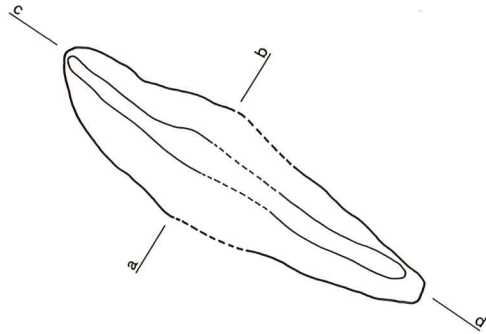
TP-5



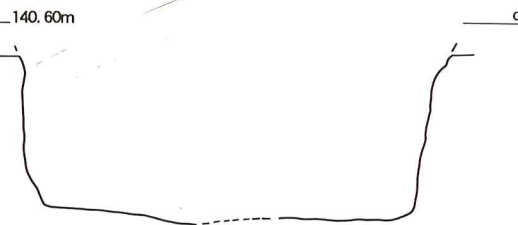
c 140.60m



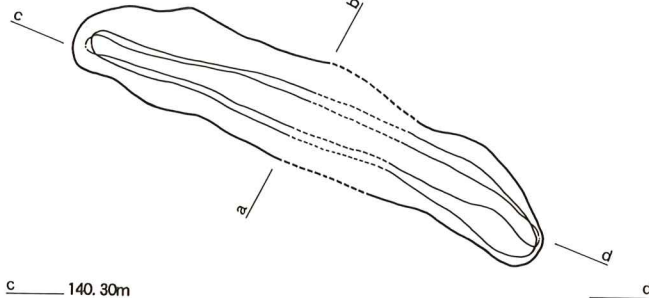
TP-6



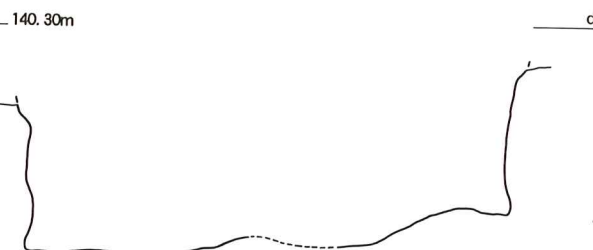
c 140.60m



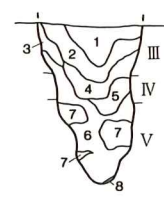
TP-7



c 140.30m

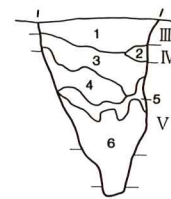


a 140.60m b



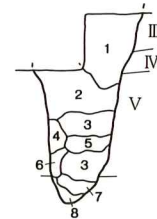
- 1 灰褐色粘質土 黄褐色土粒を多量に含む 黒色土ブロックを若干含む やや緻密
- 2 濁灰褐色粘質土 黒褐色土を若干含む 黄褐色土を少量含む ややしりなし
- 3 濁黄褐色土 黒色土ブロックを多量に含む ややしりなし
- 4 濁黄褐色土 灰褐色土を若干含む ややしりなし
- 5 濁黄褐色土 灰褐色土を少量含む ややしりなし
- 6 黄褐色シルト質土 ややしりなし
- 7 IV層崩落土
- 8 暗灰褐色粘質土 やや緻密

a 140.60m b



- 1 濁黄褐色粘質土 炭化物 灰褐色土を若干含む やや緻密
- 2 灰褐色土 やや緻密
- 3 III層崩落土 灰褐色土を斑状に含む
- 4 濁黄褐色粘質土 炭化物 灰褐色土を斑状に含む
- 5 灰褐色粘土 炭化物を若干含む ややしりなし
- 6 黄褐色シルト 黄褐色砂を斑状に含む 炭化物を若干含む

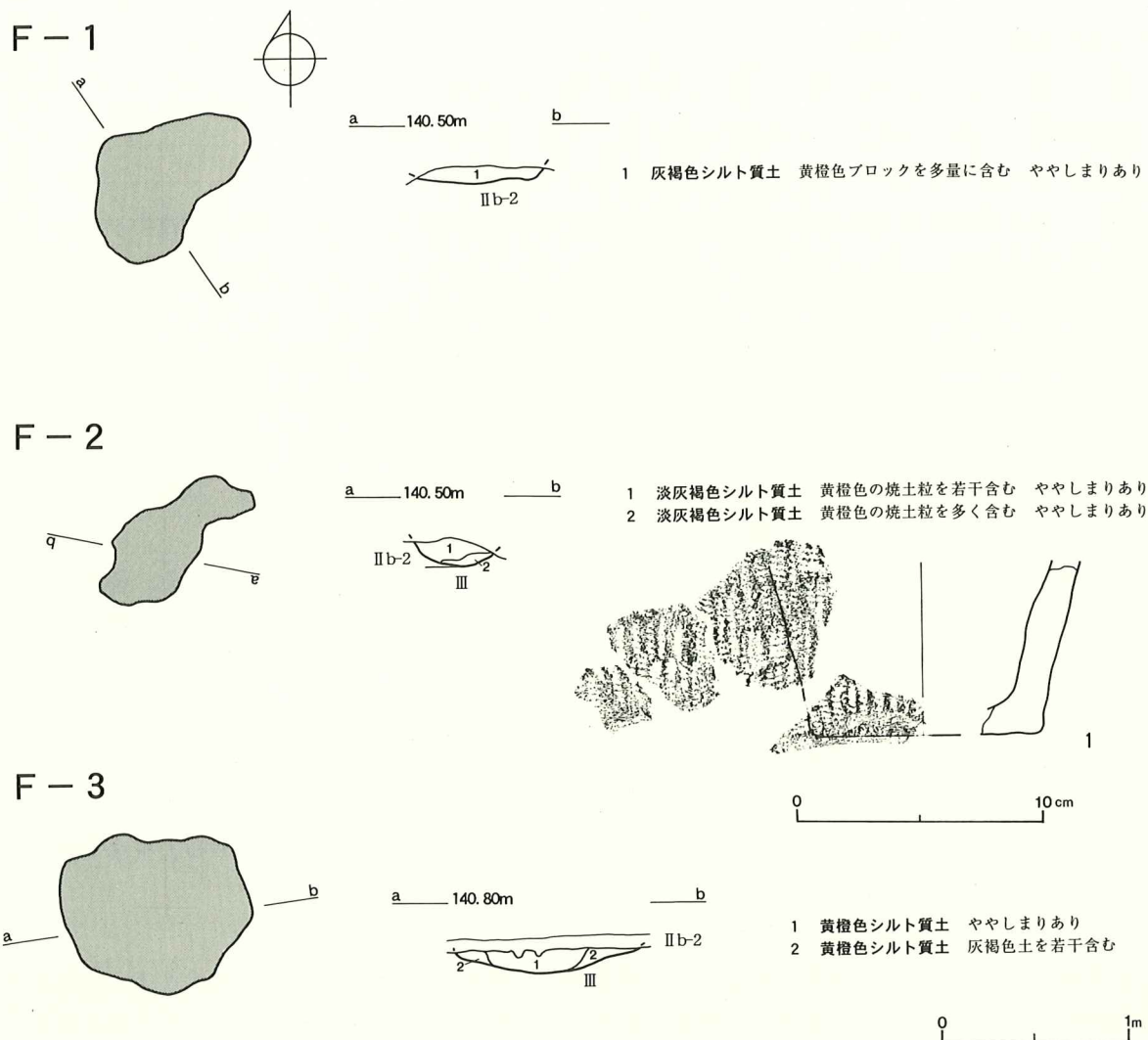
a 140.30m b



- 1 濁黄褐色シルト質土 灰褐色土を斑状に含む ややしりなし
- 2 灰褐色粘質土 炭化物、層を若干含む やや緻密
- 3 IV層崩落土 やや緻密
- 4 III層崩落土 しりなし
- 5 黄褐色砂 ややしりなし
- 6 濁黄褐色粘質土 黄褐色土を斑状に含む やや緻密
- 7 黄褐色シルト ややしりなし
- 8 黄褐色シルト 黒褐色土ブロックを含む

0 1m

図Ⅸ-9 TP-5・TP-6・TP-7



図XV-10 焼土

(3) 焼土

F-1 (図XV-10 図版XV-4)

位置: $b_4-686-25 \cdot 686-16$ 規模: $0.98 \times 0.66 / 0.09m$

出土遺物: 上面でII群b類土器が出土している。

調査区北側の緩斜面に位置する。II b-2層を精査中に検出した。

時期: 検出面から縄文時代前期末から中期初頭のものである可能性が高い。

F-2 (図XV-10 図版XV-4、6)

位置: $b_4-686-15 \cdot 688-11$ 規模: $0.97 \times 0.46 / 0.15m$

出土遺物: 上面でII群b類土器9点、III群a類土器1点が出土している。

調査区北側の緩斜面に位置する。II b-2層調査中に検出した。

時期: 検出面から縄文時代前期末から中期初頭のものである可能性が高い。

遺物: 1はII群b類土器である。幅1.6cmの7本一組の櫛歯状工具によって横方向に押し引き気味に施文されている。胎土は5mm以下の白色岩片、石英粒子を多量に含む。繊維は含まれない。

F-3 (図XV-10 図版XV-5)

位置: b₄-688-21 規模: 1.06×0.87/0, 12m

出土遺物: 上面で石斧片、石斧剥片が各1点、フレイクが22点出土している。

調査区北西部の平坦面に位置する。検出面はⅡb-2層である。

時期: 検出面から縄文時代前期末から縄文時代中期初頭のものである可能性が高い。

4 包含層出土の遺物

滝里29遺跡の包含層は前述したように、部分的にⅡb-1層とⅡb-2層に別れる。調査においてはできる限り分層して取り上げを行ったが、確実に分層できた資料に関しても2層の間で接合した土器もあり、この2層の時期的な差異についてははっきりとした成果を出すことができなかった。このため、2層間の時期差はほとんどなかったものとして、単にⅡ層出土遺物として一括して報告することにする。ただし掲載した遺物に関しては、細分した出土層位を一覧表に記した。

包含層出土遺物の総点数は5,920点である。内訳は土器668点、石器等5,252点である。各層位の出土点数は、Ⅰ層を除外すると、土器はⅡ層が238点、Ⅱb-1層が64点、Ⅱb-2層が349点である。

(1) 土器

土器は縄文式とみられるⅡ群a類土器、櫛歯状工具、半截竹管状工具によるとみられる押引文の施文されるⅡ群b類土器、円筒土器上層式に相当するとみられるⅢ群a類土器、余市式に相当するとみられるⅣ群a類土器が出土している。Ⅱ群b類土器が最も多い。いずれも遺構の分布と重なるように包含層残存範囲の北西側緩斜面で出土している。

一括出土の土器 (図XV-11 図版XV-5)

包含層から出土したⅡ群b類土器とⅢ群a類土器の一部は土器の破片が1ヶ所にまとまって出土する傾向がみられた。それらは調査区北西端の緩斜面に位置しており、斜面に廃棄された状態を呈している。遺構を伴う可能性もあったため、検出面での精査、トレンチ調査を行ったが、遺構らしき層位の変化をとらえることはできなかった。

Ⅱ群a類土器 (図XV-14-5・6 図版XV-8)

5、6は同一個体とみられる胴下半部である。地文は組紐回転文である。6の上部には斜行縄文が施文される。両者の胎土は同一で、繊維を多量に含んでいる。

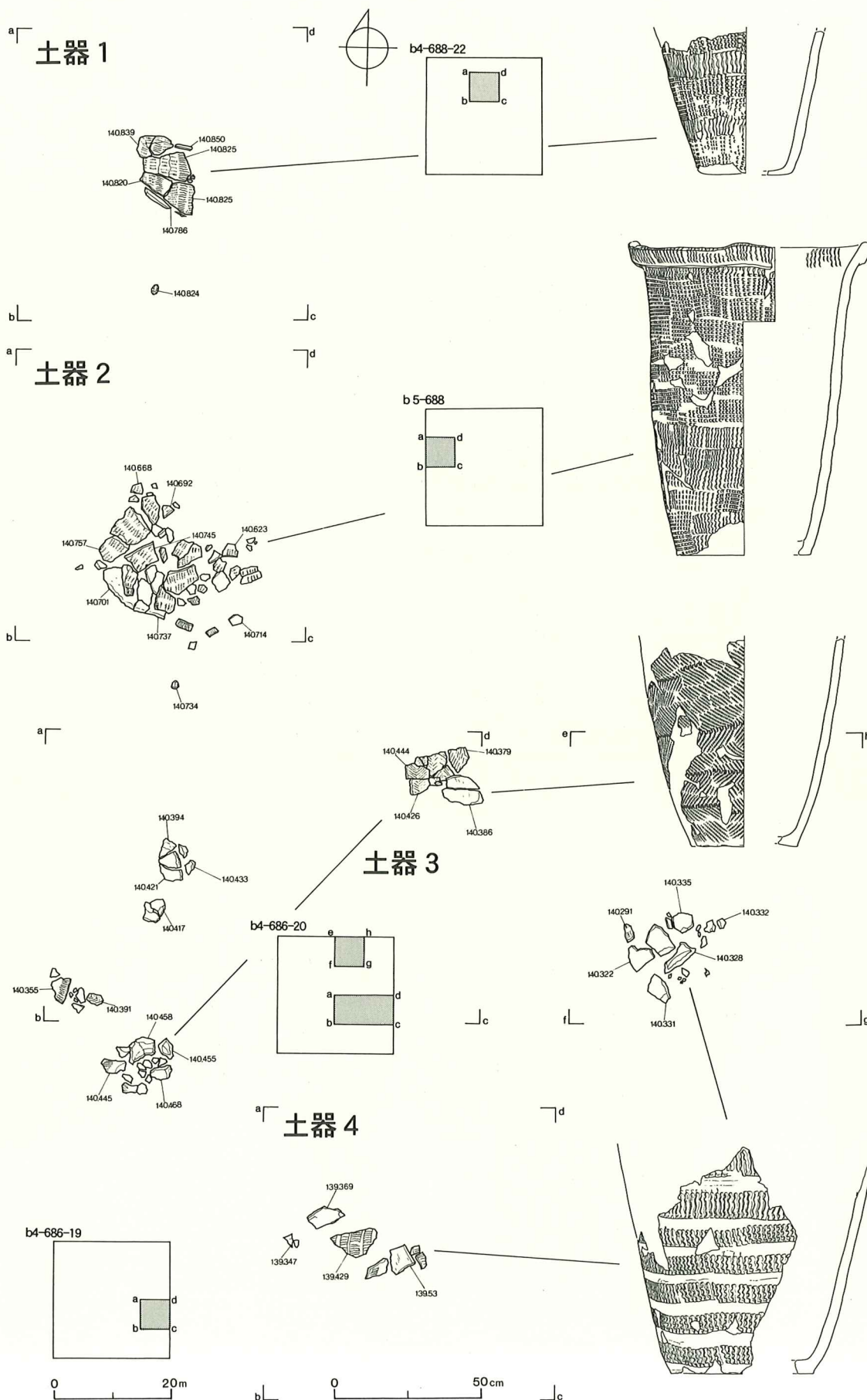
Ⅱ群b類土器 (図XV-12-1・2、図XV-13-3、図XV-15-7 図版XV-7、8)

1・先端に4つの突起が付く篋状工具によって押引文が施文されるもの。(図XV-12-1 図XV-15-7) 1と7は同一個体とみられる。

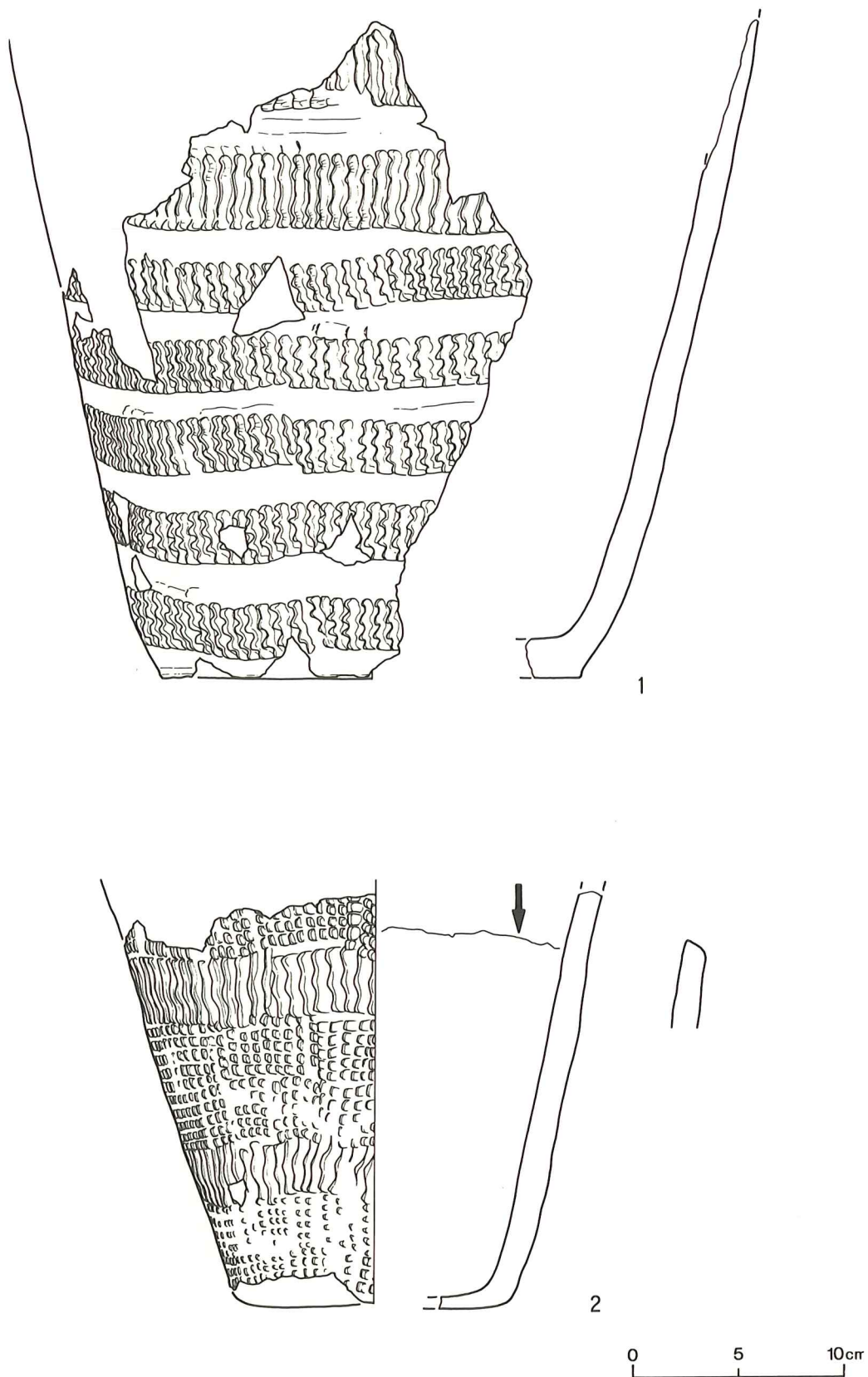
1は、幅2.5cm (以後原体1とする) と4.5cm (以後原体2とする) の二つの原体が使われ、底部と並行に横方向に約1.5cmの間隔をおいて施文される。

底部から6段目まで文様が観察できるが、4段目までが原体1、残りの2段は原体2を使用している。胎土には細かい石英粒子を多量に含んでいる。焼成は良好で、赤褐色を呈する。7は口縁部の破片である。断面形はやや外傾する角形である。肥厚帯直下、裏面に原体2、口縁部肥厚帯と口唇に原体1による押引文が施文される。器形は小破片のためはっきりしないが、波状口縁とみられる。胎土、色調は1と同じである。

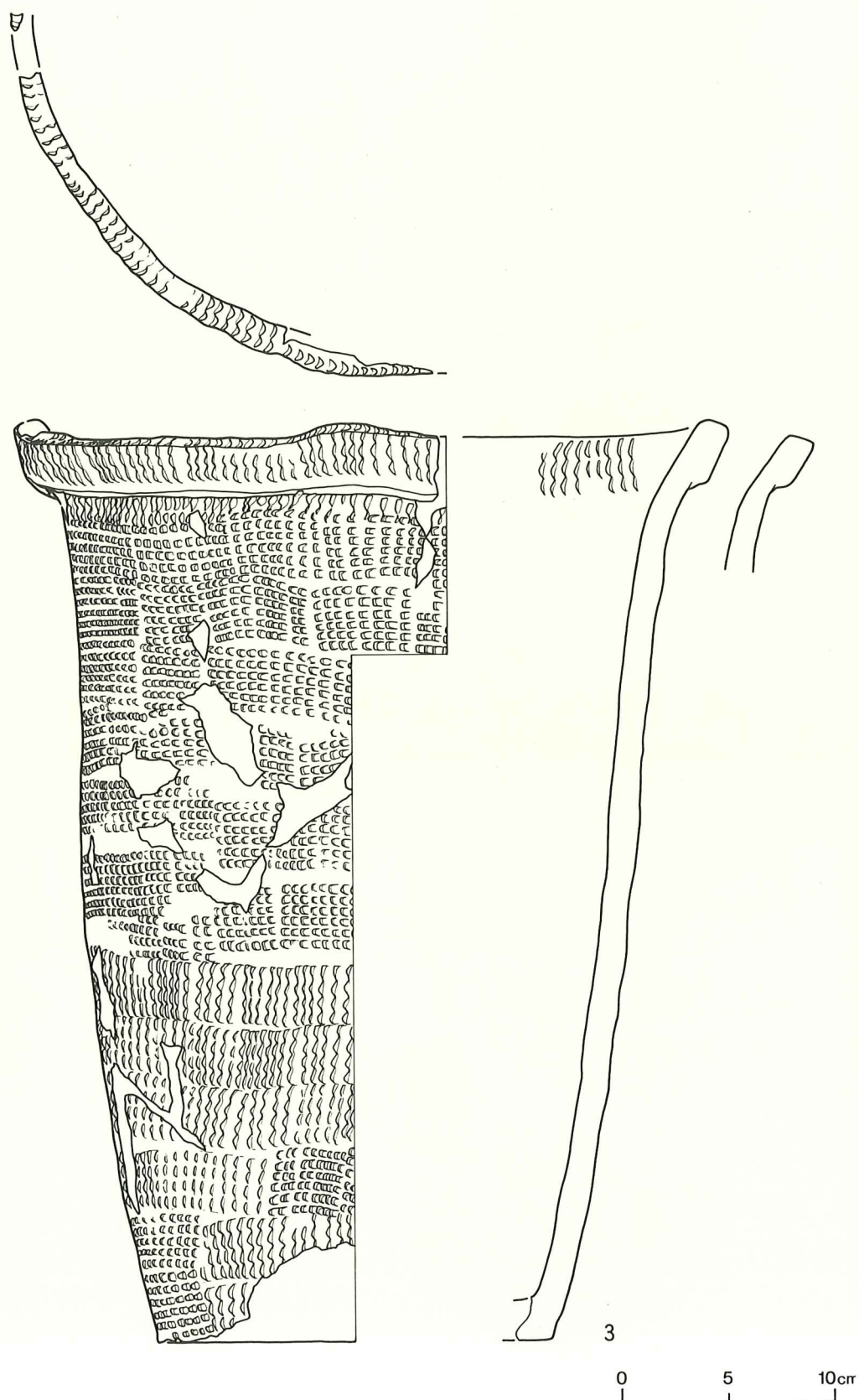
2・先端に4つの突起が付く篋状工具と数本一組の半截竹管状工具 (櫛状工具) による押引文が施文されるもの (図XV-12-2、図XV-13-3)



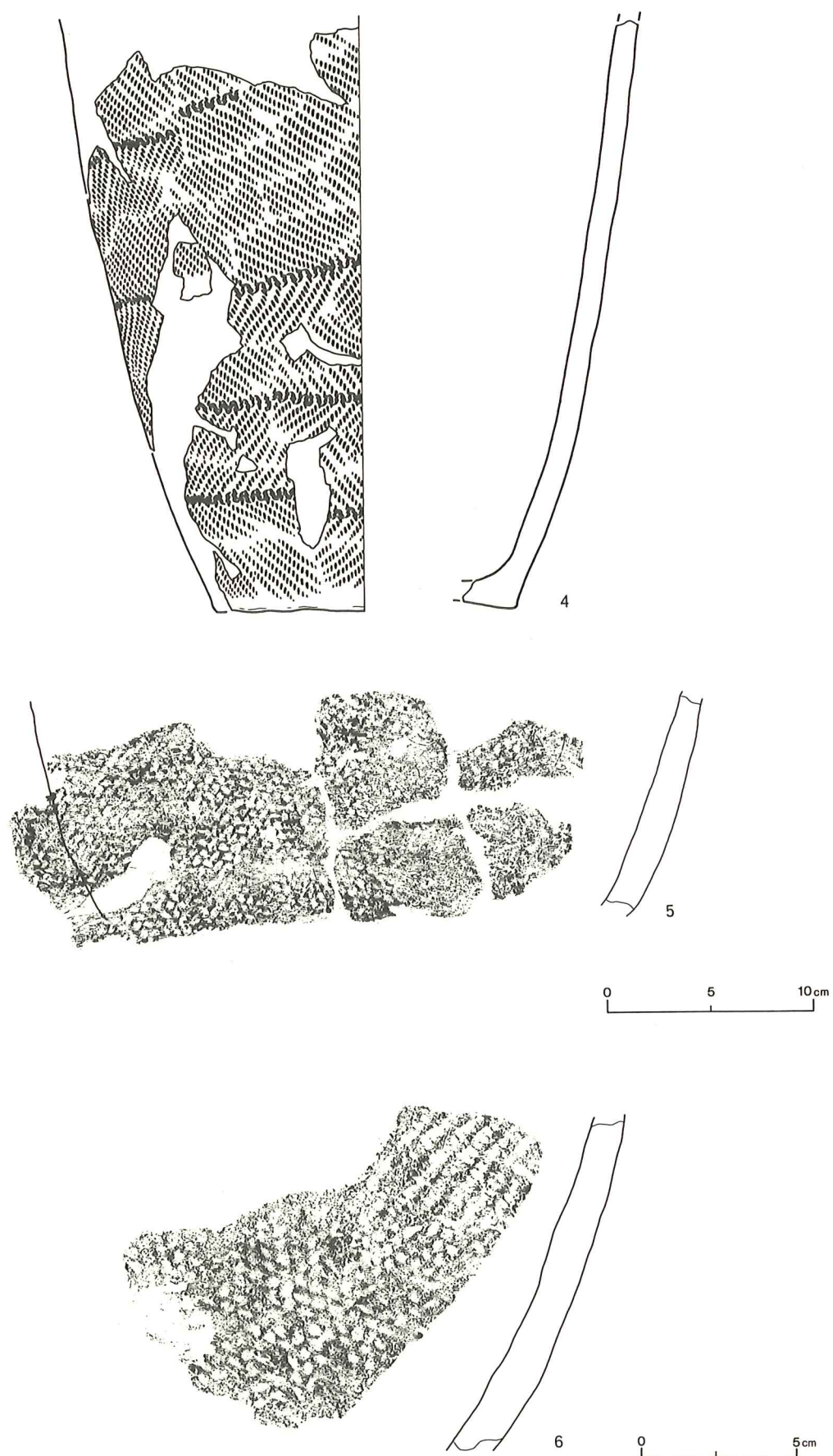
図XV-11 包含層遺物出土状況



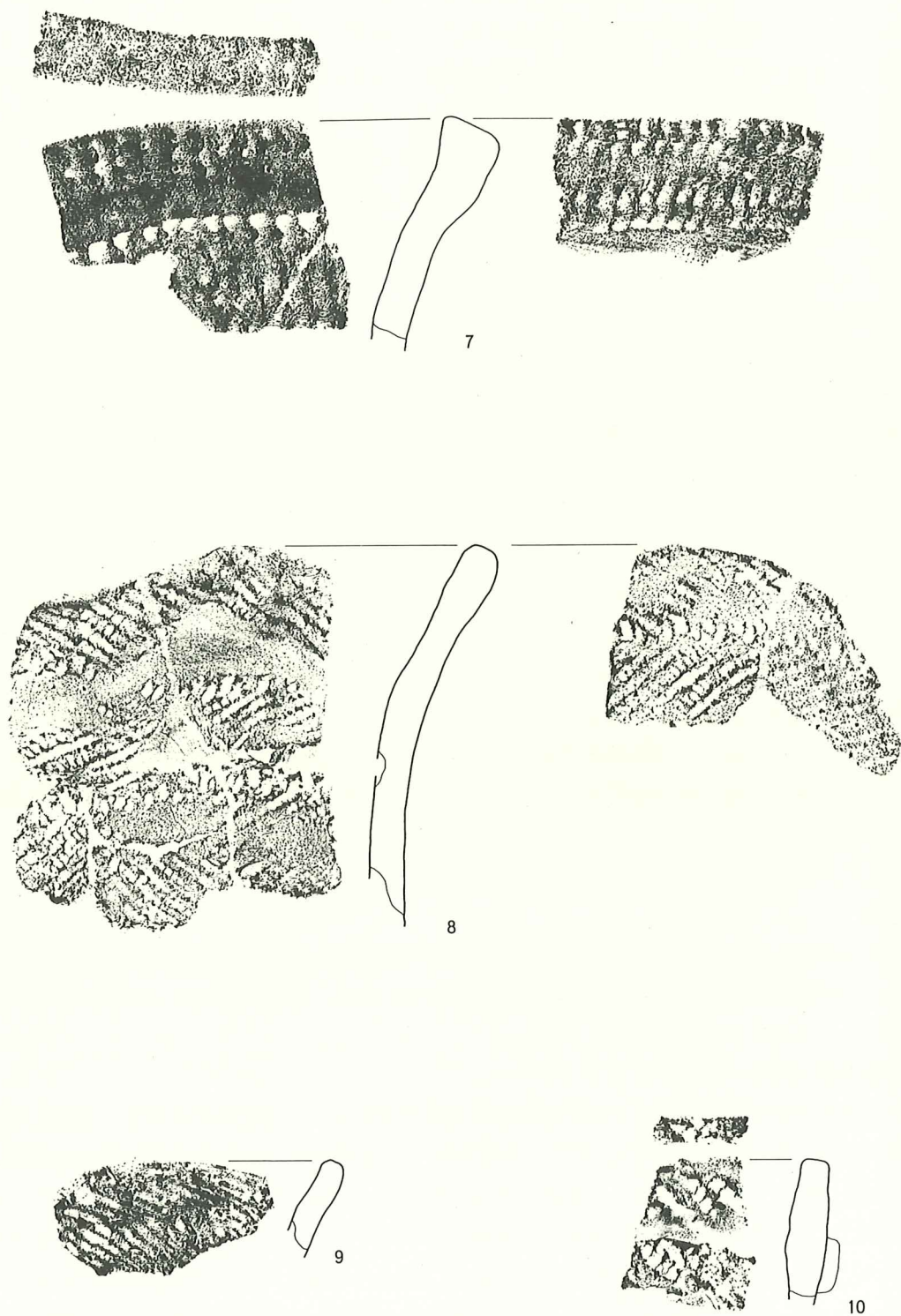
図ⅩⅣ-12 包含層出土の土器(1)



図ⅩⅤ-13 包含層出土の土器(2)



図XIV-14 包含層出土の土器(3)



図XV-15 包含層出土の土器(4)

2は、幅2.3～2.8cmの5本一組の半截竹管状工具と、幅約3cmの「逆3字状」の原体による押引文が施文されるものである。底部付近しか残存しないが、残存部分では半截竹管状工具による押引文2条につき、「逆3字状」押引文1条の割合で横方向に底部と並行に施文される。また上端部の一部に外傾する口縁部状に整形された痕跡があることから、再利用された可能性がある。胎土は、3mm以下のやや角のある石英粒子、また同規模の砂粒を多量に含んでいる。焼成は比較的良好で、色調は赤褐色を呈する。

3は胴部付近から底部にかけてややすぼまる深鉢形で、口縁は4つの小突起が付くとみられる。施文方法は幅2.2cmの「逆3字状」の原体による押引文と、幅3cm、6本一組の半截竹管状工具による押引文によるものである。おおまかには口縁端部、口縁肥厚带上、口縁裏面に「逆3字状」押引文が施文される。体部には半截竹管状工具による押引文が施文され、体部下半の一部には逆3字状押引文が施文される。体部の文様は横方向に底部と並行気味に、間隔を置かずに施文される。胎土は5mm以下の石英粒子、岩石片を多量に含み、繊維は含まない。

Ⅲ群 a 類土器 (図XV-14-4、図XV-15-8・9 図版XV-8、9)

4は深鉢の胴下半部である。器形は底部にかけてすぼまる。底部は少し外に張り出す。体部には結束第1種羽状縄文が不定方向に施文される。8は4の口縁部とみられるものである。深鉢の山形突起部分である。口唇はやや肥厚し丸みを帯びている。器表面全体、また裏面に結束第1種羽状縄文が施文される。地文施文後、口縁部直下の部分を突起に沿ってすり消される。4、8の胎土は同一で、2mm以下のやや角のある石英粒子、砂粒を多く含み、繊維は含んでいない。また他の土器にはみられない特徴だが、雲母を若干含んでいる。9は口縁部である。口縁に向かってやや開く器形を呈し、口唇は丸みを帯びる。器表面には無節の斜行縄文が施文される。

Ⅳ群 a 類土器 (図XV-15-10 図版XV-9)

10は口縁部の破片である。口唇は角形を呈し、1条の貼付帯が付く。口縁端部、貼付帯上にRL斜行縄文が施文される。胎土は3mm以下のやや角のある石英粒子、砂粒を多量に含んでいる。繊維は含まれない。

(2) 石器等

包含層から出土した石器等は、I層から出土したものを除外するとII層が1,362点、IIb-1層が257点、IIb-2層が3,623点である。内訳は表5の通りであるが、剥片石器ではつまみ付きナイフが多い。それ以外では剥片が多く出土している。

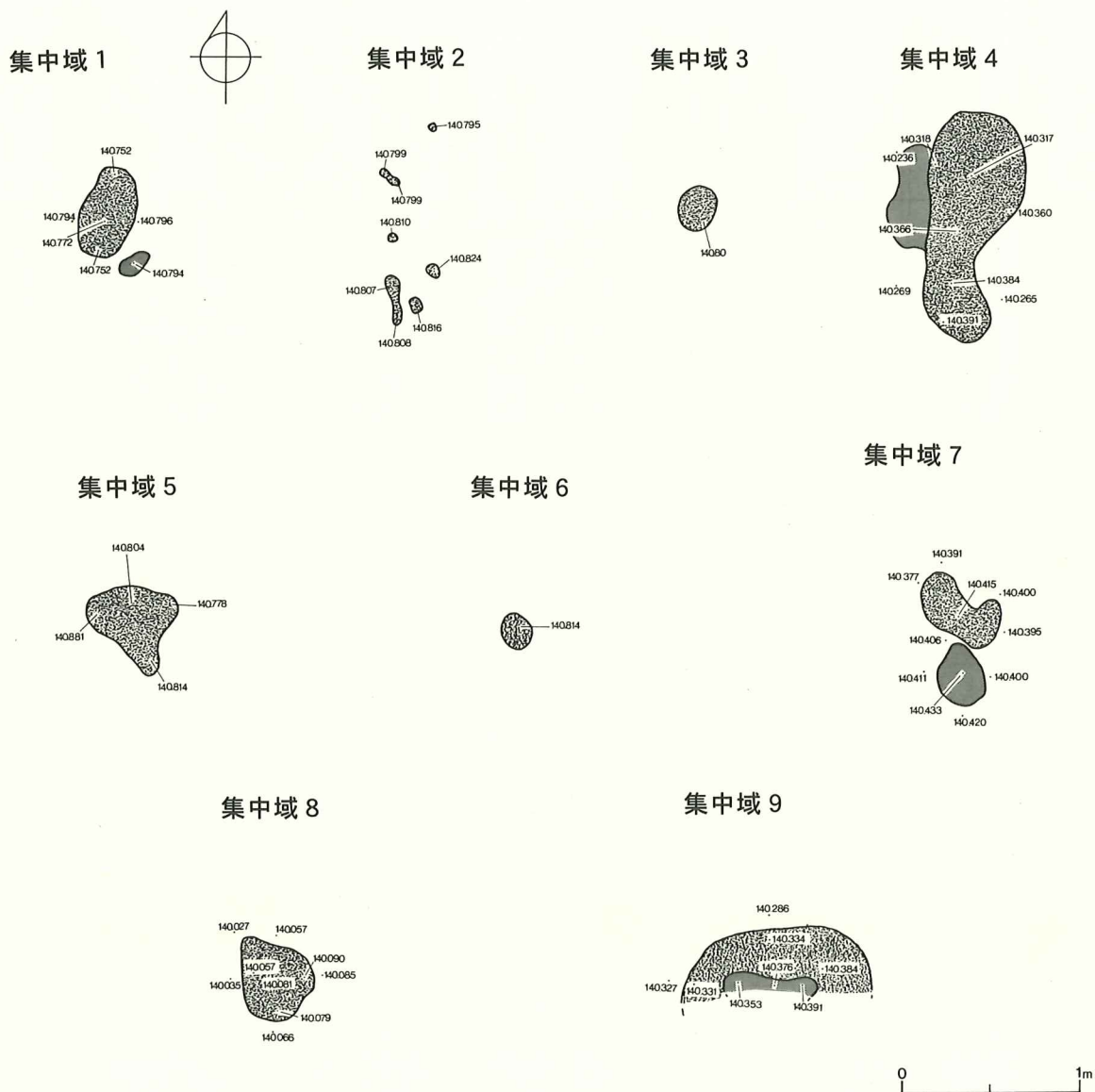
フレイク集中域 (図XV-16)

調査区北西側の緩斜面上にフレイクの集中域を9箇所検出した。赤色顔料の分布と近接して検出されることが多い(1・4・7・9)。また、遺構を伴う可能性があったため、検出面での精査、又はトレンチ調査を行ったが、遺構らしき層位の変化は確認できなかった。したがってこれら全てのフレイク集中域は、包含層中に平面的に分布し、遺構に伴わないものとみられる。しかし、やや距離をおいているが、焼土も比較的近接して検出されており、焼土の上面にフレイクが散布している例(F-3)もあることから、焼土-フレイク-赤色顔料は何らかの関連した作業の痕跡である可能性がある。

石鏃 (図XV-17-1～3 図版XV-9)

破片も含めて11点出土している。全て黒曜石製である。内訳は三角鏃凹基が1点、有茎のものが3点、破片が7点である。1は三角鏃凹基である。2、3は有茎である。

石槍 (図XV-17-4 図版XV-9)



図XV-16 フレイク集中域

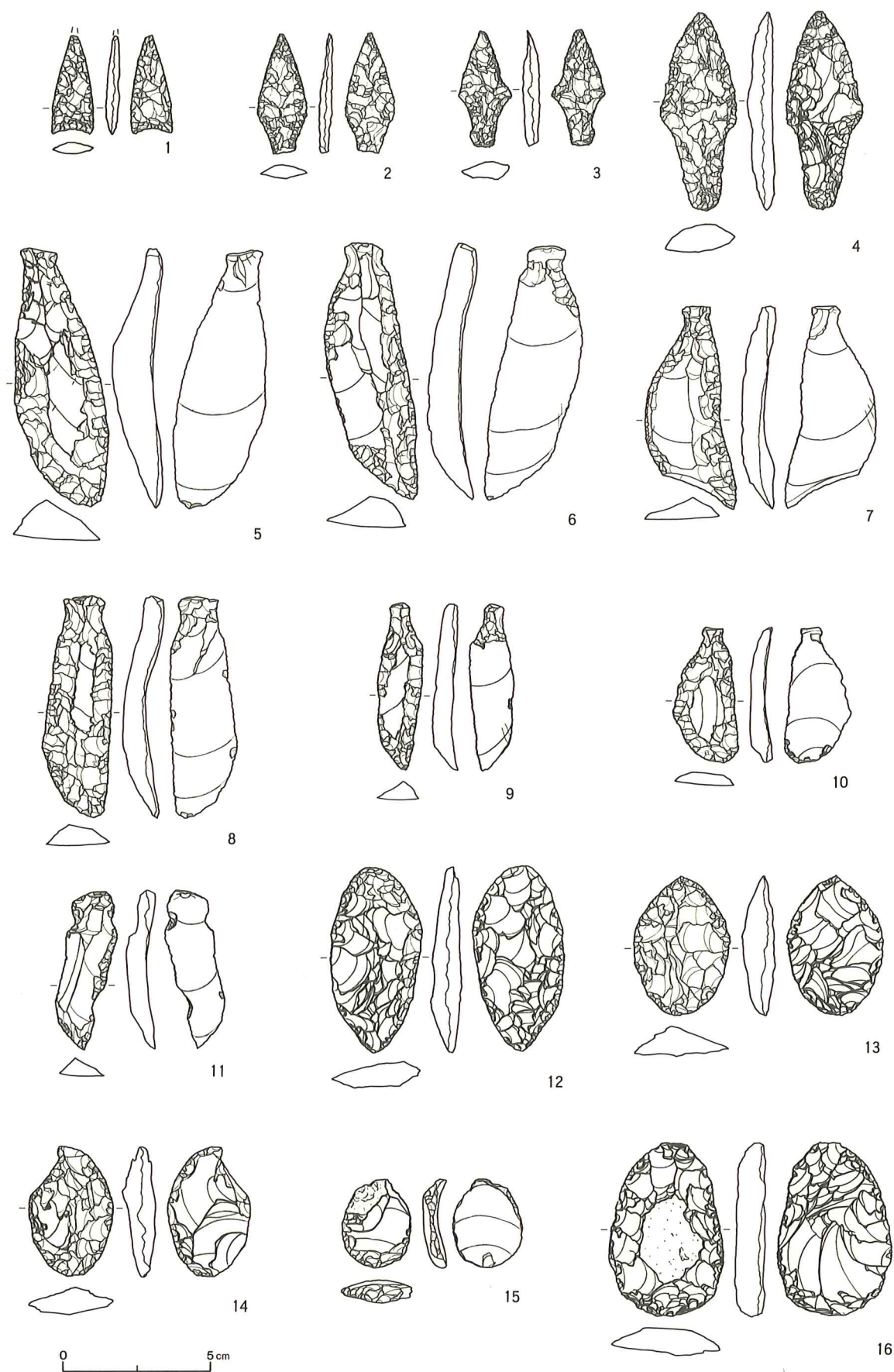
破片も含めて5点が出土している。破片が4点で完成品は4の有茎石槍のみである。基部は太く、かえしは弱い。

つまみ付きナイフ (図XV-17-5～11 図版XV-9)

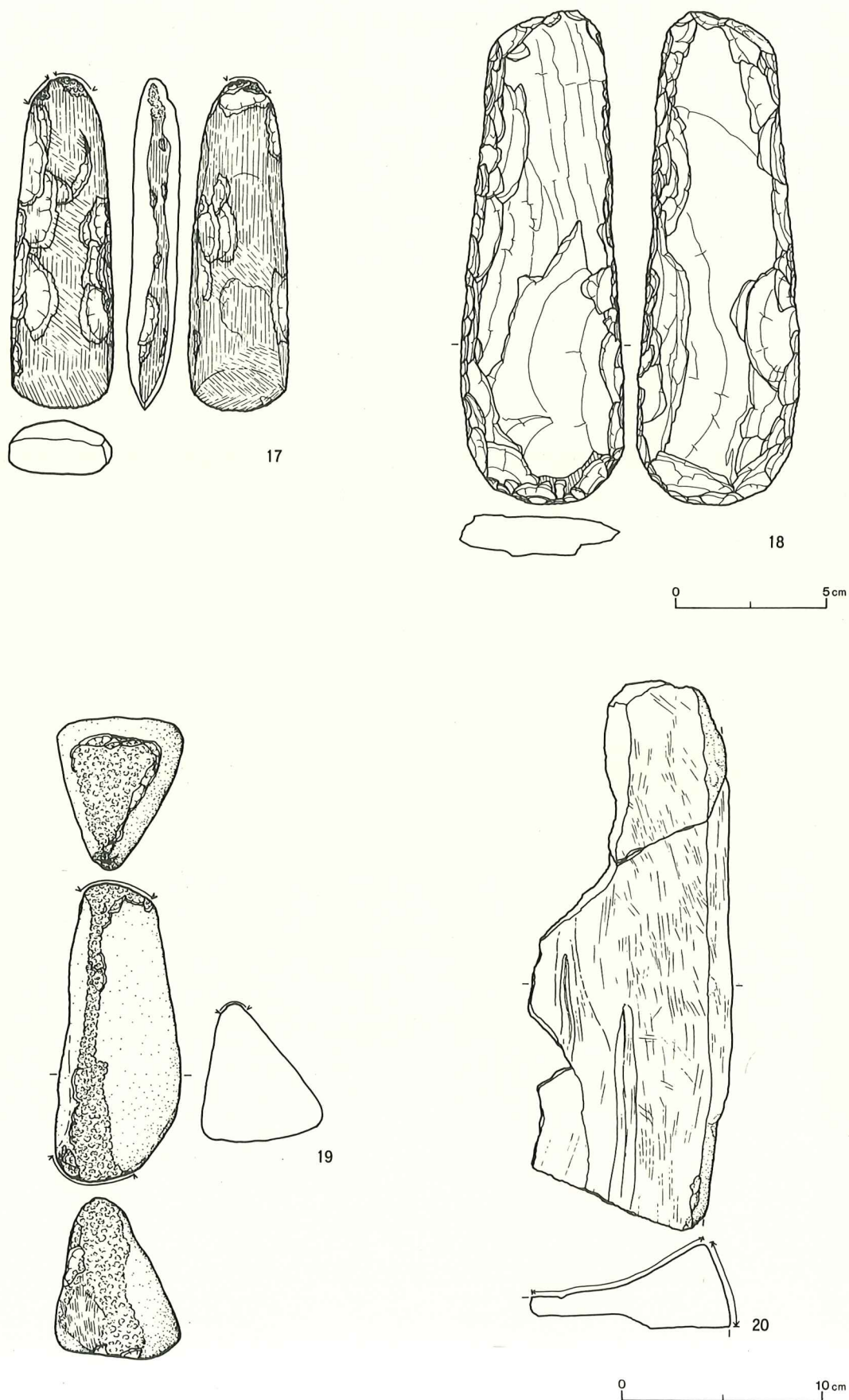
破片も含めて15点が出土している。内訳は縦長で片面加工のものが11点、破片が4点である。破片の1点を除く全てが黒曜石以外の頁岩等の石材を利用して作られている。5～9は全て縦長剥片を利用し、打点側につまみ部が作出される。背面片面加工によりやや厚めの刃部が作出される。10は打点側に刃部が作られる例である。11はつまみ部が不明瞭なものである。

ナイフ類 (図XV-17-12 図版XV-9)

破片も含めて3点が出土している。12以外の2点は破片である。12は両面調整によって刃部を作出するものである。



図XIV-17 包含層出土の石器(1)



図Ⅳ-18 包含層出土の石器(2)

スクレイパー類 (図XV-13~16 図版XV-9)

XV 破片も含めて8点が出土している。内訳は円形を呈し周縁に刃部が作出されるものが4点、素材となる剥片の形状をほとんど変えないものが1点、破片が7点出土している。13、14は円形を呈し周縁に刃部が作出されるものである。15は打点側に背面調整によってやや厚い刃部が作られるものである。16は原石面を残すものである。

石斧 (図XV-18-17 図版XV-10)

破片も含めて8点が出土している。完成品は17のみである。17は撥形を呈するものである。

石斧原材 (図XV-18-18 図版XV-10)

18が1点出土している。18は製作途中の石斧とみられ、先端の一部に研磨した痕跡がみられる。

たたき石 (図XV-18-19 図版XV-10)

4点出土している。19は断面三角形のすり石状の礫を利用し、稜線上と端部にたたき痕のみられるものである。

砥石 (図XV-18-20 図版XV-10)

55点出土している。全て破片で19は3点接合しているものである。使用面上に2条の細い溝がある。使用面は明瞭にくぼんでおり、継続した使用の結果とみられる。

(立田 理)

表XV-2 遺構規模一覧

遺構名	位置	規模(横口:長軸×短軸/横底:長軸×短軸/深さ)m	平面形	長軸方向
P-1	b ₄ -688-621・22	0.98 × (0.92) / 0.84 × 0.82 / 0.38	不整円形	N-87°-W
P-2	b ₄ -686-24・25	0.63 × (0.42) / 0.32 × 0.32 / 0.26	不整円形	N-86°-W
TP-1	b ₄ -688-12・13・18	2.24 × 0.68 / 1.97 × 0.05 / 0.88	長円形	N-48,5°-W
TP-2	b ₅ -686-5	2.42 × 0.48 / 2.24 × 0.09 / 0.97	長円形	N-45°-W
TP-3	b ₄ -688-17	(2.37) × 0.48 / 1.86 × 0.1 / 0.90	長円形	N-56°-W
TP-4	b ₄ -688-21・22	(2.25) × 0.57 / 2.00 × 0.06 / 1.02	長円形	N-57°-W
TP-5	b ₅ -686-9・10	2.20 × 0.54 / 1.96 × 0.13 / 0.96	長円形	N-73°-W
TP-6	b ₅ -688-21	2.26 × 0.64 / 1.85 × 0.12 / 0.90	長円形	N-56°-W
TP-7	b ₄ -686-13・14・18・19	2.7 × 0.66 / 2.52 × 0.14 / 0.86	長円形	N-66°-W
F-1	b ₄ -686-25・688-16	0.98 × 0.66 / 0.09		N-48°-E
F-2	b ₄ -686-15・688-11	0.97 × 0.46 / 0.15		N-58°-E
F-3	b ₄ -688-21	1.06 × 0.87 / 0.12		N-47°-W

表XV-3 遺構出土遺物一覧

遺構番号	名称	分類	数量		遺構番号	名称	分類	数量		遺構番号	名称	分類	数量	
			覆土	床				覆土	床				覆土	床
P-1	土器	Ⅱb	1		P-1	礫			1	F-1	土器	Ⅱb	2	
	小計		1			小計		1.108	1.976		小計		2	
	石鏃		1		TP-1	スクレイパー類		1			礫		1	
	石槍		3			フレイク		3			小計		1	
	ナイフ類		3			小計		4		F-2	土器	Ⅱb	9	
	スクレイパー類		6		TP-3	つまみ付きナイフ		1			土器	Ⅲa	1	
	石斧剥片		3			フレイク		1			小計		10	
	石皿			1	TP-4	つまみ付きナイフ		1		F-3	石斧片		1	
	Rフレイク		2			フレイク		1			石斧剥片		1	
	フレイク		1.077	1.974		フレイク		1			フレイク		22	
	炭化物		13			小計		2			小計		24	

表XV-4 包含層出土土器一覧

時期	前期	中期	後期	合計
分類	Ⅱ群	Ⅲ群	Ⅳ群	
点数	501	166	1	668

表XV-5 包含層出土石器等一覧

名称	分類記号	点数	名称	分類記号	点数	名称	分類記号	点数
石鏃	ⅠA4b	1	スクレイパー類		3	たたき石	VA2	2
	ⅠA5c	3		Ⅲc2	4		VA3	4
	ⅠA8	7		Ⅲc7	1	たたき石小計		7
石鏃小計		11		Ⅲc8	3	石皿	ⅥB8	1
石槍	ⅠB1	1	スクレイパー類小計		8	砥石	ⅦB8	55
	ⅠB8	4	石斧	ⅣA1	1	剥片	ⅨB	5.039
石槍小計		5		ⅣA8	7	Rフレイク	XA	27
つまみ付きナイフ	ⅢA1	11	石斧小計		8	焼成礫		2
	ⅢA8	4	研磨石材	ⅣA1	2	礫		37
つまみ付きナイフ小計		15	石斧原材	Ⅳc2	1	総計	5.242	
ナイフ類	ⅢB2	1	石斧剥片	Ⅳc8	23			
	ⅢB8	2	たたき石	VA1	1			

表XV-6 遺構出土掲載土器一覧

図版番号	遺構番号	出土層位	図版番号
XV-10-1	F-2	-	XV-6

表ⅩⅤ－７ 遺構出土掲載石器等一覧

挿図番号	発掘区	層位	分類番号	長さ×幅×厚さcm	重さg	石材	図版番号
ⅩⅤ－６－１	P－１	覆土	ⅢC 4	3.8 × 1.5 × 0.6	2.92	黒曜石	ⅩⅤ－６
－２	P－１	最下	ⅥB 2	(10.55) × (9.5) × 3.0	347.00	砂 岩	
ⅩⅤ－７－１	TP－１	覆土	ⅢC 7	2.9 × 1.6 × 0.8	2.52	黒曜石	
ⅩⅤ－８－１	TP－３	覆土	ⅢA 1	(5.25) × 1.8 × 0.9	6.38	頁 岩	
ⅩⅤ－８－１	TP－４	覆土	ⅢA 1	5.9 × 2.5 × 1.1	13.68	頁 岩	

表ⅩⅤ－８ 包含層出土掲載土器一覧１（実測図）

挿図番号	発掘区	層位	破片数	分類	大きさ(cm)	図版番号
図ⅩⅤ－１２－１	b ₄ －686－19	Ⅱb－２	12	Ⅱb	口径：	図版ⅩⅤ－７
	b ₄ －686－20	Ⅱb	14		底形：20.4	
	計		26		器高：(31.0)	
－２	b ₄ －688－22	Ⅱb－２	35	Ⅱb	底形：13.0	
	計		35		器高：(19.8)	
図ⅩⅤ－１３－３	b ₅ －688－１	Ⅱb－２	110	Ⅱb	口径：33.8	
	計		110		底形：18.6 器高：42.8	
図ⅩⅤ－１４－４	b ₄ －686－20	Ⅱ	13	Ⅲa	口径： 底形：14.6 器高：(29.6)	図版ⅩⅤ－８
		Ⅱb－１	18			
		Ⅱb－２	12			
	b ₄ －686－24	Ⅱb－１	1			
	b ₄ －686－24	Ⅱb－２	1			
	計		45			

表ⅩⅤ－９ 包含層出土掲載土器一覧２（拓影）

挿図番号	発掘区	層位	分類	図版番号
図ⅩⅤ－１４－５	b ₄ －688－18	Ⅱ	Ⅱa	図版ⅩⅤ－８
－６	b ₄ －688－18	Ⅱ	Ⅱa	
図ⅩⅤ－１５－７	b ₄ －686－20	Ⅱb－１	Ⅱb	
－８	b ₄ －686－19	Ⅱb－１	Ⅲa	
－９	b ₅ －686－４	Ⅱ	Ⅲa	
－10	b ₄ －686－24	Ⅱb－１	Ⅳa	

表ⅩⅤ－10 包含層出土掲載石器等一覧

挿図番号	発掘区	層位	分類番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重量	石材	図版番号
ⅩⅤ－17－１	b ₄ －686－24	Ⅱ	ⅠA 4－b	(3.35) × 1.4 × 0.5	1.85	黒 曜 石	ⅩⅤ－９
－２	b ₄ －686－20	Ⅱ	ⅠA 5－c	(4.1) × 1.7 × 0.5	2.21	黒 曜 石	
－３	b ₄ －686－25	Ⅱb 2	ⅠA 5－c	3.9 × 2.8 × 0.6	2.81	黒 曜 石	
－４	耕 作 土		ⅠB 1	6.75 × 2.6 × 0.9	13.37	黒 曜 石	
－５	b ₄ －688－17	Ⅱ	ⅢA 1	8.35 × 3.2 × 1.8	29.22	不 明	
－６	b ₄ －688－17	Ⅱ	ⅢA 1	8.6 × 3.3 × 1.6	25.84	頁 岩	
－７	b ₄ －686－20	Ⅱ	ⅢA 1	7.0 × 3.15 × 1.15	15.31	頁 岩	
－８	b ₄ －686－25	Ⅱb 2	ⅢA 1	7.6 × 2.35 × 1.4	16.47	頁 岩	
－９	b ₄ －688－22	Ⅱb 1	ⅢA 1	5.7 × 1.5 × 0.9	5.71	頁 岩	
－10	b ₄ －688－17	Ⅱ	ⅢA 1	4.6 × 2.3 × 0.8	6.31	頁 岩	
－11	b ₅ －686－４	Ⅱb 2	ⅢA 1	5.45 × 2.1 × 1.0	5.81	頁 岩	
－12	b ₄ －688－17	Ⅱ	ⅢB 2	6.4 × 3.2 × 1.1	16.32	黒 曜 石	
－13	b ₄ －688－22	Ⅱb 1	ⅢC 2	4.7 × 3.3 × 1.1	13.23	黒 曜 石	
－14	b ₄ －688－22	Ⅱ	ⅢC 2	4.4 × 2.9 × 1.1	9.92	黒 曜 石	
－15	b ₅ －688－１	Ⅱb 2	ⅢC 2	3.0 × 2.4 × 1.3	4.46	黒 曜 石	
－16	表 採		ⅢC 2	5.9 × 3.9 × 1.1	23.19	黒 曜 石	
ⅩⅤ－18－17	耕 作 土		ⅣA	11.0 × 3.4 × 1.65	108.61	片 岩	
－18	b ₄ －688－17	Ⅱ	Ⅳc 2	16.4 × 5.4 × 1.4	242.00	片 岩	
－19	b ₄ －688－12	Ⅱ	ⅥA	14.8 × 6.1 × 7.8	851.00	橄欖岩？	ⅩⅤ－10
－20	b ₄ －686－25	Ⅱb 1	ⅦB	(27.3) × (10.05) × 4.1	998.00	砂 岩	

XV 滝里32遺跡の調査

XV 滝里32遺跡の調査

1 調査の概要

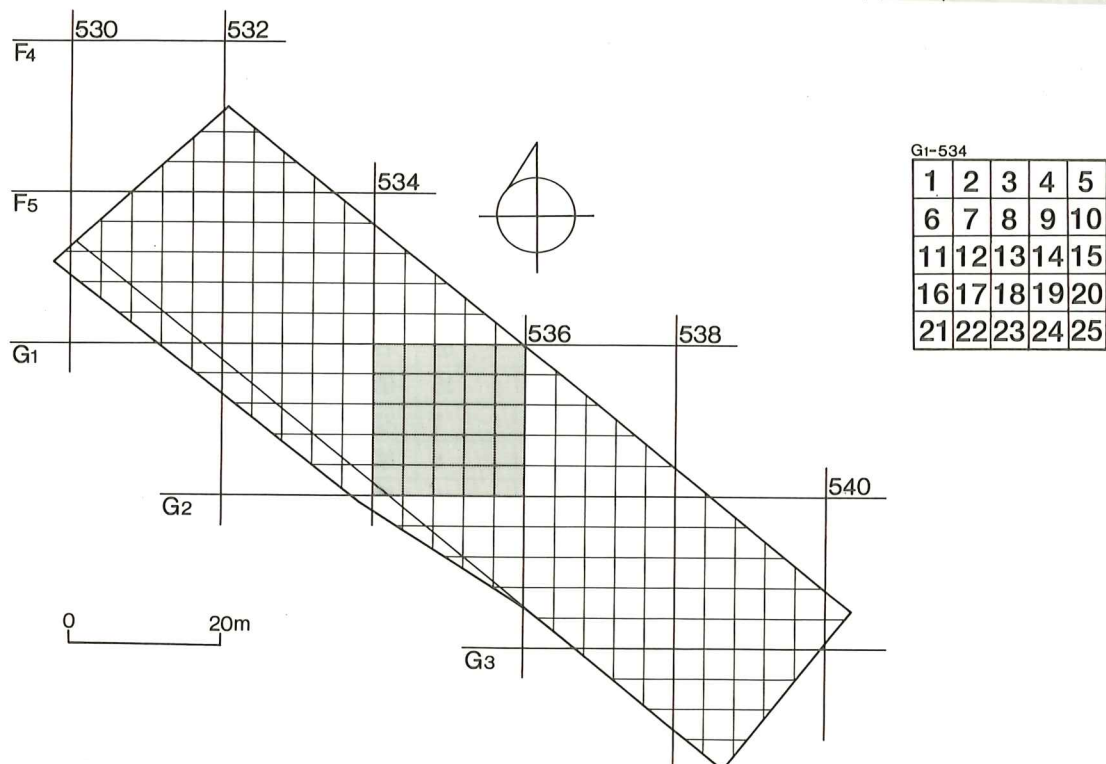
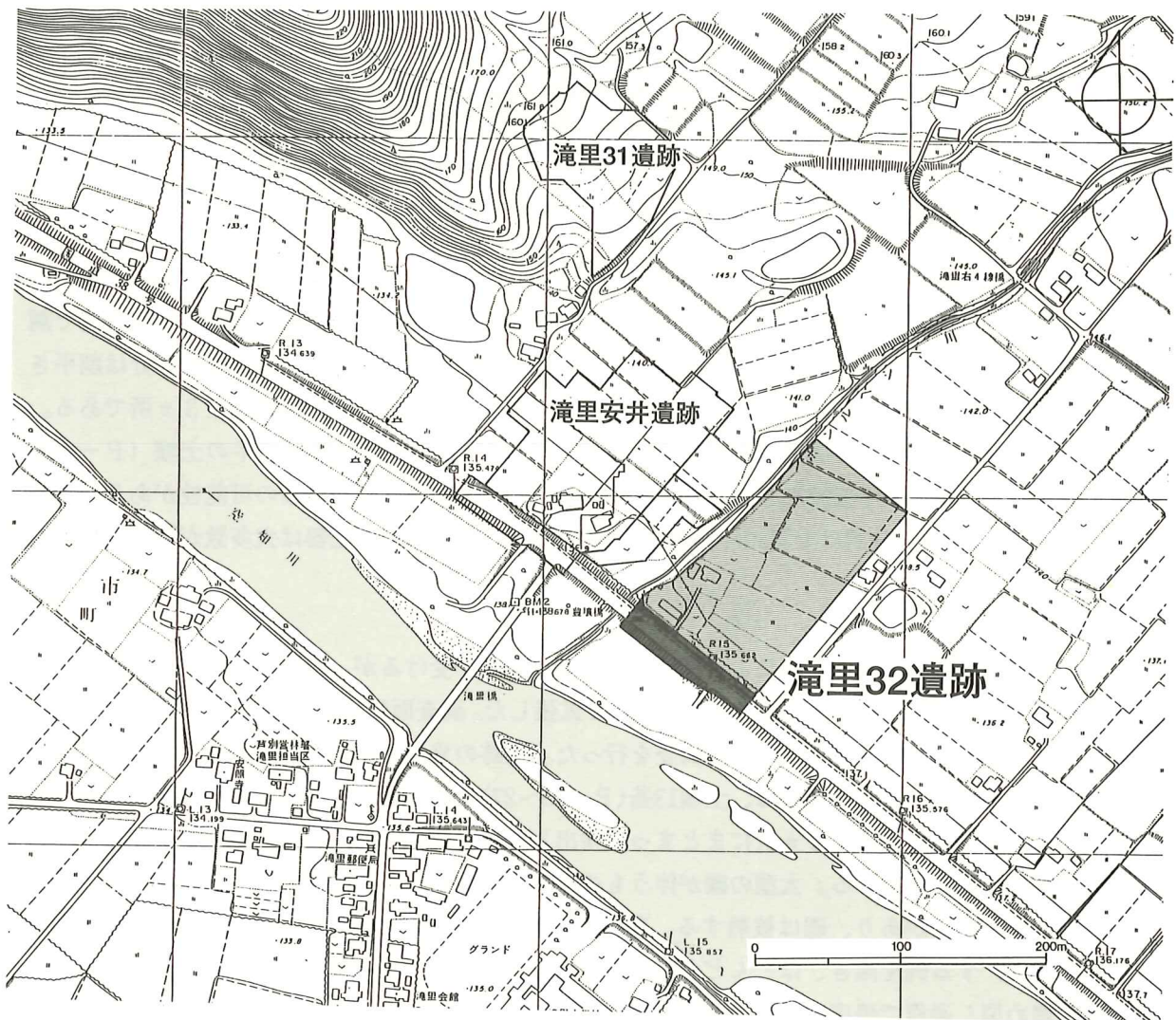
滝里32遺跡は空知川右岸の標高133～140mの低位段丘上に位置する。遺跡西側にはポンルベシュベ川が流れ、対岸には滝里安井遺跡がある。平成3・4年度に続き3年目の調査にあたり、今年度で調査は終了した。総調査面積は17,600㎡である。遺跡は大規模な造田や国道敷設のため大部分は削平されていた。3カ年で検出された遺構は土壇27基、石囲い炉2カ所、集石2カ所、焼土3カ所である。このうち時期が特定できるのは縄文時代中期の土壇（P-27）、縄文時代晩期後半の土壇（P-1・6・11）である。また今年度調査したP-15～26についても縄文時代晩期後葉の可能性がある。遺物の総点数は151,438点。内訳は土器106,594点、石器等44,844点である。土器は大多数が縄文時代晩期後葉である。

今年度調査区は旧国道敷地にあたる。国道敷設により削平を受けるが、遺跡南西側には良好に包含層が存在し、南側へ伸びていたため、190㎡について拡張した。調査面積は最終的に2,750㎡となった。包含層の残る部分については手掘りでの調査を行った。遺跡の東側は包含層に礫が多く混じり、遺物も少量であった。検出された遺構は、土壇13基（P-15～27）、石囲い炉1カ所、集石2カ所である。土壇はP-27を除き、大きく2カ所にまとまって検出した。土壇形状すべては円形で、壁が垂直もしくはフラスコ状に立ち上がる。大型の礫が伴うもの（P-16・20・24・25）や拳大の礫が伴うもの（P-17・21・22・23）があり、礫は被熱する。礫は壇底から出土（P-16・24）、壇底と覆土上面から出土（P-20）する例を除き、ほとんどが覆土中で検出された。覆土は埋め戻しによるものであることから、埋め戻し過程で焼成礫を混入したものと思われる。土壇にはほかに、V群c類土器片、フレイクが出土するものもあるため、時期はP-27を除き、縄文時代晩期後葉の可能性がある。P-27は直径1mを超える大型の土壇で、覆土中からモコト式の土器片が多数出土した。縄文時代中期の土壇と考えられる。

表XV-1 出土遺物一覧

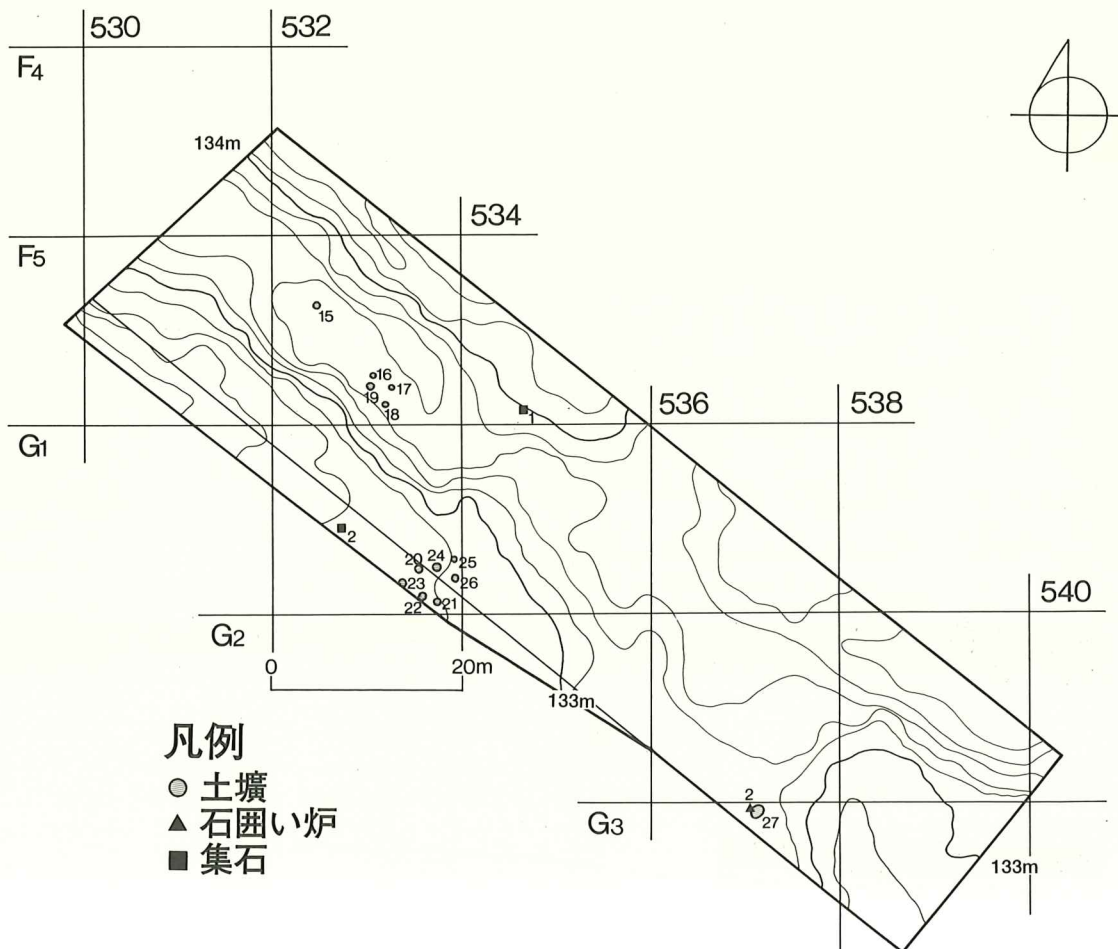
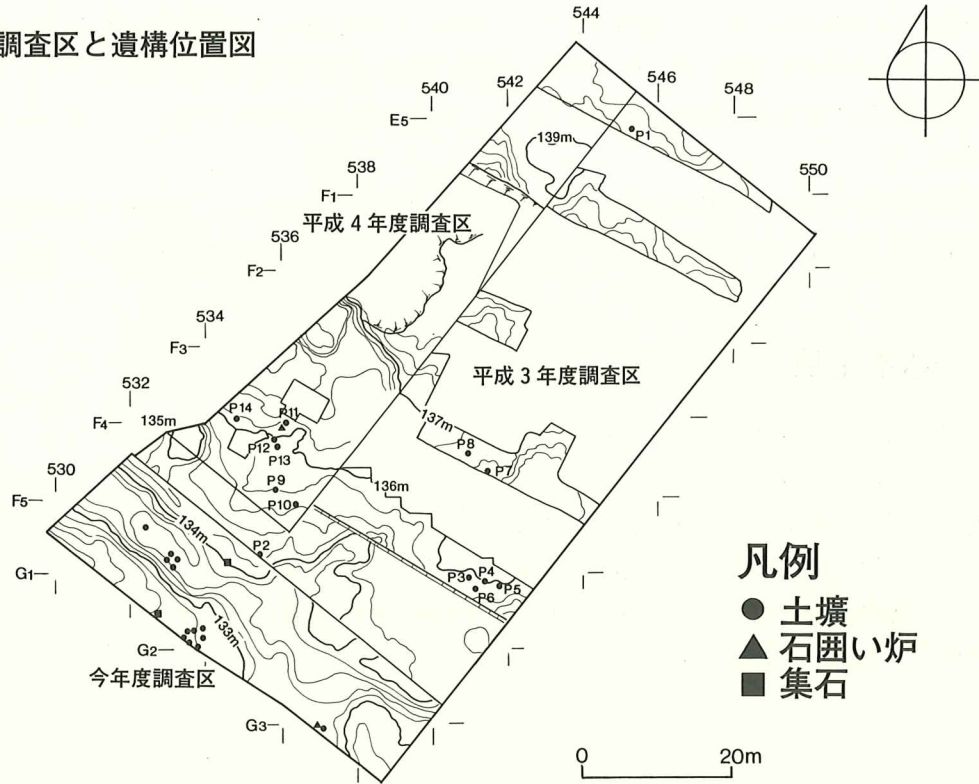
名 称	点 数		名 称	点 数		名 称	点 数	
	遺 構	包含層		遺 構	包含層		遺 構	包含層
I 群 土 器		1	石 鏃		59	石 皿		2
Ⅲ 群 土 器	67	246	石 槍		15	砥 石		
Ⅳ 群 土 器		395	石 錐		7	石 核		35
V 群 土 器	52	8,395	つまみ付ナイフ		6	原 石		3
Ⅵ 群 土 器		40	ナイフ・ナイフ類	1	40	剥 片	46	4,587
不 明 土 器			スクレイパー		80	R フ レ イ ク		25
			石斧・石斧関連		41	加工痕のある礫		1
			た た き 石	2	13	土 ・ 石 製 品		2
			台 石	8	14	礫 ・ 礫 片	241	
			す り 石		1	くさび形石器		1
合 計	119	9,077	合 計				298	4,932
	9,196						5,230	

1 調査の概要



図Ⅳ-1 遺跡の位置図とグリッド設定図

年度別調査区と遺構位置図



図XV-2 年度別調査区・最終面地形と遺構位置図

2 基本土層

遺物は14,426点出土した（遺構分含む）。内訳は土器9,196点、石器等5,230点である。縄文時代晩期末の土器が卓越するが、縄文時代中期、後期、続縄文時代初頭の土器も少量みられる。縄文時代早期の東釧路Ⅳ式土器が1点のみ出土している。石器では礫石器がすくない。石斧は小型のものが比較的多かった。

滝里32遺跡では対岸の滝里安井遺跡に比較し遺物、遺構が少ない。また滝里安井遺跡では多種多様な副葬品をともなった土壙墓が多いのに対し、礫のみが出土する土壙が特徴的である。

（愛場和人）

2 基本土層

滝里32遺跡の土層は以下のとおり。

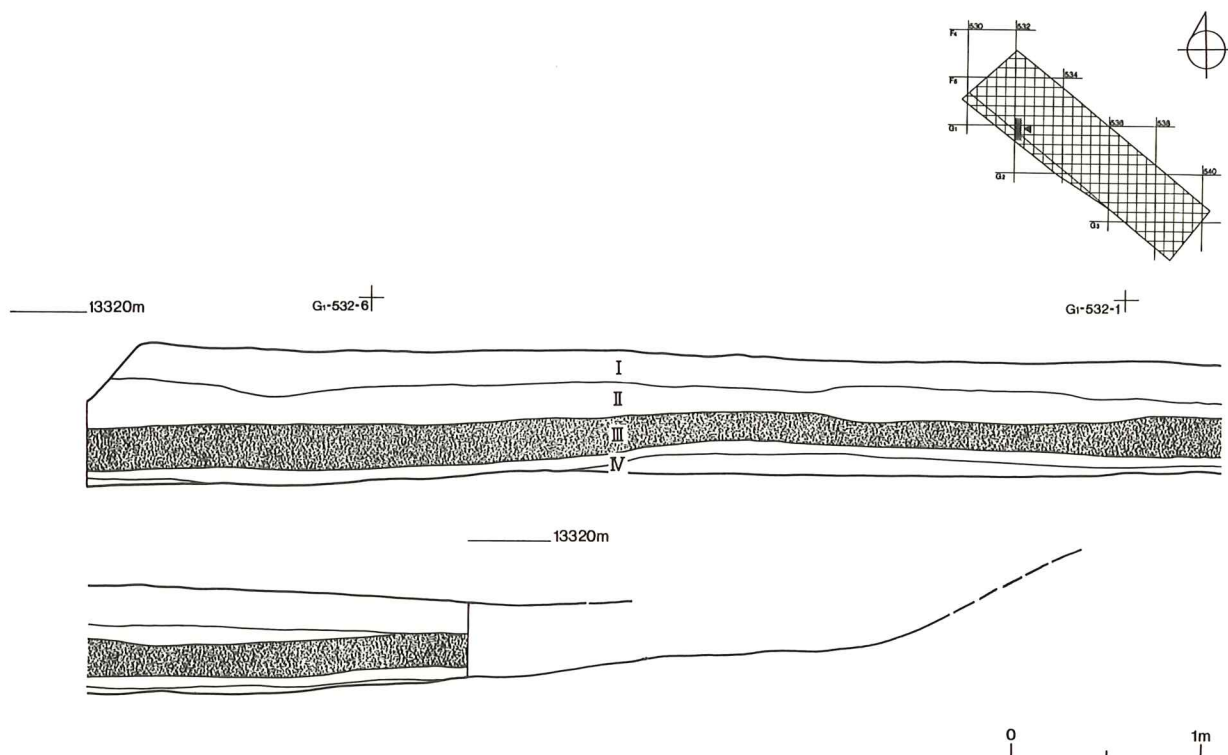
Ⅰ層：攪乱土、盛土。

Ⅱ層：褐色砂質土。遺物包含層。遺跡南東部でみられ、極く少量遺物が出土する。

Ⅲ層：黒褐色土、褐色土層。遺物包含層。南側斜面部では層厚30cm近くになる。粒径は細かい。遺跡東側へ近づくにしたがい河川による影響で礫が多量に混入する。

Ⅳ層：黄褐色土、砂礫層

（愛場和人）



図Ⅶ-3 土層断面図

3 遺構と遺構出土の遺物

(1) 土壌

土壌はP-27を除き、段丘平坦面（P-15~19）と段丘縁辺（P-20~26）の大きく2カ所にまとまって検出された。ほとんどが礫を伴い、平面形は円形となる。礫は拳大のものが、Ⅲ層中に見られる礫で、大型のものは河原の礫と考えられる。トロニウム岩は少量みられるにすぎない。

段丘平坦面の土壌群周辺はⅢ層に河川の影響による礫が多量に混じる土層であった。このため覆土中には礫が多量に混じり、遺物としての礫との区別は困難な場合があった。また削平によりすべて底面近くでの検出となっている。

一方の段丘縁辺の土壌群は、黄褐色粘質土を掘り込んでいる。多くは埋め戻しされ、被熱した礫が壙底から数cm程のところで出土するものや礫上面と壙底と分かれて出土するものなどそれぞれ異なった出土状況を示す。覆土が埋め戻されているものもあることから土壌墓とも考えられるが、すべて性格不明の土壌としている。

P-27は単独で検出された。出土遺物から縄文時代中期モコト式の時期の土壌と思われる。

P-15（図XV-4 図版XV-2）

位 置：F₅-532-7 規 模：0.81×0.67／0.60×0.53／0.16m

平 面 形：不整の円形 長 軸：———

出土遺物：V群c類土器片4点、フレイク6点（うち頁岩製1点）、礫1点

Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みがみられたため確認した土壌である。上部は削平され、底面近くでの検出である。壙底は皿状となる。覆土には2~10cmの小礫が全体に混じり、土器小片、フレイクが散在する。遺物として取り扱った礫は2.8kgの比較的大型のものである。

1・2はV群c類土器。他の土器も非常に小さな破片となる。

P-16（図XV-4 図版XV-2）

位 置：F₅-532-18 規 模：0.60×0.54／——／0.15m

平 面 形：円形 長 軸：———

出土遺物：V群c類土器片28点、たたき石1点、フレイク31点、礫3点

Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みがあり確認した土壌である。上部は削平され、底面近くでの検出である。小型で、壙底は皿状となる。大型の礫2点と、小型の礫が壙底直上にまとまって出土した。大型の礫2点はトロニウム岩製の偏平のもので、被熱する。重さはともに約8kgである。覆土中には細かな土器片、フレイクが全体に混じる。

1は細い沈線文が4条横位に施文される。V群c類土器と思われる。

P-17（図XV-4 図版XV-2）

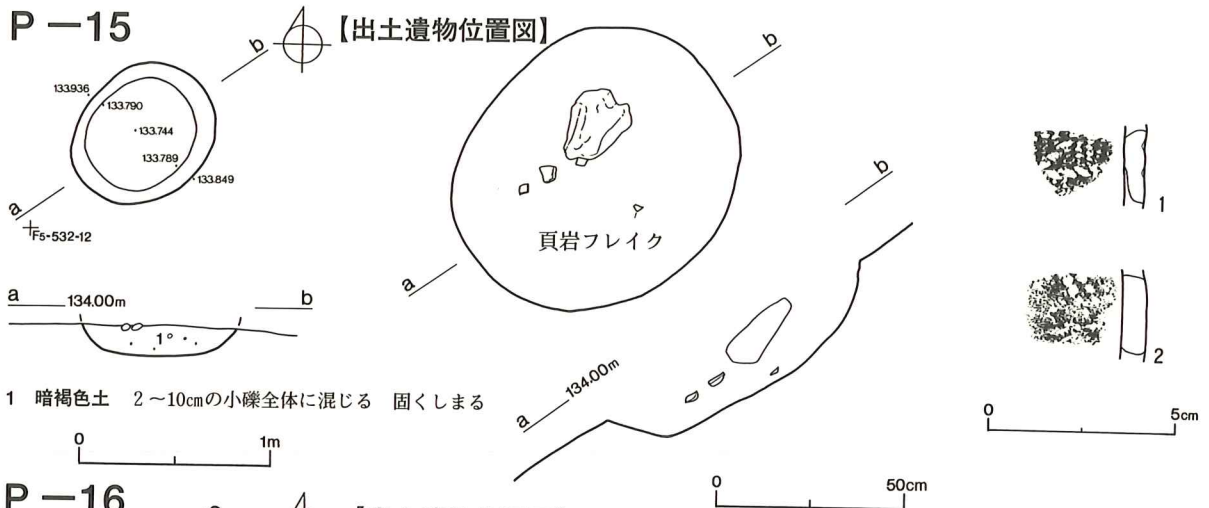
位 置：F₅-532-19・24 規 模：0.65×0.55／0.55×0.50／0.12m

平 面 形：円形 長 軸：———

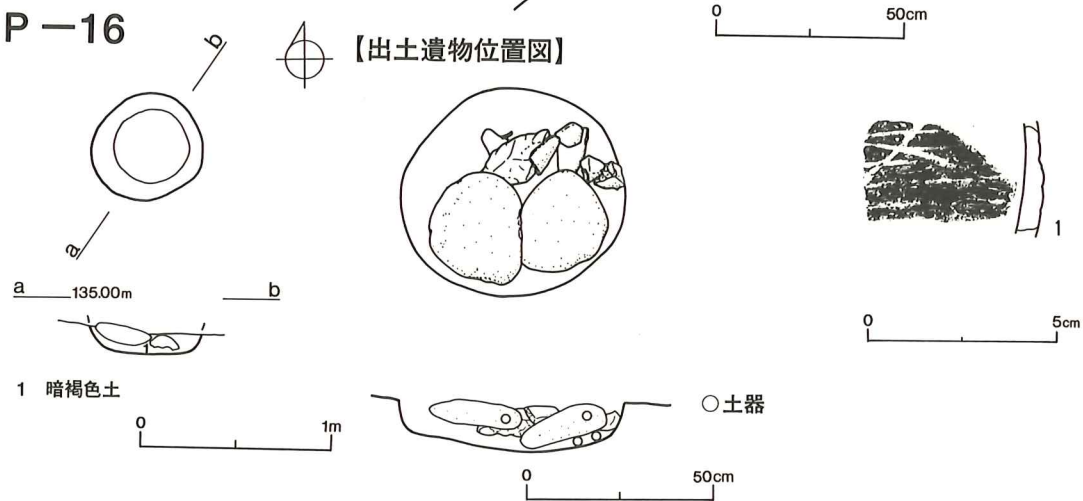
出土遺物：V群c類土器片12点、礫11点

Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みがあり確認した土壌である。上部は削平され、底面近くでの検出である。小型で、壙底面は平坦となる。覆土中には200~600g程の拳大の礫が全体に混じる。壙底直上

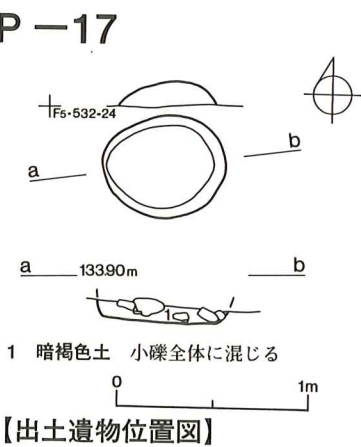
P-15



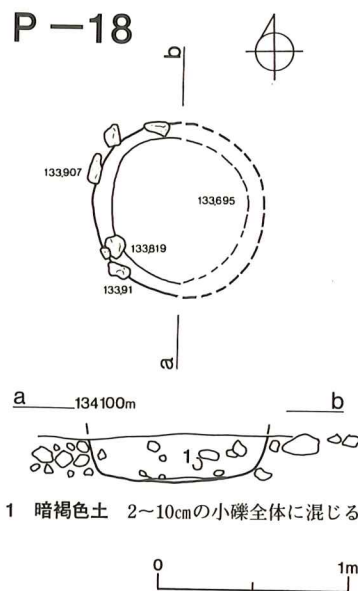
P-16



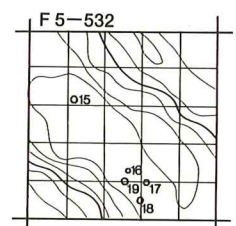
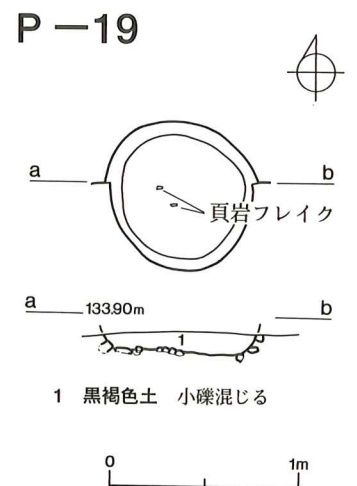
P-17



P-18



P-19



図Ⅳ-4 P-15~19と出土遺物

からまとまって検出されたが、意図的に入れられたものか、周辺の礫層中のものがそのまま混入したものか判別できない。

P-18 (図XV-4 図版XV-2)

位置: F₅-532-23・24 規 模: 0.93×0.89/0.75×0.71/0.24 m

平面形: 円形 長 軸: ———

出土遺物: なし

Ⅲ層調査中、土層観察用の壁に土壌断面がみられたため確認された土壌である。Ⅳ層まで掘り込まず、Ⅲ層中で壙底となる。周辺のⅢ層は礫を多量に含み、覆土も同様の土で構成される。壙底形状は皿状となる。

P-19 (図XV-4 図版XV-3)

位置: F₅-532-18・23 規 模: 0.83×0.76/0.68×0.65/0.12 m

平面形: 円形 長 軸: ———

出土遺物: V群c類土器片2点、フレイク5点(うち頁岩フレイク2点)

Ⅲ層調査中、土層観察用の壁壁に土壌断面がみられたため確認された土壌である。Ⅳ層まで掘り込まず、Ⅲ層中で壙底となる。周辺のⅢ層は礫を多量に含み、覆土も同様の土で構成される。壙底形状は皿状となる。検出状況はP-18と非常に近似している。珪質頁岩のフレイクが2点出土している。

P-20 (図XV-5 図版XV-3)

位置: G₁-532-19 規 模: 0.81×0.81/0.89×0.87/0.31 m

平面形: 円形 長 軸: ———

出土遺物: 礫40点

Ⅲ層調査中、大型の礫が集中して出土したため確認した土壌である。礫は上面と壙底に分かれて出土した。礫の大きさ、材質に違いはないが下位から出土したものは被熱する。壙底は平坦で、壁はフラスコ状となる。覆土は上から大きく褐色土、黄褐色土、暗褐色土の3層に分けられる。埋め戻されていると思われる。

P-21 (図XV-5 図版XV-3)

位置: G₁-532-25 規 模: 0.84×0.75/0.74×0.63/0.44 m

平面形: 円形 長 軸: ———

出土遺物: 礫25点

Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認し、検出された土壌である。壙底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。覆土は埋め戻しによるもの。ほとんどが黒褐色土であるが、覆土2・3と覆土5・6の間に薄く黄褐色土と拳大の礫が混じる。礫は被熱している。

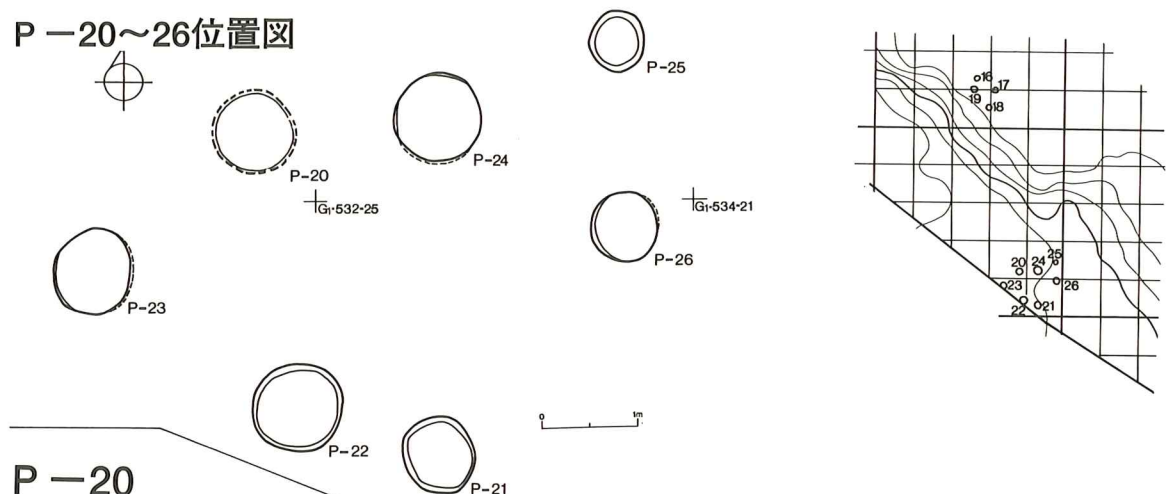
P-22 (図XV-5 図版XV-3)

位置: G₁-532-24・25 規 模: 0.98×0.94/0.88×0.84/0.48 m

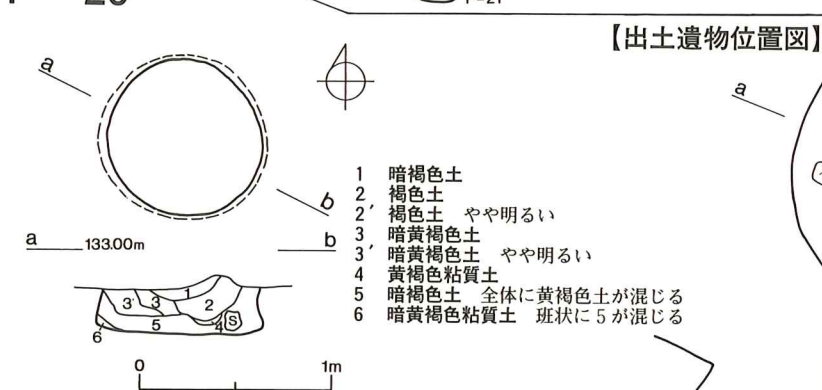
平面形: 円形 長 軸: ———

出土遺物: 礫85点

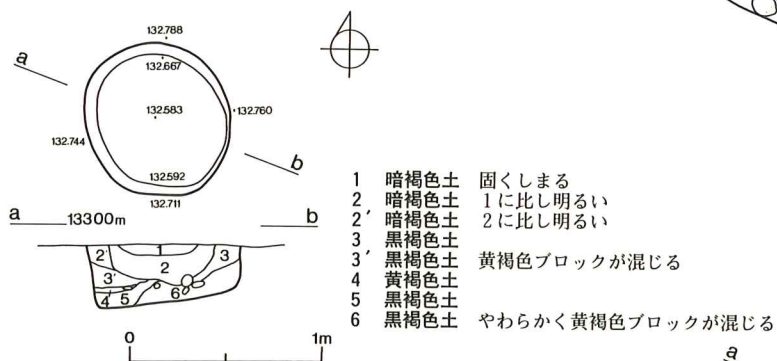
P-20~26位置図



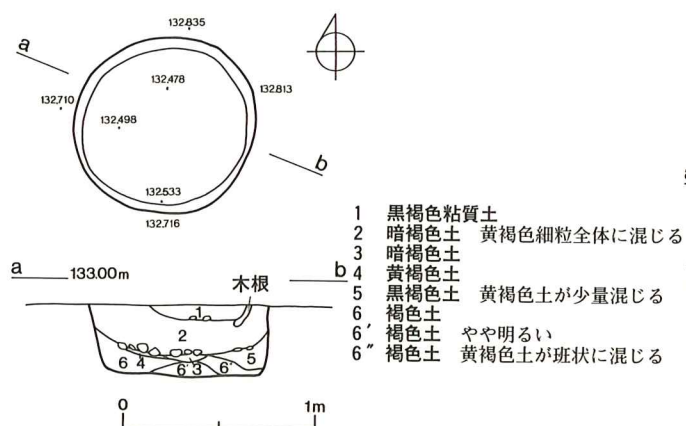
P-20



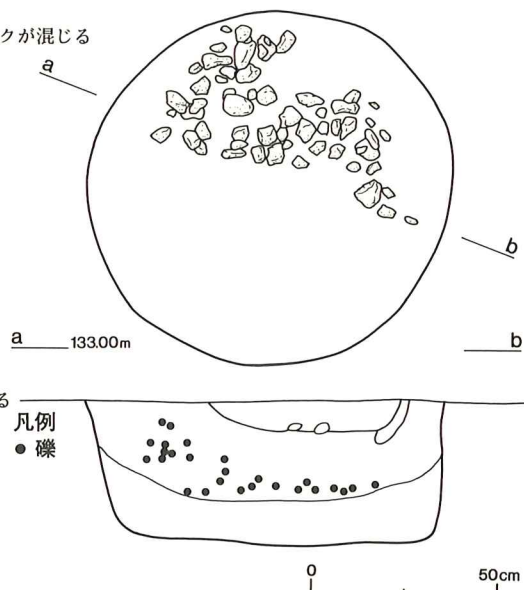
P-21



P-22

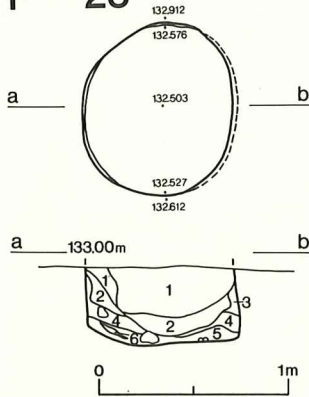


【出土遺物位置図】

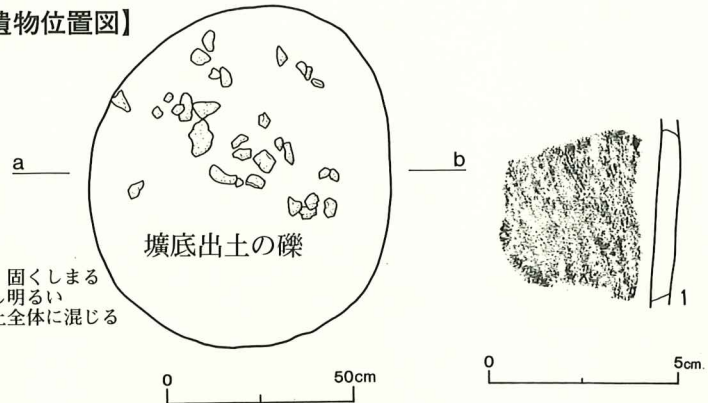


図XV-5 P-20~22

P-23

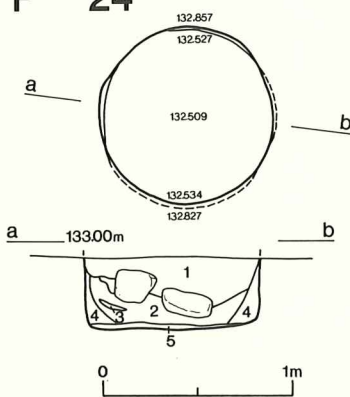


【出土遺物位置図】

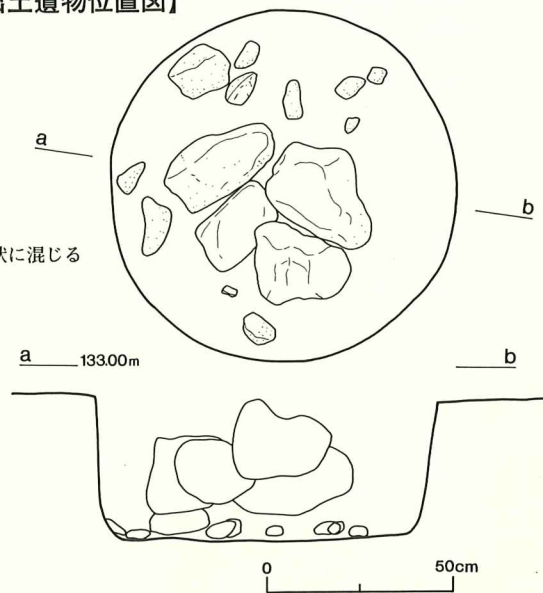


【出土遺物位置図】

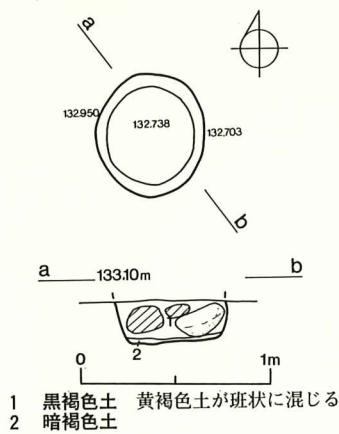
P-24



- 1 黒褐色土 細かい。固くしまる
- 2 黒褐色土 1に比し明るい
- 3 暗褐色土 黄褐色土全体に混じる
- 4 黄色砂質土
- 5 暗黄褐色土
- 6 黄褐色土



P-25

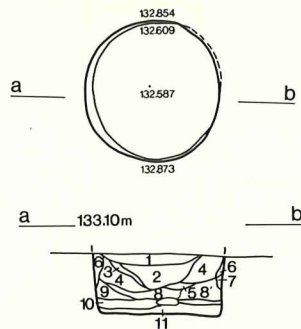


- 1 黒褐色土 黄褐色土が班状に混じる
- 2 暗褐色土

【出土遺物位置図】

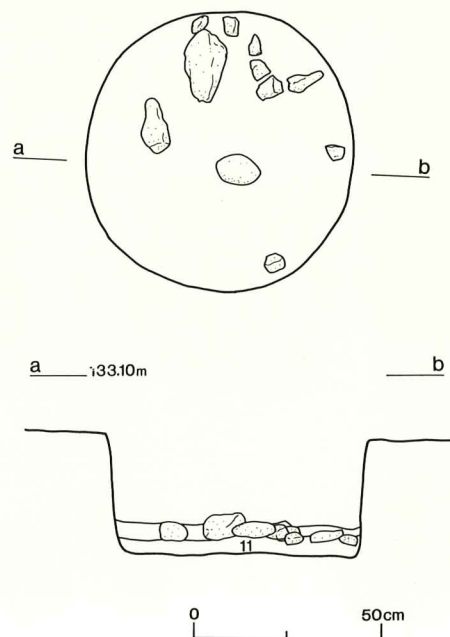


P-26



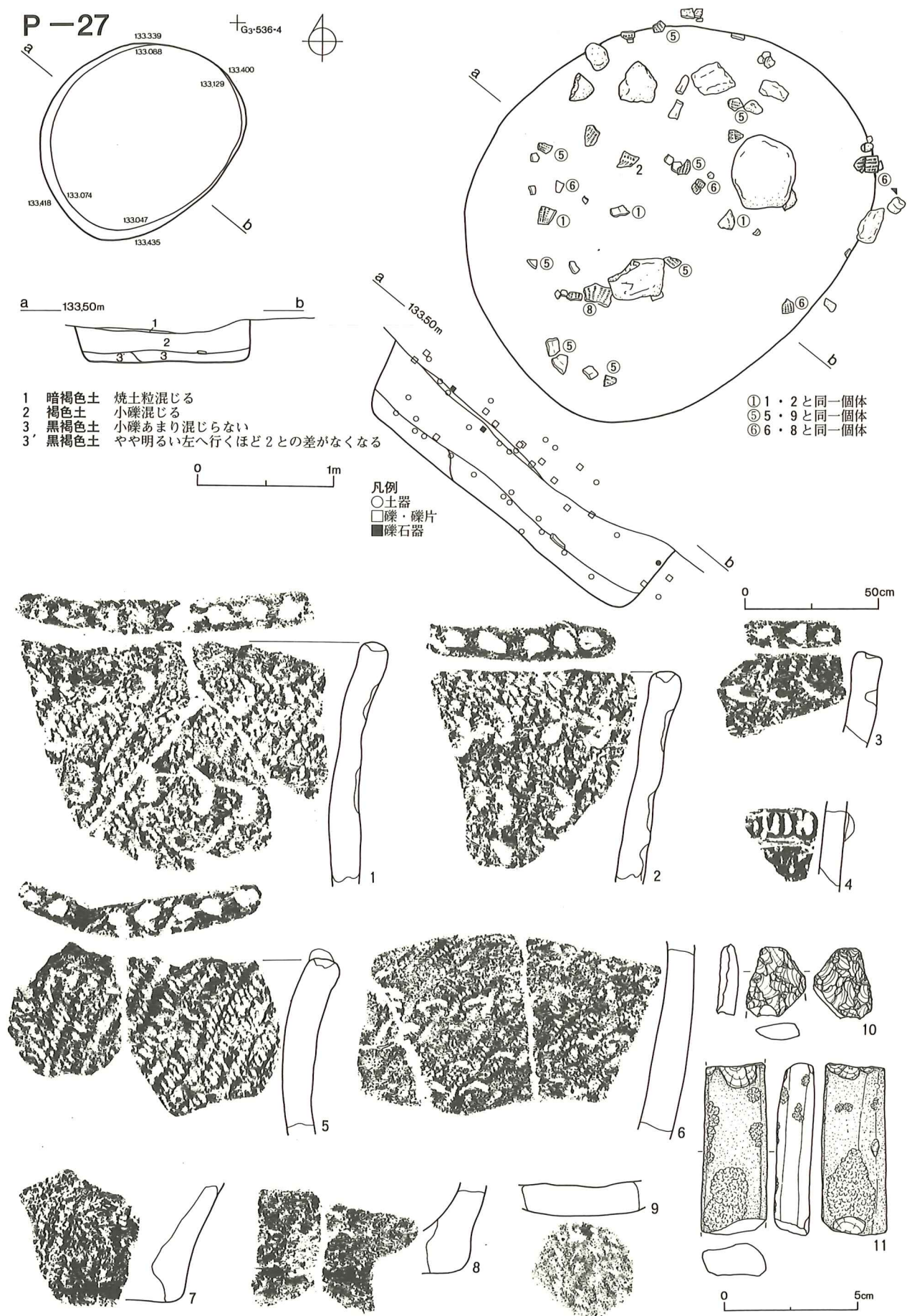
- 1 暗褐色粘質土
- 2 黒褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 暗褐色土 黄褐色土が班状に混じる
- 5 黄褐色土
- 6 褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土 やや明るい
- 10 暗黄褐色土
- 11 褐色土

【出土遺物位置図】



図XV-6 P-23~26と出土遺物

3 遺構と遺構出土の遺物



図Ⅳ-7 P-27と出土遺物

IV層上面で黒褐色土の落ち込みがみられたため確認された土壌である。壙底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。覆土は埋め戻しによるもの。ほとんど黒褐色土充填されるが、P-21と同様に、壙底から10cm程のところ覆土2と覆土5・6の間に黄褐色土層がみられる。その土層間には拳大の焼成礫が敷き詰められた様に出土した。礫は20~100g程のものが多く。

P-23 (図XV-6 図版XV-4)

位置: G₁-532-24 規模: 0.93×0.80/0.92×0.80/0.42m

平面形: 不整の円形 長軸: ———

出土遺物: V群c類土器片1点、礫29点

IV層上面で黒褐色土の落ち込みがみられたため確認された土壌である。壙底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は埋め戻しによるもの。上から黒褐色土と褐色土に大きく分かれ、黄褐色土が薄く間層となる。壙底直上では小型の礫がまとまって出土した。

P-24 (図XV-6 図版XV-4)

位置: G₁-532-20 規模: 0.95×0.92/0.95×0.91/0.49m

平面形: 円形 長軸: ———

出土遺物: V群c類土器片2点、礫25点

IV層上面で黒褐色土の落ち込みがみられたため確認された土壌である。壙底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は埋め戻されている。覆土1と覆土2の間から12~19kgの大型の礫が4点、壙底から拳大の礫が17点出土した。壙底の礫は被熱している。

P-25 (図XV-6 図版XV-4)

位置: G₁-532-20 規模: 0.66×0.58/0.52×0.46/0.34m

平面形: 円形 長軸: ———

出土遺物: V群c類土器片3点、台石2点、フレイク1点、礫3点

Ⅲ層調査中、大型の礫が集中して出土したため確認した土壌である。壙底は平らで、壁は垂直に立ち上がる。台石2点、礫3点はいずれも壙底近く、覆土1層中に存在する。すべて被熱し、炭化物が付着する礫もみられる。

P-26 (図XV-6 図版XV-4)

位置: G₁-532-25 規模: 0.75×0.71/0.73×0.67/0.33m

平面形: 円形 長軸: ———

出土遺物: フレイク1点、礫7点

IV層上面で黒褐色土の落ち込みがみられたため確認された土壌である。壙底は平らで、壁は垂直に立ち上がる。覆土は埋め戻されたもので、黒褐色土と黄褐色土の互層となる。黄褐色土はいずれも薄く堆積する。壙底上の覆土11と覆土10の間に礫が散在する。

P-27 (図XV-7 図版XV-5)

位置: G₃-536-3・4 規模: 1.55×1.32/1.44×1.23/0.31m

平面形: 不整円形 長軸: ———

出土遺物：Ⅲ群b類土器67点、ナイフ片1点、たたき石1点、台石4点、フレイク2点、礫8点
石囲い炉2が検出されたため、周辺を精査したところ、その南東側に礫が数個つづいて出土した。このため礫に近接してトレンチをいれたところ、土壌の断面が確認された。上面で確認した礫は石囲い炉2に続く炉石の可能性があり、この土壌と関連しないものかもしれない。土壌はⅣ層の砂礫層を掘り込んでいる。壙底は平らで壁は垂直に立ち上がる。土器は破片が全体にばらまかれた様に出土した。少なくとも4個体分の破片が存在する。

1・2は同一個体。平縁となりそうである。断面形が楕円となる竹管状の工具により、押し引き文風の刺突列が巡る。口唇断面形は丸みを帯びた角形である。口唇にも同工具で押し引き風の刺突がなされる。3は半月状に刺突される。4は貼り付け上には短刻文が縦位に施され、貼り付けに沿って、直下には沈線が引かれる。焼きが非常によい。5・9は同一個体。角状の小突起がみられる。口唇上には竹管状の工具による刺突がなされる。胎土にはあずき色の砂粒が含まれる。6・8は同一個体。6は綾繰り文がみられる。10は両面調整石器の基部。刃部は破損している。11は棒状の礫の平坦部に敲き痕がみられる。

時期は縄文時代中期、性格は不明である。なお壙底から出土した炭化物の¹⁴C年代測定では4130±40 y. B Pの年代が得られている。(愛場和人)

(2) 石囲い炉

石囲い炉2 (図XV-8)

位 置：G₃-536-3・4 **規 模：**0.84×0.63m

出土遺物：台石1点、礫・礫片7点

Ⅲ層調査中に焼成礫が環状に検出された。周辺を精査したが、焼土粒と炭がわずかに検出されたのみで、明確な焼土の拡がりは得られなかった。すぐ東に縄文時代中期の土壌と考えられるP-27が隣接するが、この覆土中から焼成礫や焼土粒が出土した。石囲い炉2自体は時期を想定させる遺物が伴わなかったが、周辺の遺物やP-27が持つ内容から縄文時代中期に形成された可能性が高い。

(影浦 覚)

(3) 集石

S-1 (図XV-8 図版XV-5)

位 置：F₅-534-22 **規 模：**0.95×0.50m

出土遺物：礫22点

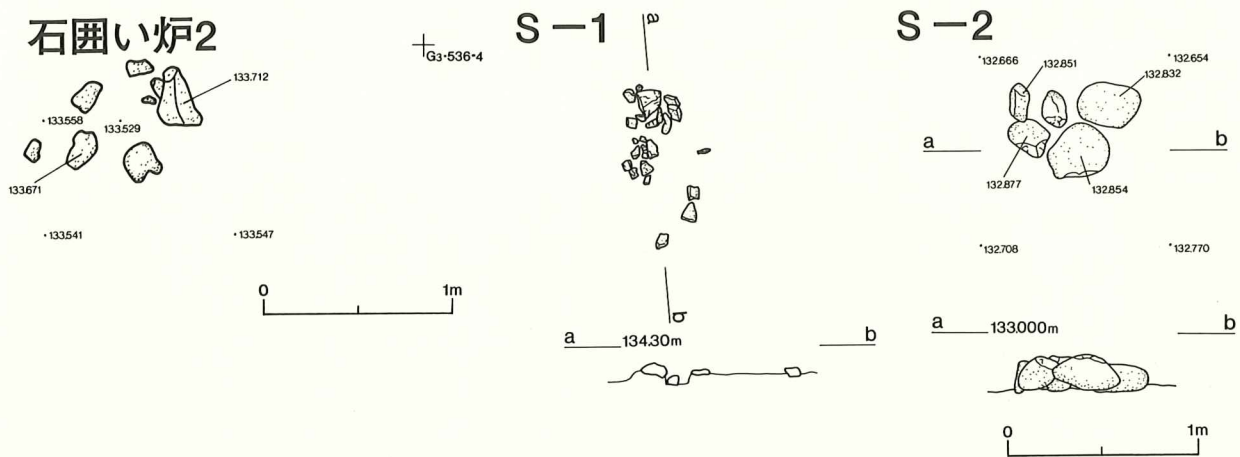
調査区中央北側で、Ⅲ層調査中に検出した。拳大の被熱した亜円礫が集中する。時期は不明である。

S-2 (図XV-8 図版XV-5)

位 置：F₅-534-22 **規 模：**0.80×0.63m

出土遺物：台石2点、焼成礫・礫片8点

Ⅳ層上面で焼成した台石と礫が固まって出土した。台石はいずれもトロニウム岩で、一部に炭化物が付着している。時期は不明。(愛場和人)



図Ⅳ-8 石囲い炉2、S-1・2

4 包含層出土の遺物

(1) 土器

I 群土器 (図XV-11-1 図版XV-6)

b-4 類: (1) 東釧路Ⅳ式に相当するもの。1点のみ出土する。

Ⅲ群土器 (図XV-11-1 図版XV-6)

Ⅲ群b類: (2~15) モコト式、北筒式に相当するもの。246点出土している。調査区東側に偏って分布する。

2・3は口縁の突起部分。2は山形突起部から貼り付けが逆「U」の字状に施される。貼り付け上と口唇には縄による刻みがある。口唇断面形は角形。貼り付け下には縄線文が施文されている。3は口唇上に竹管状の工具で不規則に様々な方向から刺突がなされる。口縁内面には上方と下方からの刺突がある。4は口縁先端部が外反する。口唇直下には篋状工具での押し引き文が3条横位に施される。口唇内面には同施文具での刻みがある。5は篋状工具で、横位と縦位に押し引きされる。口縁は小波状となる。6は竹管状の工具で横位に連続刺突文が施される。口唇は表側から内側に向かって刺突される。7は綾くり文がみられる。14は口縁部がやや外反する。口唇断面形は丸味を帯びた角形である。口唇部より4~5cm程下には断面形が半円となる貼り付けが2条狭い間隔で横位に施される。貼り付け間は指で撫でられている。2条の貼り付け下部には等間隔で円形刺突文が施文される。刺突部は中央がやや盛り上がる。胎土は石英、長石を多量に含む。8~13は胴部破片。8は爪形文、9は縄線文、10は竹管状工具による刺突文が施される。11・12は同一個体。横位の貼り付け上には竹管状の工具での押し引き文が施される。11には内面に縄文がみられる。13は縦位と横位の貼り付け上には縄線文がみられる。磨滅してほとんどわからないが、内面に縄文がある。石英、長石が多量に含まれる。15は張り出しがある底部。

Ⅳ群土器 (図XV-12・13 図版XV-6・7)

Ⅳ群a類(16): 余市式土器に相当するもの。

調査区南西部のⅣ層上面で1個体分(300点を超える破片となっていた)まとまって出土した。

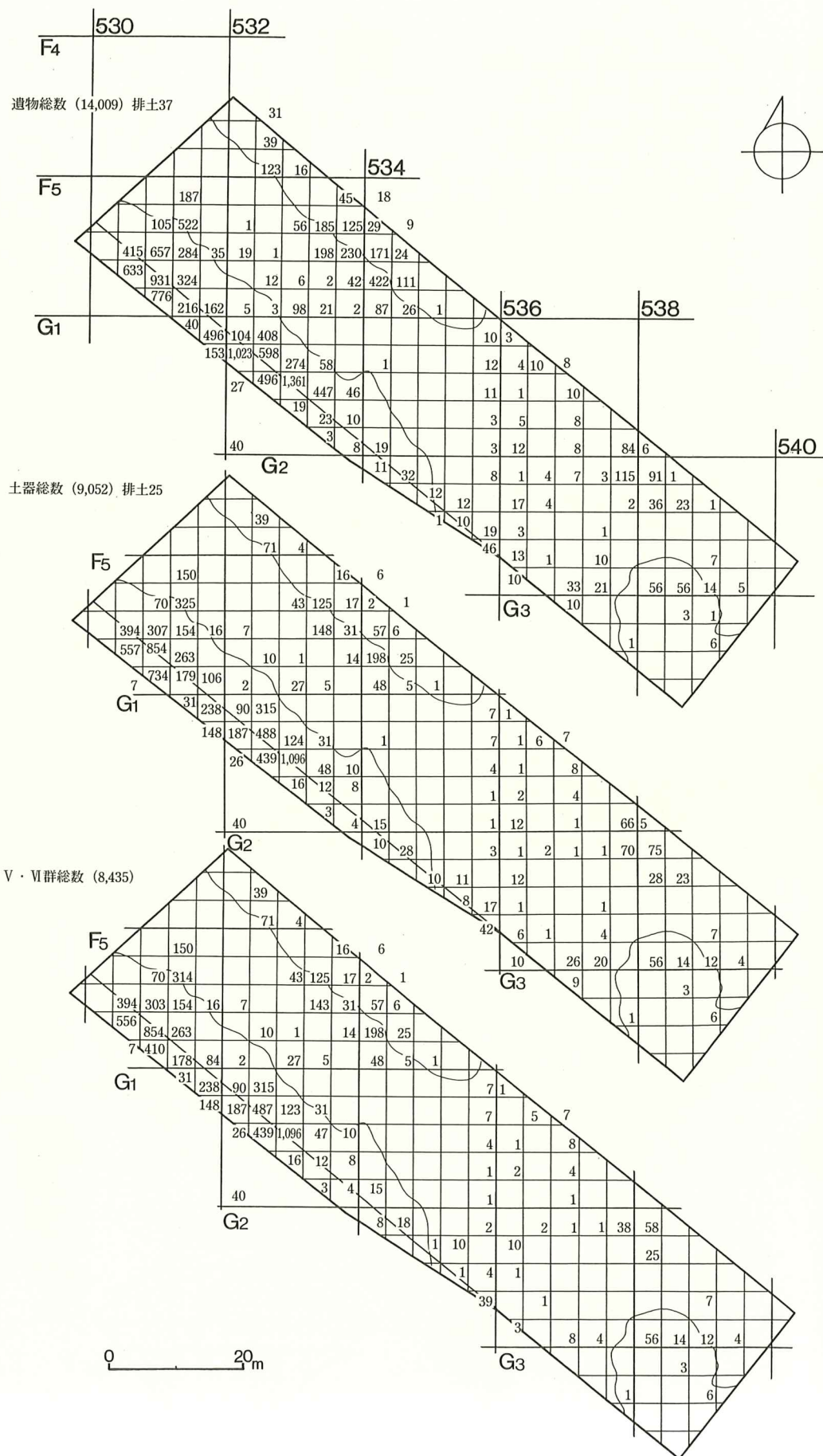
16は余市式土器。口縁部から胴部までと、底部を復元している。推定口径約28cmである。底部は張り出し、胴部はやや膨らむ。口縁部は外反する。口唇断面形は角形。横位に貼付帯が付けられ、その上下は指頭により地文の縄文がすり消される。貼付帯下部には円形刺突文が巡る。刺突部断面の中央はわずかに盛り上がる。胎土は石英、長石、小礫を多量に含む。

Ⅳ群b類土器(17) 71点出土している。調査区東側に偏って分布する。

17は細い沈線により文様が描かれるもので、焼成がよく、薄い。

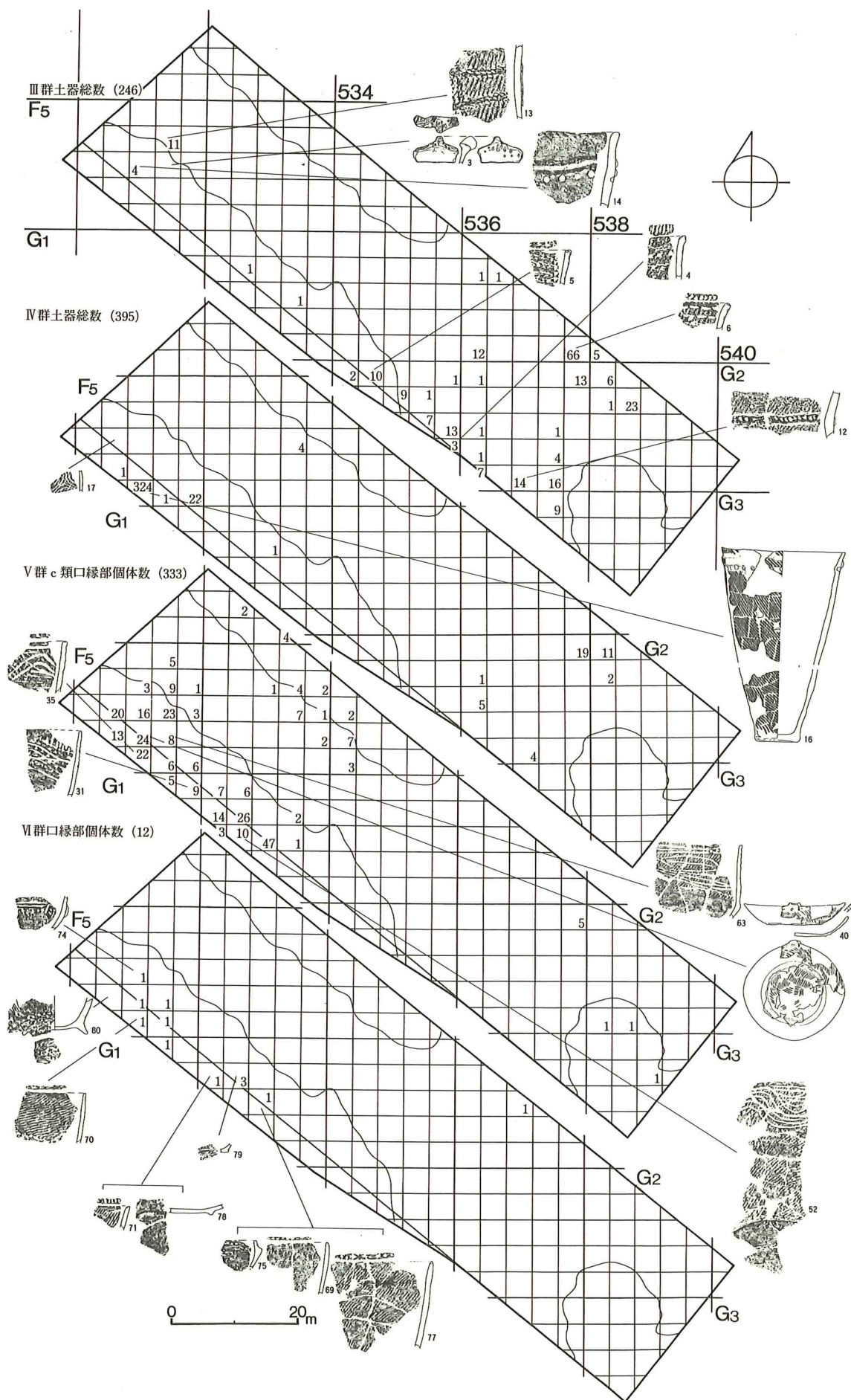
V群土器 (図XV-13~17 図版XV-7~11)

V群c類が大部分を占める。V群a類・b類は少量みられる。縄文のみの胴部破片についてはV・Ⅵ群の区別が困難であるため、便宜的にV群として集計した。V・Ⅵ群の分類は口縁部破片及び底部について行った。個体数の集計は口縁部破片によって行い、接合片と同一個体としたものは1点とし



図Ⅳ-9 包含層出土の遺物総数と土器分布図(1)

4 包含層出土の遺物



図XV-10 包含層出土の土器分布図(2)

て数えた (図XV-10)。

V群c類土器では沈線文施文のものが多く、特に沈線と刺突を組み合わせた文様が特徴的にみられる。

・深鉢形および鉢形土器 (21~39)

21~23は横位と鋸歯状の縄線を組み合わせた文様が施されるもの。21・22は同一個体の可能性がある。口唇断面形は丸味を帯びた角形。22には口唇表側に折り返しがみられる。23は口唇上に竹管状工具による刺突が施される。

24~39は沈線文が施されるもの。

24~27・37は横位、斜位の沈線が主体となるもの。24は大型の鉢形土器。内面は篋状工具で調整され、炭化物が一部付着する。25a~cは横位と長円形の沈線文がみられ、長円形内には斜格子目文が沈線で充填される。口唇断面形は角形であるが、縁が撫でられ、丸みを帯びる。26は25と似た文様構成となる。27は焼きがよい。

28~32は沈線文と刺突文が施文されるもの。29以外は沈線と沈線の間に刺突が充填される。29は口縁部がやや開く器形となる。横位の沈線文下に棒状工具による刺突がなされる。30は口径35cmの大型の鉢形土器。沈線は浅く、刺突は下方から施される。31abは竹管状の同じ施文具により沈線文、刺突文が施される。31bは口唇上に刻みがみられ、その部分がやや肥厚する。縦位の沈線は下方から上方に引かれ、沈線上端部に工具端部が刺突様に残る。補修孔がある。

33~36・39は波状、円弧状の沈線文がみられるもの。33は断面形が角形となる。36は胎土に石英、長石が多く含まれる。裏面には補修孔の下に途中まであけかけた痕がある。

38は胴部。地文の縄文をなぞるように沈線が施される。

・浅鉢形土器、小型の鉢形土器 (40~58)

40は口径23cmの浅鉢形土器。二つの副突起を有すると思われる波頂部があり、内外面には指頭による調整が施される。副突起下にはそれぞれ貫通孔がある。底面には粘土紐を2重にほぼ円形に巡らせ、あげ底のような効果をもたせている。口唇断面形は角形で、口唇上には非常に細い沈線が斜めに刻まれる。地文の縄文はRL原体のものが斜位に施される。

41は横位と鋸歯状の縄線文が施されるもの。焼成がよい。

42~49・52は沈線文が施されるもの。42・43は同一個体の可能性がある。ささら状工具で横位の沈線文が施文される。口唇上には細い縄線が横位に2条と口唇表側角に縦位に施される。43~49は比較的細い沈線が浅く施される。44・45は口唇上に横位に刺突され、46・47は棒状工具により縦位に刻みが入られる。49は胎土に石英、小礫含む。52は口唇断面形が角形となり、口唇上は擦られている。波状の曲線を描いてから横位に平行沈線が施文される。半月形の刺突が波状の沈線文下に施される。

50・51は刺突文がみられるもの。50は細く、角がある工具で下から刺突される。51は細い骨のような工具が使用されているようである。

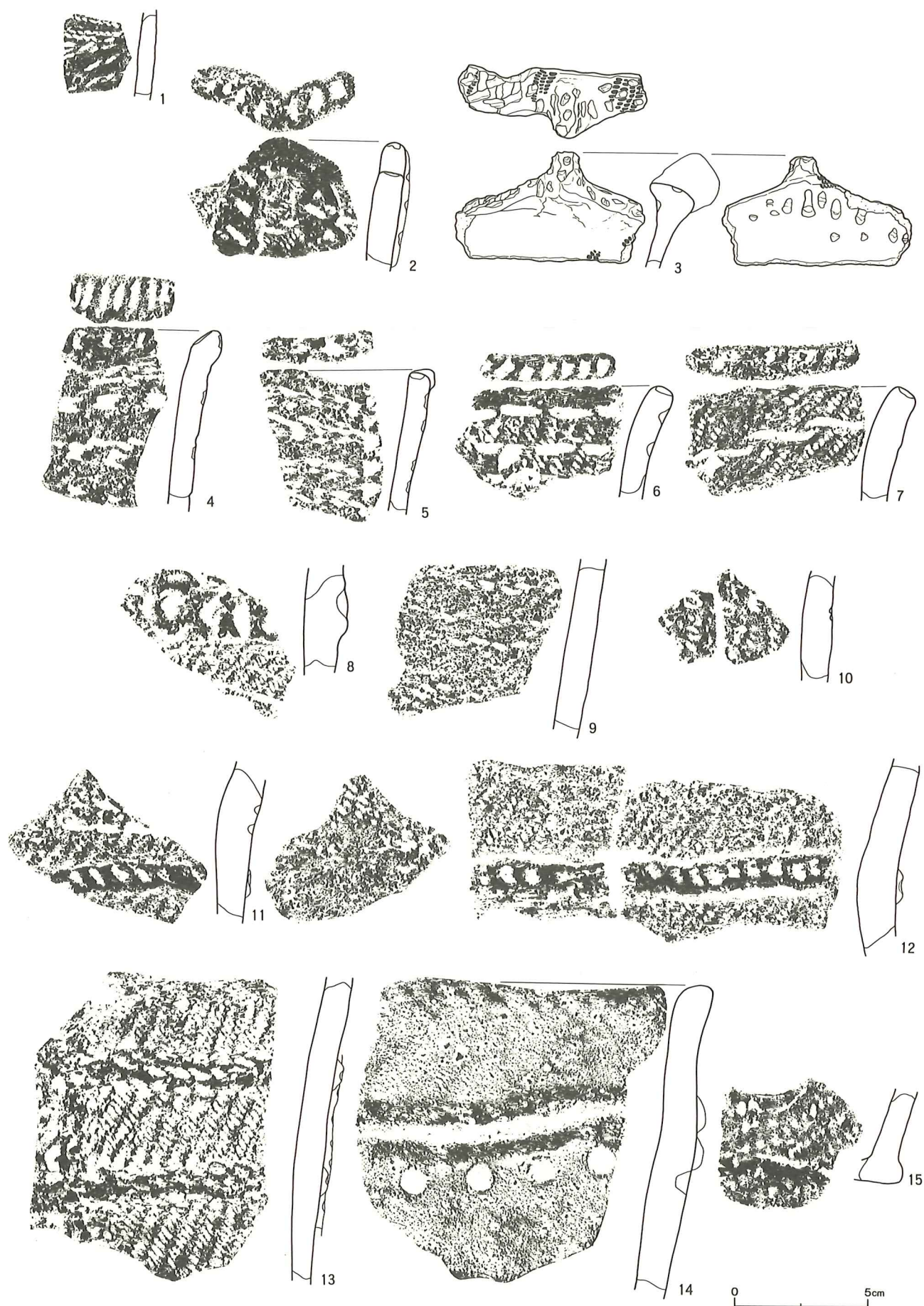
53・54は内面に縄線文が施文されるもの。

55は口縁部が無文となるもの。焼成はよい。

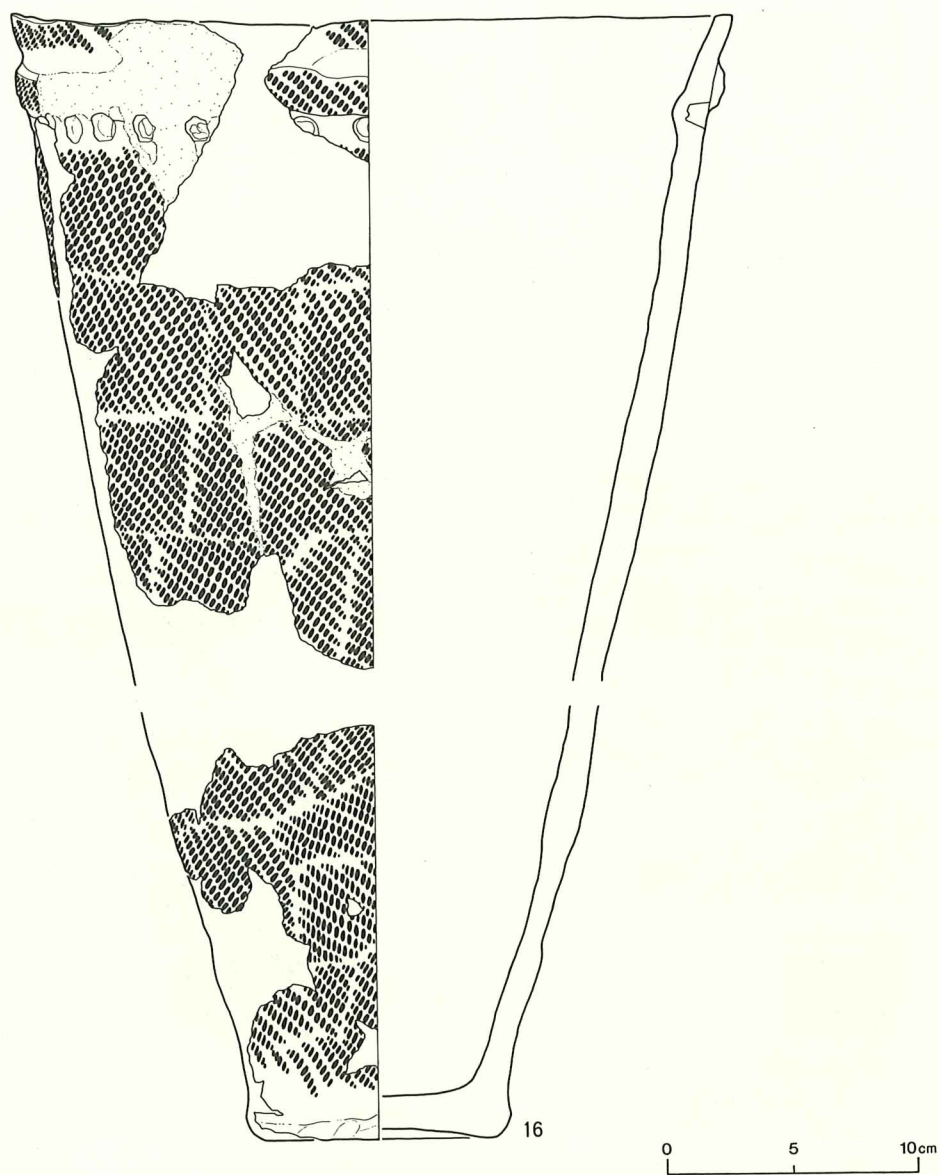
56~58は縄文のみのもの。56は口唇断面形は尖る。焼きがよく、内面は磨かれる。57は口唇上に鋸歯状に沈線が施される。58は棒状工具先端部による刻みにより口縁が小波状となる。

・張り出しをもつ鉢形土器 (59~63)

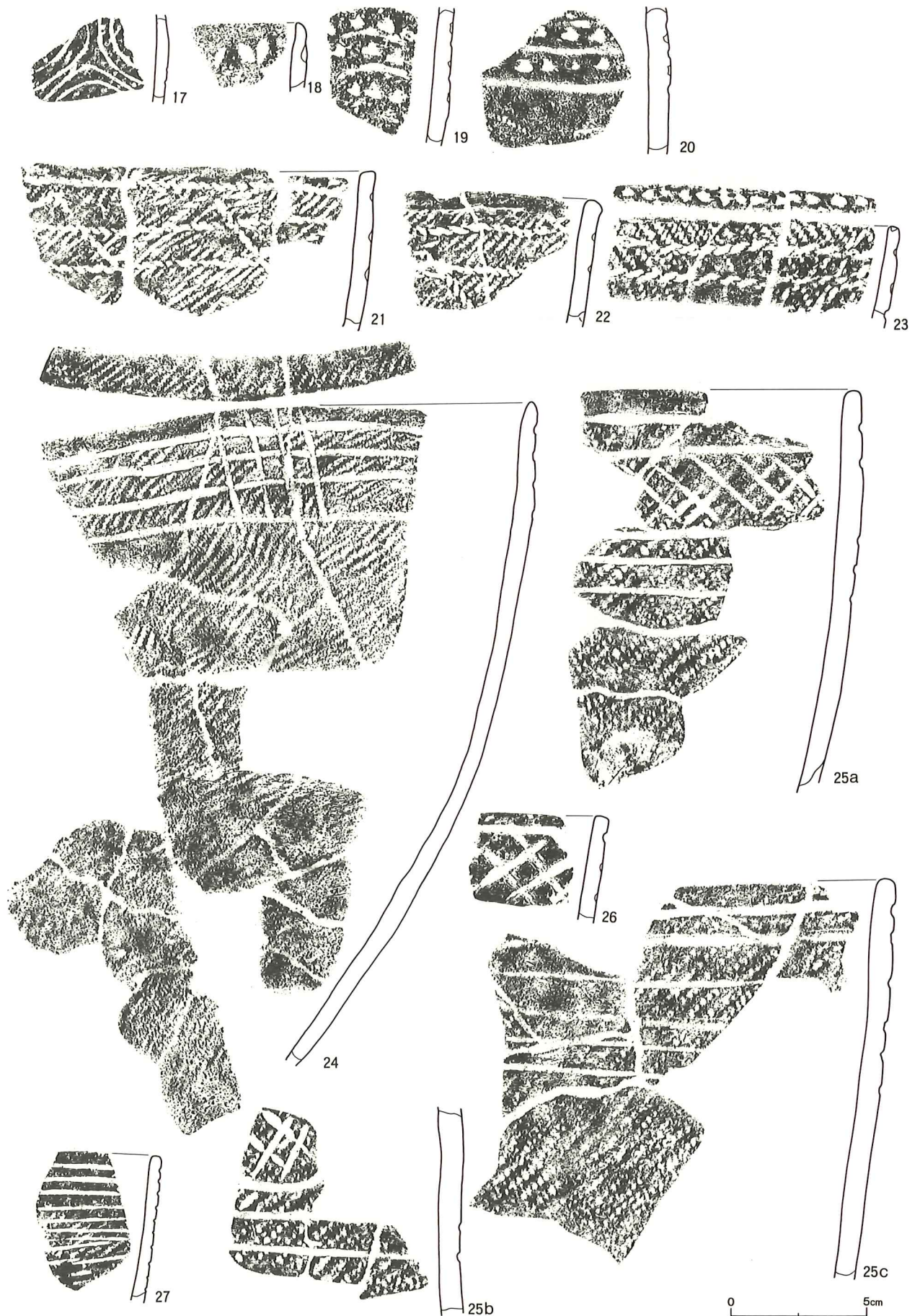
口唇断面形が切り出し状になり、口唇上に縄による刻みが施されるものが多い。胎土は62を除いて石英・長石が含まれる。59・60は貼り付けがあるもの。59は2つの小突起部の下に貼り付けが施され、



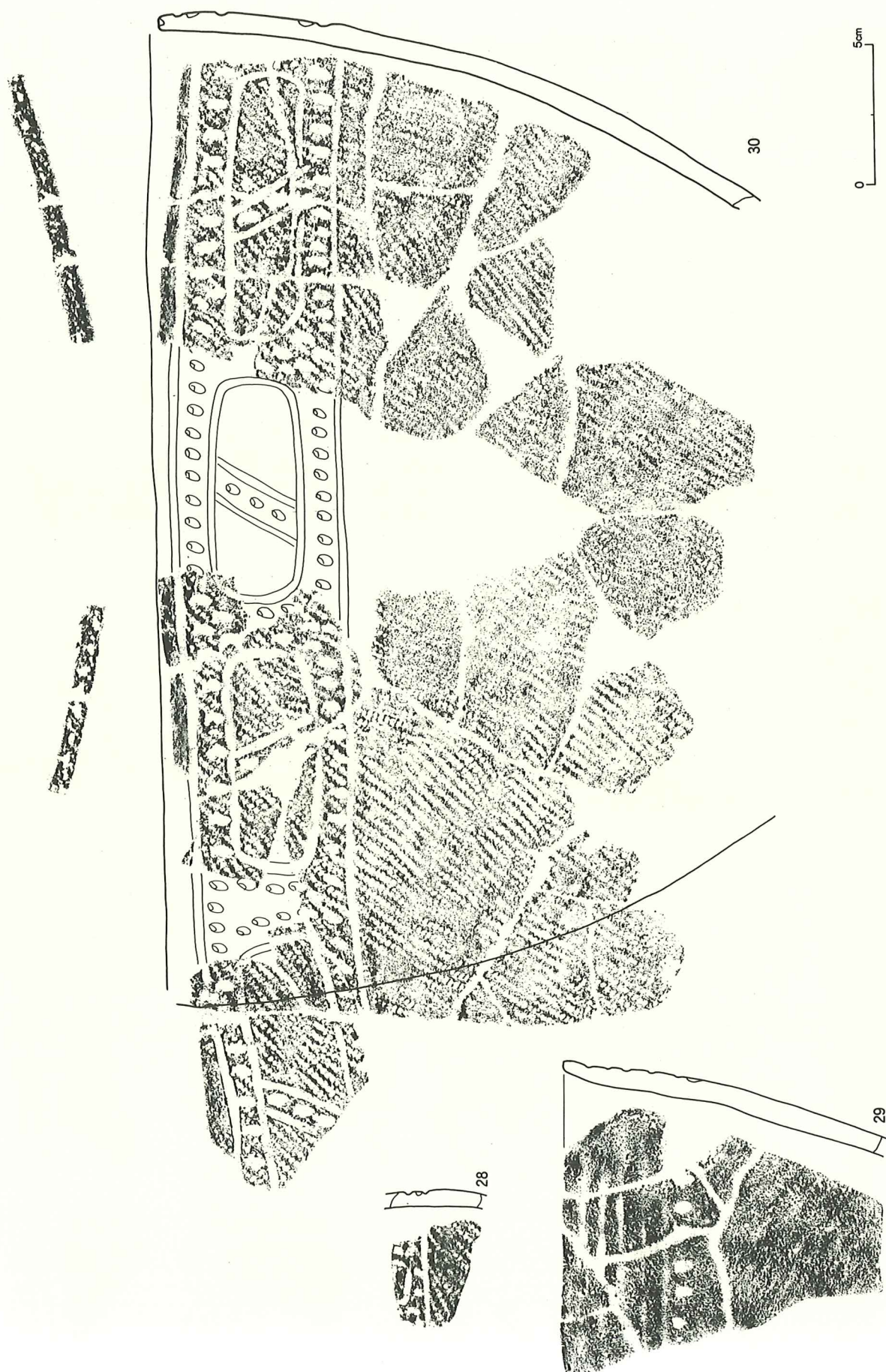
図Ⅳ-11 包含層出土のⅠ・Ⅲ群土器



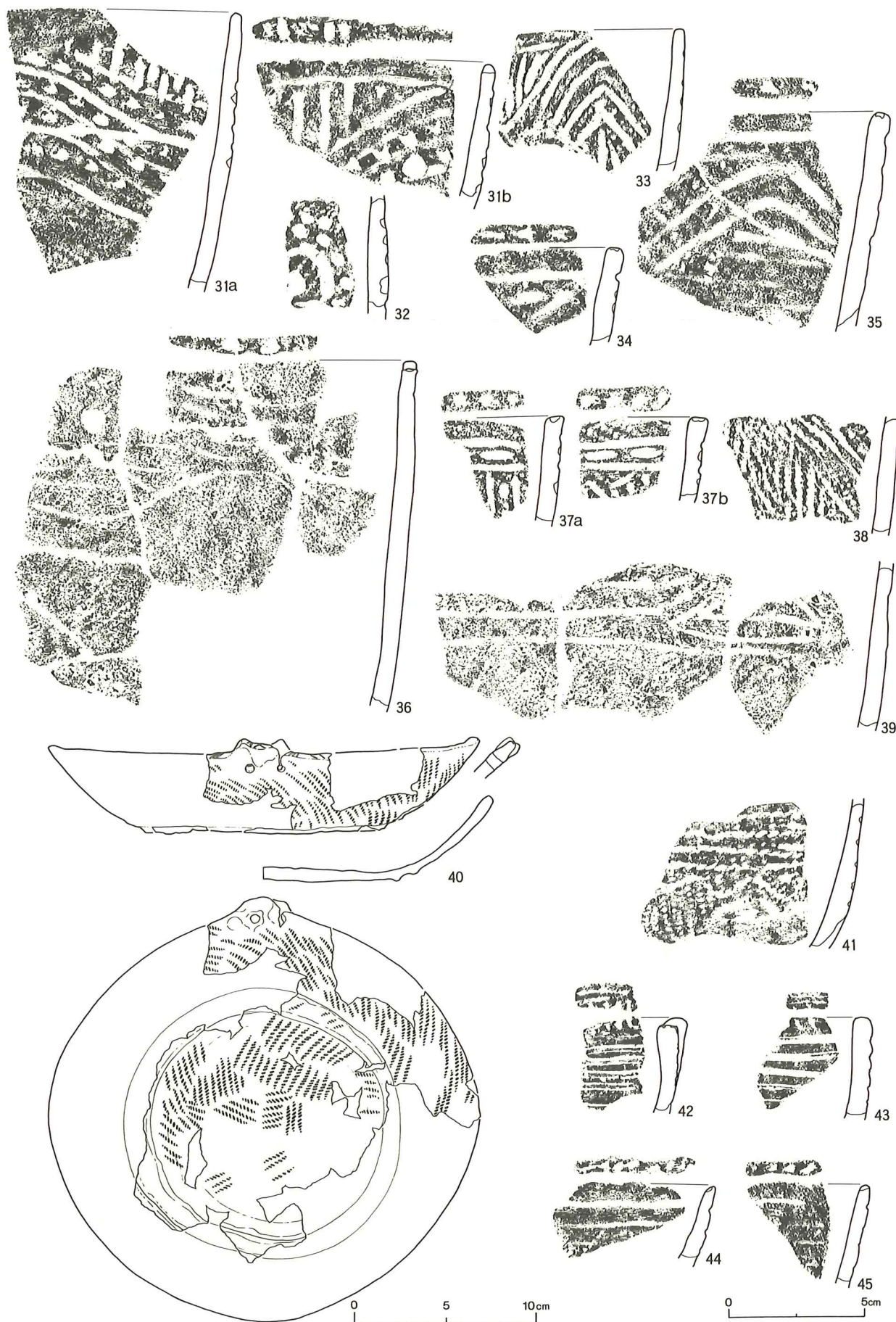
図XV-12 包含層出土のⅣ群土器(1)



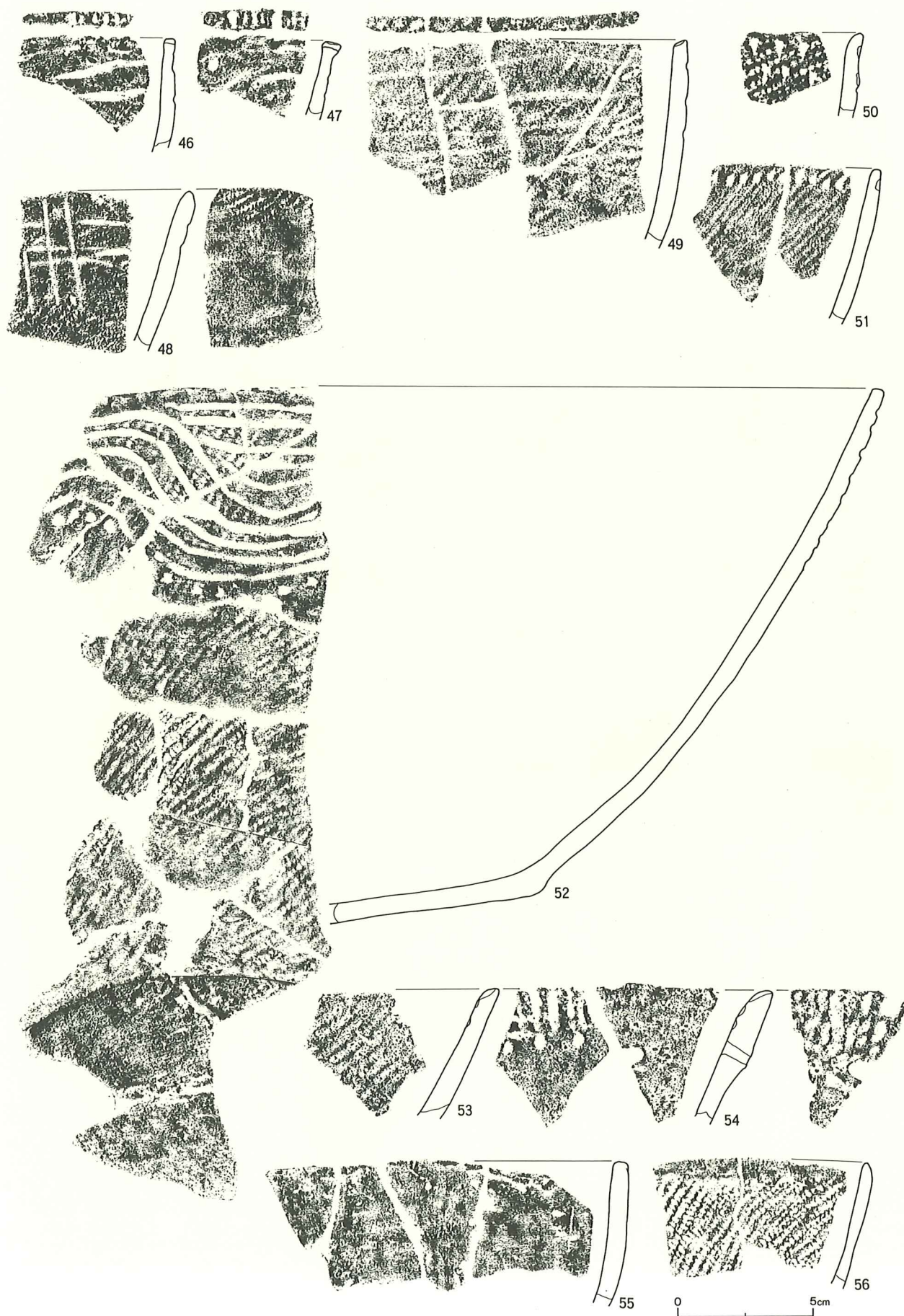
図Ⅳ-13 包含層出土のⅣ群(2)・Ⅴ群土器(1)



図XV-14 包含層出土のV群土器(2)



図Ⅳ-15 包含層出土のV群土器(3)



図XV-16 包含層出土のV群土器(4)